

あるが、これ等の人は何を祈つたかと云ふ事を取調べると、第一に親兄弟の冥福を祈り、次に美しい死に方が出来る様にと祈るとの事である。この美しい死に方を祈ると云ふところに、人類が美を愛する動物である所の、本能が動いてゐる様に思ふ。——ところが皮肉な事には、瀧の上流から流れ落ちる人達は、流れ落ちる途中に、巖で肌がすりむけたり何かして、全くヒドイ形になつて一番に醜い死に方をするのである。

巖頭から飛び込む人は大抵は頭を割つてゐる。無傷の人は極めて少く、よほどうまく遠くへ飛んだ場合のみであるとの事である。また如何なるハヅミか、瀧の裏の水のない處へ落ちる人があつて、それ等は必ず體は無傷で頭をうつてゐるとの事である。

瀧見茶屋で茶をのんで實に落ちついてゐて「婆さんイクラだい」と云つて、ガマ口共にボンと投げ出して、あつと云ふ間にかけて柵を飛び越して、瀧壺へ飛び込む人があるとの事である。これ等の人で、運よくか或は運わるくか救はれた人の話を綜合して見ると、茶屋から崖へ飛び出す人は、非常に生への執著がありながら、エイと一思ひに死へ走らうとする人達であるとの事である。即ち死を十分に決した人達は、流れに入るなり、岩頭に立つなり、或は瀧壺の方へ降り

て行くなりするので、茶屋から飛び出すのは、勇氣を鼓舞して死ぬ人と云ふ事になつてゐる。

#### 四、中禪寺湖で死ぬ人

華嚴で死ぬ者には男性が多いが中禪寺湖で死ぬ者は、女性が多い。そして舟を漕いで湖の沖へ出る人ほど、死を強く決心し、且つ度胸が良い人とされてゐる。巖頭では遺書を残さぬ人も相當にあるが、中禪寺湖で死ぬ人達は、十人が十人まで遺書を残し、且つ巖頭の遺書は文章が簡単なものが多く、湖畔のものは文章が長いが多い。

巖頭で死ぬ人は、大聲に叫ぶ人があるが、湖水で死ぬ人は、湖水が沈黙してゐる通りに黙つて靜かに死んで行くとの事である。湖で死ぬのは女と心中が多い。瀧の方では心中もあるには有るが、極めて稀であつて、男は一人で死ぬ場合に多く瀧を選び、女は一人で死ぬ場合には湖を選ぶのである。心中になると殆んど湖水であつて時々宿屋でやつてしまふ人がある。首をくゝつて死ぬ者は瀧壺の方では殆んどなく、湖畔の林に限られてゐるやうである。首つり心中もなか／＼多し。

それから瀧壺の方は水が少々冷たくても入つて行くが、——そして一度入つたら出られぬのに  
よるかも知れぬが——とにかく水の冷たさから逃れやうとする人が少く、湖水では一度飛び込ん  
で、また匍ひ上る者が中々多いとの事で、人間は死ぬにもずい分と贅澤なものである。匍ひ上つ  
た様な連中は、冷たさに心中を中止する。それ等の人間は大抵は湖水の冷たさに頭の熱がさがつ  
てしまつて、多くは中止して歸るとの事で、小数の人間が更に首をつる。それは衣物が濡れてゐ  
る事で判明するのである。

私の聞いた一番御叮嚀な死に方は三人心中で、女は二人とも毒をのみ、その苦悶を見て男がカ  
ミソリで二人の女の頸を切り、更に枝へ紐をかけたが、紐が切れたので湖水に飛び込んだのがあ  
る。——この男は女が苦悶するのを見、頸を切つて血が笹を染めた時、急に死ぬのが恐ろしくな  
つて、自分で頸を切つて見たが浅くしか切れず人家へ救ひを求めに行つたのである。これは横濱  
の男で後に發見された遺書によつて、女から死を誘惑された事が分り、軽い罪に處せられたのみ  
であるとの事である。

湖水は岸から飛び込む者は極めて少く、歩いて入らねばならぬので、冷たくてやり切れぬので  
あらう。多くは舟で漕ぎ出して死ぬので一人者には舟をかさぬ事になつてゐるが、中には盗み出  
して漕ぎ出す人もあると云ふ事である。

岸から歩いて死んだのに、面白いのがある。それは六十五六歳の婆さんであつて、首に石を包  
んだ風呂敷包をくくりつけて、湖の沖の方へ歩いて行くので、見てゐる人達は變な婆さんもある  
な、魚を捕へる籠を水底に置いて來るのだらうなどと思つてゐると、深い處へ來るなり、イキナ  
リ逆さに水の中へもぐつてしまつた。すると水の上に足が二本ニヨキリと出て、首が水につかつ  
た儘なので、始めて自殺だと分り、直ぐに水へ飛び込んで救ひに行つたが、早くも死んでしまつ  
てゐたとの事である。死ぬ人間は大抵は袖に石を入れるのが常であるが、首に石包をつけて脊の  
立つところで、逆立をして死んだのは始めて、婆さんらしい智慧のしほり方であると云つてゐ  
た。

X

湖畔で死ぬ人の心理で、なるほどなと思つた事がある。どこでも夕暮の景色は美しい事にきま

つてゐるが、わけても中禪寺湖畔の夕暮は實によい。パノラマと云つて良いか、實に何とも云へぬ詩的な景色だ。霧がすっかり湖面を夢のやうに垂れ込めて来て、橋や木や灯が淡くぼかされて浮き出し、音としては河鹿の啼く音くらひな物である。實に静寂その物である。

この湖畔を歩いてすつかり詩的になり、まだ十分に死なうとも何とも決心がついて居ない時、湖畔の旅館から三味線の音などが聞えて来ると、その音にたまらなくなつて水に飛び込むことがあるのである。これは救はれた人達が良く云ふ事である。私はふと『音楽と死』と云ふ事も考へて見た。實に夕方湖畔を歩いてゐると良い。私のやうな男でさへ薄暗い光の湖畔で新内を聞いて、この儘死んだならとさへ思つた。まして煩悶があつたならばだ。吉原で新内を禁じた時代もあつたと云ふが、湖畔で三味線の音を聞く時に、しみじみと死の誘惑を感ずると云つても良いのである。

### 五、死屍の話

死體の話であるが、瀧壺へ飛び込む人は多く死體があがらぬと云ふ話を聞いて居るのであるが、

早いのは一週間から長くて半年の後に出るのが普通である。死體が上らぬ数は十人の中に三人ほどあつてこれは遺留品と死體の數から推定されてゐる。多分瀧壺の横穴か何かの中に押し込まれて、何時の間にか骨になつてしまふのであらう。

死體は冬は危険で取りに行けず、春を待つて取るのであるが、皆大谷川へ流れ出してから取るので、多くは瀧壺の少し下流の發電所の堰の處へ引つかゝるのを拾ふので、多い時には死體が七つも八つも重つて流れよる事がある。その死體は皆一様に瀧で打たれて衣物がさけて裸になつてしまつてゐる。比較的早く上つた死體は、固くしばつた靴とバンドのみが體にくつ着いてゐる。遅れて上つたものは靴もみなはなれてしまつてゐる。且つ死體は毛髪も髭もマユ毛もX毛も、毛は全くなく皮膚は剥れて、單にぶくりと水ぶくれの丸太の如き醜骸である。而して最もヒドク傷められた死體は、手だけ流れたり、足だけ流れたり、首だけ流れたりする。眼玉は蟹の眼球のやうに飛び出してゐる。

これ等の死體を取り片づける隠亡は實に商賣だとは云へ巧みな物で、硬直してゐる死體の手足を見てゐる中に曲げて箱の中に入れてしまふので、警官もその技術には感心してしまつたと云つ

てゐた。

中禪寺湖で死ぬ者は汀に近い處で死體が見える限りは、棒や綱やカギで取るのであるが、湖心に近い處のものは永久に絶対にあがらぬ、何分にも山上湖の比重の軽い水であり且つ水深が五百六十尺の本邦第七位の深水の湖であるから、如何ともする事が出来ぬのである。湖心で死ぬ人はこの意味で、人様に迷惑をかけぬから却つて良いのかも知れぬ。

死體は海や川では、女は仰向けになつて腹を出して浮き、男は下向きに脊を出して浮ぶ事は誰でも知つてゐる事であるが、この湖水は皆石を身につけて沈むので、浮ばないのであるが、不思議な事には、男女によつて死體の向きが異なる事である、女はあほ向けに沈み男は下向きに沈む事は、川と流儀を同じくするが、女はどう云ふものか湖心に頭を向けて沈んで居り、男は湖岸に頭を向けて沈んでゐる。これも何かの學理的な理由があるのであらうが、私には分らない。紐で體をつなぎ合つた心中は、紐がよちれて前述の如く女は湖心に頭を向け、男は湖岸に頭を向けてゐると云ふ。

抱合ひ心中は、なかなか離れぬもので、時には相手の唇をしかと噛んでゐる者もあるとの事である。

ある。それ以上に猛烈な形をして死んでゐる者も時にはあると云ふ事である。

## 六、遺留品や遺書の話

巖頭の近くの木には、色んな文句を彫り込んである。墨やインキで書いたのはなく、皆ナイフで彫つてあり、中には掘つた中を墨で塗つてあるものもある。岩に彫つたのは見當らなかつた。木の肌を彫つた文句の一例をあぐれば次の様なものがある。

伊豆詩人

カルモチン

岡本照行

三瓦飲ミテ

四・六・九夕

その近くの木の洞穴には、遺留品がいつばいである。下駄、靴、フィルムに残り、鉛筆、ハンカチ、眼鏡、帽子、折れたステッキ等で、宿屋の名のついた下駄は、宿屋で持つて行くので一足もなく、高價品は警察が持つて行くので之もない。

木肌に文句を彫つた後、ナイフをグサリと其上につきさしてありナイフが其儘に錆びてゐる、

自殺志願者の群

實に凄惨な氣がする。巖頭から瀧壺は見えない。巖頭の横の木に登つて瀧壺を見ると、實に美しい、夢と云つて良いか、お囃話の庭と云つてよいか、實に此世にこんな美しい物があるかと云つて良いかと思はれる様な美しさである。蒼い水が壺に渦巻いて居り、霧が立ち込めてゐる。茲に死に來る者は、もう頭がのぼせてゐるので、この美しい景色は分らぬであらうが、冷静な頭には實に何とも云へぬ美觀である。大谷川が細く糸のやうに流れ、蠅のやうに岩燕が無數に飛んでゐる。——死ぬ人達は、こんな景色なんか眼に入らぬ事は、巖頭でさまよつてゐる時に、後から救ひに行く時、多くは眼が見えなくなつてゐるので分る事である。この事は後に細かに云ふつもりである。

此處に掲げてある寫眞は一枚は瀧の落口をへだて、藤村操の立つた岩をとつたもので、他の一枚のぼつとしてゐるのは、瀧の落口にのし掛つてゐる樹上から、瀧壺を見おろした寫眞で、この二枚の寫眞は筆者の書生が登山ロップで身をしばりつけて、全くの死を冒して撮影したものであり、冒險的な寫眞で、一步をふみはずすか、手がすべれば瀧壺へ眞逆様に落ち込む處であつた。藤村操が巖頭の感を書いた木（これは墨書であつた）は今は切り倒されてゐる。その木は何時

切つたかは不明であるが、既にすっかり朽ちてゐるから、大分前に切つたものらしい。

遺書は計畫的に小説的に書いたものもあり、短い詭文があり、ふるへてゐる書體や、字のしつかり書いてあるものもある。自殺の遺書全體を通じて殆んど例外なく書いてあると云つても良いのは『私の罪をお許し下さい』と云ふ文句だそうで、やはり弱い人達が死ぬのであらう。罪を罪とも思はぬ様な者は、生きて行くのである。

遺書の中で、一番にしつかりしたのは、巖頭で發見されたもので、これには『自殺は人間の特權である。何人が之を批判し得るや否や』と云ふのが全文で、これにはサヨナラとも住所も氏名も、別れの文句もない。實にあつさりした物であつたが、この男は巖頭をうろついてゐて捕へられて、遺書だけが光彩？を放つてゐる。

## 七、藤村操の話

藤村操の死は誰でも知つてゐる事だが、誰もあまり知らぬ事を書く。茶屋の婆さんの話である。これは、本稿を書くやうに依頼されると共に、私の書生に命じて、巖頭や、巖頭に彫んだ字の寫

眞を撮影して來いと命じて、日光へ使にやつた時、その書生が茶屋の婆さんから、聞いて來た話である。

婆さんの話と云ふのはざつと次の様なのである。

『今でも、あの方の話が出ますと、はつきり思ひ出す程に、藤村さんは好男子でしたよ。えゝ今でこそ自動車がかゝまでやつてきますが、そのときは山籠かきがゐる山籠で登つたものです。勿論山籠で登る人は身分のある人で普通の旅の方は歩いてこゝまで來ました。それが人力車になり、今では自動車になりました。それで藤村さんは二人引の車でのぼつてまゐりました。それからは少し歩いたんでせう。大分疲労の様子で私のところの座頭茶屋へまゐりました。霜降の洋服で、風にとばされぬためか帽子を手拭で頭からあてへしはつてゐました。

その時車夫が話してゐますのを耳にはさんだのですが、なんでも厚い本を途中で、樵人の焚いてゐた火の中に入れてやいてしまつたんだそうです。で良く覺へてゐますが、その時私がだしたお菓子ビスケットでした、そして御茶代に十錢頂戴しましたが、それは今の一圓位でしたらう。』

それから私の書生は、朝日新聞の記者の書いたものに、藤村操の死んだ前に、一人飛び込んだ者があると書いてあるが、藤村操の前に飛び込んだのは一人かねと聞くと、茶屋の婆さんの云ふ様には、『一人だがどうか知りませんが私の知つてゐるのは、座頭茶屋の東屋——この東屋は今でもある——に朝行つて見ると、女持ちの下駄が二足と白粉や丸い櫛や白足袋ハンカチなどが残つてゐた。それで私は昨夜は宿に泊れなくて、誰か此處へ寝たのかと思つたので、其等の品を一まとめにして置いて自分の茶屋へ歸つて來たが、夕方になつて人の話では若い女が二人死んでゐたとの事で、其當時の事だから大騒ぎをして色んな取沙汰がかはされてゐましたが、後になつて横濱の藝者だつたと云ふ事です。理由は知りません。これが華嚴始つての自殺者らしい。』との事であつた。

X

書生の話はこれで終りだが、華嚴の瀧の夜景は實に凄味がある。瀧は晝間よりも小さく見えて、更に深味が加つて見える。丁度それはダンテの地獄篇に出て來る地獄のやうで、投身した者の亡靈が動哭してゐる様に感ぜられる。杖にもたれて月を仰いでゐると、身が瀧の方へ、すつと吸ひ

つけられる様に感ぜられる。これを靈魂が招くとしても云ふのであらうか、實に物凄しい。晝の瀧を見る人は澤山にあらうが、眞夜中の十二時過ぎや一時頃に瀧を見物に出掛ける者は先づあんまり有るまいと思ふ。實に氣味の悪い景色で、眞に身の毛がよ立つ様に感ぜられる。

月光を受けて蒼白い瀧が、百雷の如く落ちてゐる様は、今も眼の前に浮んで来る。晝間は色々な色彩が、とりどりに見えるが、夜は寫眞を青く染めたとしても云はうか、活動によくある青い風景の、更に深刻なあれだ。華嚴の月夜の瀧は實に物凄しい。——山鳩がどこかで啼いてゐる。山鳩は臬よりもつと寂しいものである。

### 八、船頭から聞いた話

私が良く話をした船頭は岡甚さんと云ふ男で、實に愉快な男である。よく『おい一圓先生だ、舟を出してくれ』と云つて、月の良い夜中に良く酒をのせて舟を出させたものである。

月夜の中禪寺湖は、實に良い、神祕そのものである。瀧とは全く別の趣きがある。

静かな、ほんとに死んだ様な静寂な湖水の上を、舟がすべつて行く。月光を浴びて水が黒く澄んで居り、小波の上に月光が碎けて躍つてゐる。男體山は重く黒く聳えてゐる。湖畔の旅館の灯がちらちらと光つてゐる。全く泣きたい様な、恍惚の感にひたる。

湖心で月を仰ぐと多感である。肌さむい風がそよそよと頬を吹いて過ぎ、片雲がゆるやかに流れて行く。私は蘇東坡の事や、安部仲磨やゲーテやハイネの見た月を、舟の中にねころびながら見る。實に短かいはかない人生である。——人類の社會、そこには名譽があり權勢があり、富貴があり貧窮があり、或は光榮があり失望があり、自殺をして行く人がある。月を仰いで古人を語つてゐると、人類が何か、光榮が何か、名譽が何か、と云ふ氣になる。そして生きてゐるのがつまらなくなると共に、こんなツマラぬ人生から壓迫されて、自殺までする人々の憐れさを思ふ。雲の様に流れて月のやうに呑氣にあつさり、冴え渡つた氣持になれぬかなあと思ふ。月を見て死にたがる人もあらうが、私は月を船上で仰いでゐると生と死を忘れてしまふ、そして自分がギリシヤの哲人か何かになつたやうな氣になる。

實に中禪寺湖の月夜は良い、其處で船頭さんが色んな話を聞かせてくれるのである。

岡甚君は若い時分に、自殺者を助けやうとして、二度始末書を書かされたと云ふ。その話から

書き出さう。

岡甚君が若い時分、漁から歸つて来た時林の中で首を縊つてゐる男を見た。手や足をバタバタやつてゐるので、こりや首を吊つて間もなくだと思ひ、早速に助けてやらうと思ひ、木をよちのぼつて山刀で紐をぶすりと切ると、どたりと男が落ちた。それで直ぐに降りて色々と手當をしたが、どうしても息を吹きかへさない。それで交番へ訴へて出ると、大變に叱られて『貴様は山刀で紐を切つたから落ちて死んだのだ、靜かに足や手を持ち上げて降ろせば、生き返つた筈だ、始末書を書け』と云ふのだ。

こりや實にわからぬ話で、自分は人を助けやうと思つて紐を切つたまでと殺さうと思ふたのではない。紐を切つては生きる者も死ぬと云ふ事は、叱つた巡査から始めて書かされた話で、若し自分がその首つりを發見せず、その男がそのまゝ一人で死んでしまつたとしたら如何であらうか。助けやうとして骨折つて始末書を書かされりや、實に馬鹿らしくなる。實に分らぬ巡査である。あんな腹の立つた事はない。これからモウ人は助けまいと思つたとの事だ。

岡甚さんの話では、首吊りは手掌を開いてゐる間は助けられるので、手を握つてゐる者は、ど

うしても助からぬと云つてゐた。巡査に叱られて始末書を取られたものゝ、やつぱり死ぬ人間を見ると助けぬ譯にはゆかず、幾人も助けてゐる。

岡甚さんの第二番始末書は、水死者を助けやうとした事である。

これも夕方で漁の歸りである。舟を漕いで來ると、湖の中に立つてゐる枯木の上に、何だか猿のやうな者が、うづくまつてゐたので、變な物があるなと思つて舟を漕ぎよせて行くと、約十五間ほどの距離に近づいた時に、その猿みたいな物はヒョイと頭をあげて舟を見て、急に身を躍らせて飛び込んでしまつた。で甚さんは急に舟を漕ぎよせて浮び出るのを待つてゐて、直ぐえり首を捕へて舟へひきすり上げ、岸に舟をつけて人工呼吸をほどこした。すると俄かに口からも鼻からも血を吐いて、全く絶望の様に見えた。それから『これほど盡してもダメだ、エイよしあれ』と云つて、急いで交番へ届けた、すると巡査は直ぐに其處へ臨檢したが、其時はすでに全く事切れてゐた。ところが其巡査は人工呼吸などをしたのが分らぬ、何故身體に手をつけたかと云つて、ひどく叱りつけて、始末書を書かせた。

體が温かくて生きて居るのを見れば、人情としても助けたくなるのだが、これを叱るとは實に



わからぬ男だと、甚さんはしみじみと思つた。それからもう再び助けまいと、今度こそはと思つたとの事である。

然しやつぱり甚さんは投身をする者があると人を助けてゐるのであつて、これは人間の本能と云ふべきものであらう。だが甚さんはそれ以來、助けても決して本當の事は云はず、手可減をして報告してゐると云ふ。實に分らぬ巡査もあつた者である。然し此の譯のわからぬ巡査は、どこかへ行つてしまつて、今では實に立派な宗教家のやうな高潔な涙ある人が代りに來てゐて、村の人々から深い尊敬を拂はれ、甚さんも此度の警官には敬意を拂つてゐる。

水死人を助けて始末書を書かされて間もなく、甚さんはまた水死人に出逢つた。晝間であつて、舟を漕いで行くと岸から程遠からぬ浅い水中に、男が一人で倒れてゐた。早速に助けやうかと思つたがまた助けて叱られたのではツマらぬと云ふ冷靜な氣が起り、舟のへりに手をかけて見てみると、甚さんは實に不思議な美しさに打られたと云ふ事である。それは水死者の手と云はず足と云はず、衣物から髪まで一面に泡がついてゐて、それが丁度、眞珠を一面に體につけた様で、ことに其の長い髪についてゐる泡の如きは、水晶とも何ともたとへ様のない美しいものであつたと

の事である。それを見ると甚さんは、助けるどころか、全くその美しさに恍惚としてしまつたと云ふ。そして其男が悶くたびに、泡がぶくぶくと湯が煮る様に水面にのぼつて來て、また其後から限りない小さな泡が一面に吹き出して來る。甚さんはこの投身者の體の泡のやうな美しい寶玉は地上にはあるまい、若し出來れば其泡を一面に體につけてゐる美しい姿を、硝子張りの箱の中に入れてしまつて置きたい程だと云つてゐた。それから後に老人にも聞き、また甚さん自身も經驗した話であるが、この體に泡がついてゐる間は、引き上げても必ず助かるものだ云ふ事である。——それはとにかくとして、此時は甚さんは始末書を取られて間もない事であつたので、どうしても助ける氣が起らず、じつと泡の美しさのみを觀賞する氣分になつたと云ふ事である。

それから甚さんは死人を見棄て、漁に行き歸りに其處を通つて見ると、やつぱり水に沈んだまゝになつてゐるので、歸つて飯を食ひ着物を著かへて、ゆつくりかまへて、それから例の巡査のところへ報告すると、今度は『良く知らせてくれた』と大變にほめてくれたとの事である。甚さんは『あんな變な巡査はなかつた。助けやうとすると叱り、見殺しにするとはめてゐる、見逃しにするとほめられるとは不思議な世の中だ』と笑つてゐた。しかし此様な分らぬ警官も少いであ

甚さんの話は無限であるが、もう一つ甚さんの話をして、甚さんの話を終らう。

月夜の晩、舟を出してくれと云ふ一組の男女があつた。餘り落ちついてゐるので、甚さんは死ぬ様な人間でないと思つて、安心して舟を出したのであつたが、舟が大分沖へ出ると、二人がしきりに甚さんに酒をすゝめ出したとの事である。でコレは變だぞと甚さんは氣が付き出し、何に飛び込む隙を與へるものかと思つて、嚴重に注意をして舟を漕いでゐたが、船を横に廻す時に、一寸横を向いた間に、どう素早く結び合せたものか、二人は帯を結び合はせてしまつてゐたのであつた。——この事は後になつて分つた話であるが。

そして何氣ない會話を取り交はしながら、やつぱり甚さんに酒をすゝめる。それで甚さんは思ひきつて岸へ舟をかへそうとし、何かの拍子に一寸と後を向いた時間に、甚さんはぱたりと舟の中に投げ倒された。ほんの一寸の間をぬすんで二人が飛び込んだのである。甚さんはあんまり癪にさはつたから、浮び出て來たらピンタをなぐつてやらうと思つて、ビール瓶に手をかけて待つてゐると、やがて水死人の常として、必ず一度ばかりと浮び出て來る。あの浮び出しをやつたの

で、甚さんは早速なぐりつけてやらうと思つて漕ぎよせたがさて、一方にはまた急に助けたくなり一方には助けて置いてから、思ふぞんぶんに撲つてやりたくなつて、一人の頸筋をつかんで舟へひきずり上げやうとしたが、何分にも二人結び合せてゐるのでどうしてもあげられぬ。それから首をつかんで大聲に叫ぶけれど、遠い岸からは誰も救ひに來てくれぬ。で二人の男女を交る交る、一人を水につけたり、一人を水から出したりして、代る代る息を吸はせつゝ、どうかう一時間もかゝつて、やつとの事で岸へたどりついて、半死半生の二人を岸へ引きあげ、さて二人を撲りつけやうとしたが、疲れが一時に出て、甚さんもベツタリ半死人みたいになつて、地べたにへたばりついてしまつたとの事である。

其中に人も來てくれたので、不思議にも二人は助かり、今では東京へ歸つて大變に幸福に暮してゐるとかで、甚さんには時々再生の恩を謝して來るが、甚さん一生の間において、あんなに苦しかつたり、いまいまいましかつたり、悦ばしかつたりした記憶はないと云つてゐる。甚さん自身が地べたにへたばりついた恰好の、身振りのおかしさは、今も忘れないでゐる。人々にその眞似をしてみせると皆笑つてしまふのである。でも私は二人が今では幸福な家庭の人となつてゐるのを

聞いた時には流石に悦しかつた。

夫婦にしてくれなかつた時には、心中をしてはつまらぬが、まあ眞似でもやつて見て、親に承諾をさせるのだね。私は若い人達に本當に死なぬ様に、くれぐれも狂言程度に止めて置けと云ふ。然し首縊りの眞似だけはするものではない。あれはうつかりすると本物になる。毒をのむなら石鹼でも食つて口から泡を出して見せるのだね。死ぬのはイケませぬよ、と。

### 九、警官から聞いた話

甚さんに始末書を書かせた非常識な警官に比べて、今中禪寺湖畔にゐる警官は、實に佛のやうに良い人である。甚さんは無産黨に入つてゐるとかで、村の人からは餘り好感は持つて居られず、御本人もなかなかの毒舌家であるが、今度の警官には尊敬と愛とを持つてゐる。それで私はふと思ふたのである。甚さんが無産黨に入る様になつたのは、前にゐた譯の分らぬ警官の罪ではなからうかと思ふのである。——何となれば甚さんはなかなかの純情家である。それが純情から出發して人を助ける度に叱られ、冷淡に見棄てたり、或は助けても嘘の報告をしてゐると、却つてほ

められたりする。其處で純情な生一本の甚さんは知らず知らず、此世の不合理を感じ出して極端な方に走つたのではあるまいかと思ふのである。世に多くの純情家は、純情家なるが故に、極端に走る人達が澤山にあるのである。これ等の心理的方面は人の上に立つ者の十分に心して置かねばならぬ事である。

さて今度の警官は佐藤氏と云ふのであるが、此人は自殺者の憐れな事を私達に話す時には、目に一ばいの涙をたゝへながら話をしてくれるのである。甚さんの話では佐藤さんは、此處へ轉任されてから殆んど官服をぬいだ事がなく、死んだ者があると直ぐに飛んで行くので、服をぬいで寝てゐる暇がないのだと云ふ。實に忠實な温かい熱誠の士である。佐藤さんは未遂者を捕へても、頭から叱つた例がないとの事で、誰でも警官は分らず漢だと思つて、決して打ちとけて話をせぬものであるが、佐藤さんは『警官だつてソナ分らぬ者ばかりではありませんよ、決して新聞に出させぬから』と云つて、必ず何時か自分も、ほろりと涙を落されるとの事である。すると未遂者はその佐藤さんの涙を見ると、今まで急に張りつめてゐた心がゆるんで、急に泣き出して、何にもかも云ふてしまふとの事である。

どうして佐藤さんはあんな優しい魂の持主なのであろうか、私には人の魂を忖度する自由は許されて居らぬが、ひよつとしたら佐藤さんにも、同情してもし足りない程な、心の経験があるのではあるまいか。唯一人として、あの人をほめぬ人はない程で、あだかも未遂者のために慈父であり、教悔師のやうな氣のする人である。私はこの人を永久に此地を去らしめたくない。どうか栃木縣當局は同氏に厚い給與をなして、一生涯、死んで行く人達の面倒を見てもらひたいものである。佐藤さんは御大典に特に選ばれて京都に警備に行つたとの事であるが、その人品として、さも有る事であらう。

ところで佐藤警官の話にうつる。同氏の話はすべて自殺未遂者の實際談であつて、これから私の語たらふとする本舞臺に入るのである。今まで書いたのは死者の事であつたが、これから未遂者の言葉を通して、多くの人々を戒め得る言葉が出やうと云ふものである。

一番先きに佐藤さんから聞いた話は、十四五の處女の自殺未遂である。この娘は遺書を懐ろにして泣きながら湖畔をうろろしてゐる處を佐藤さんに捕まつたもので、事情を聞いて見ると、始めて月經を見て驚いてこれは體に異常が出来た、大變な事になつたと思つて親にも云はず、心

配のあまり飛び出して來たので、佐藤さんは靜かに娘さんに月經と云ふものと云ふ事を話すが、どうしても娘さんはソナ事はないと云ふて聞かぬので、親許へ紹介して親を呼びよせ、母親から聞かされて、始めて安心し納得して歸つたと云ふ。

これが佐藤さんが月經に驚いた娘を救つた最初であるが、その後この種の自殺原因は實に多く、親達が性教育に無關心であるために起るので、常に親達の不注意を叱つてやるのが常であると云ふた。かゝる種の自殺がなかなか多いのを聞く時、私は醫學者とし性教育の必要を痛感せずにはゐられない。

次は佐藤さんが捕へた未遂者のなかで、どう慰めて良いか、ほとほと困つたと云ふ場合の話である。これは或男が湖畔でキヨロキヨロしてゐるのを見て、不審に思つて駐在所へ引つぱつて來たのであるが、此男も例によつて何と云つても口をつぐむて話をしないのである。それで佐藤さんは涙をもつて一生懸命に説いた末にやうやくのことで口を開いたが、その第一の言葉は

『此の世に生れて來て私達がする務めだとか、享樂とかのうち何が一番大きいでせうか』  
と云ふ問ひであつた。それで佐藤さんも手を組んで考へてゐると其男が言葉をついで

『私はどんな薬でも、醫者にかゝつても治らぬ病です。』と云ひ佐藤さんに『あなたの奥様が今いらつしやいますか』と尋ねた。

すると佐藤さんは『今妻は八百屋に行つて留守だから居らぬ』と答へると、男はさも安心した様に座敷を貸してくれと云ふので、佐藤さんはしようだんに『お前は座敷で毒でも飲むのか』と云ひながら、其男を座敷へ案内すると、其男が前をまくつて猿股を解きました。それで佐藤さんは『ハハアひどいカサでもかいてゐるのだな』と思ふたが、其男は黙つて紐を解いてゐる。そして出したX物を見ると、そのX物は赤ん坊のやうであつて、こんな小さなX物は始めて見たのであつた。その男はそれから言葉を繼いで云ふた。

『私には好きな愛してゐる女が有りました、親も許してくれて、その女との結婚が實は明後日になつたのです。然し私がこうした不具者である事は、親も知らぬし、また戀人にも話をしてないのです。だが其娘さんは好きで好きでたまらず、其娘さんも自分を愛してくれてゐるのですが、愛して居ればこそ結婚の夜になつて娘さんを失望させるに忍びないし、また私が生きてゐて其人が他の男の處へ嫁いで行くのを見てゐる事は出来ぬ。それで黙つて私さへ死んでしまへば、問題

はすつかり解決する事ですから』と云つて泣き伏したとの事である。

語る佐藤さんの眼には、もう涙が光つてゐる。聞いてゐる私も胸がこつくりとつかへて來るのを感じない譯にはゆかなかつた。で佐藤さんは何と云つて良いか、なぐさめる術がなくて、黙つて國許から親をよんで、其男を渡したが、どうなつてゐる事でせうか、全く可愛そうです、やつぱり運命に泣きながら暮してゐるのではないでせうかと云つた。

この男の人には全く同情されるが、これを知らなかつた親もまた不注意と云はねばならぬ。早く僧にするか何とかしてしまへば良かったと思ふのである。それと同時にこの様な不具な人達には、しみじみと同情される。佐藤さんの話を聞いてゐる中に、私の頭の中には有持桂里と云ふ人の書いた『校正方輿輓』と云ふ本の事を思ひ出した。此本の中にはX根の小さなのを治した治例が出て居る。これは有持桂里の隣家にあつた話で、實話だと書いてある。

それは京都に住んでゐた或人の子供が、五六歳になつてもX物が出て來ぬので、清水觀音に願をかけにおまいりをした歸りに、茶店へよつた處が、其處に一人の老人が居て、どうしてお参りをしたのだと聞くので、實はコレコレですと話すと、老人は私は良い薬を知つてゐるから教へて

あげやうと云つた。それは上等の龍骨を一品だけでよいから、それを粉にして、毎日これをのみ、これを二斤ほど飲めば治るであらうと云ふ事であつた。それで悦んで歸つて早速に教へられた通りにすると、果して二斤を盡す頃に老人の云ふた通りになつたとの事である。龍骨は支那にて發掘さるる古代象類の骨であり筆者は此様な短少なX物は治した經驗を持たぬが、之にて不感性を完全に治し、その偉大な効果について驚いた事があるから、茲に附記して参考とし、X根の小さな人が試みられん事を希望しておく。

X

これも佐藤さんが困らせられた話である。それは入水する前の心中者を、宿屋からの注意で、舉動不審で捕へたのであるが、この二人は如何にしても語らず、

『語つてもあなたに私達を救ふ方法はないでせう。非常な重大な罪を犯して來たのですから』と云つて口をつむぐのであつたが、色々となだめて問ひ出すと、二人は兄妹の間柄であつて、實におとなしい、不良など云ふ分子が殆んど見えぬ者であつたと云ふ。二人は村でも評判の親孝行者で、仲の良いので評判であつたが、一三年前から不合理の關係に陥ちたもので、村の人達の

噂をこれまで否認し通して來たが、ついたへられなくなつて二人でやつて來たのであつて、これは法律では許されぬ事だし、佐藤さんも全く言葉がなかつたとの事である。仕方がなしに保護を加へて、母を呼び出して引き渡したとの事であるが、どうなつたでせうか、と佐藤さんの顔は淋しげであつた。

X

これは自分で駐在所に救ひを求めに入つて來た人の話である。

中禪寺の十一月と云へば實に寒い。その時瘦せて青い顔をしてゐるが、實に品格の高い立派な洋服を着た紳士がやつて來た。見ると瘦せてまるで骨と皮とのやうになつてゐる人で、話をしてゐる中にも軽いセキをし、血を吐いてゐたが、其男が語るには

『自分は、神戸の某電氣會社の社長の身内の者であるが、肺が非常に悪く、社長が可愛がつてくれるが、どうも此様な重病になつて、人にもうつると云ふ事は耐えられぬ事である。自分には父母も兄弟もなく、一人ぼつちであるから死んだ方が良いと思つて、この湖畔にやつて來たのであるが、其日は丁度結核豫防デーで、電車の中にも自動車にも、村の家にも豫防の事が宣傳してま

る。これを見てやはり死んだ方が良いと思ひ、死ぬ前に御迷惑をかけまいと思つておたづねしたのです』

と云ふ様な意味を語つたとの事である。これを聞いた佐藤さんは『死んでしまつては仕方がないではありませんか、肺病は氣のものですから、一つ死ぬ元氣を生きるために使つて見ようと云ふ氣にはなれませぬか。あらゆる方法を研究して戦つてごらんなさい』

と云つて其紳士を歸へしたのであるが、こんな事は澤山にあるので何時とはなしに、すつかり忘れてしまつてゐた。

すると先日、肥えた立派な男が駐在所へ入つて来て、イキナリ黙つて椅子に腰をおろして、打ち臥せになつて泣いてゐるので、佐藤さんは、また死ぬ奴が死にきれずに飛び込んで来たなと思つて出て見ると、全く見知らぬ男であるが先方がしきりに禮を云ひ

『おかげ様で命が助かりました。私をおぼえて居らつしやる筈です』

と云ふが、一向に見覚えがない。すると其男はニコニコして名刺を出したのを見ると、先年助けた神戸の男であつたので、此時は實にうれしかつたと佐藤さんが語つた。

その男の話では實に無鐵砲な抵抗療法をして、全くの意志で治したのであつて、その男は『不治の病と云ふものはないでは有りませんか、不治の病と思ふのは、自分で半分殺すことなのです』と心から愉快そうに、男性的に快活に語つたそうで、これが昔日の彼であるとは、どうしても思はれぬ程であつたとの事である。

その男は今では關東州の支店長になり、會議の事で重役三人と共に上京したのであるが、佐藤さんに一度お逢ひして御禮を申したくなつて、飛び出して来たものであるとの事であつた。

この男と話をしてゐる時、丁度折もよく宿屋の番頭が情死をする一組を駐在所へ連れて来たが、男が肺病で女が之に同情をして死にかゝつたものであつた。

佐藤さんは職業から住所氏名に年齢を聞いてから、

丁度あなたと同じ、病にかゝつて死にかけた人が、私の話を聞いて志をひるがへし死を思ひ止つたので、御覽の通りこんな丈夫になつてゐます。さああなたの話をして下さい』

と紳士をふりかへると、其紳士はイキナリ名刺を出して其心中連れの前に置いて『私はコンナ者です』

と云つて、實に雄辯に、机をたゞいて口角に泡を飛ばし、上衣をぬいで腕まくりをして見せ、『コンナに私は肥えてゐます、これが佐藤さんに救はれる時は、實に骨と皮とで瘦せて血ばかり吐いてゐました。私が良い標本ですから、死ぬのは止めて、病氣と戦ひなさい、不治の病がありませんか！』

と雄辯にマクし立てた。二人の心中組は始めはアツ氣に取られた様に、ぼんやりとして聞いてゐたが、その中に話がだんだんに分つて來ると、始めて自殺者がニッコリと笑ひ出したとの事である。

自殺者が駐在所で笑ひ出したのは、多年やつてゐるが、この二人連れが始めて、自殺者が笑ふと、紳士も笑ひ出し、實に温かい空氣がみなぎつて來たとの事で、佐藤さんは横からこれ等の人達を眺めてゐると、胸の中が温かい様な、泣きたい様な、變な愉快な氣持に囚はれたとの事である。

心中者もこれで安心して歸り、紳士も間もなく其處を辭した。佐藤さんが此話をする時には流石に瞳が輝いてゐた。私も實に胸がすつきりして、暗い氣持から救はれたやうに思つた。

## X

三人連れの女學生があつた。これは勇敢にも巖頭組であつた。話は後から辻褄を合せて察すると次の様であるらしい。滑稽とでも云はうか、少女時代の變な心理がうかゞはれる。東京の某女學校の生徒で、名前は當然に秘せねばならぬが、その文學少女が三人巖頭で死ぬ約束をしてやつて來たのである。巖頭に行くには鐵條網がある、其處をくゞらねばならぬのであるが、その鐵條網の前へ來て三人はピタリと止つてしまつた。すると自殺の主動者でなく、一番弱くて誘はれた女が『あなた方は何にしてゐるのですか、早くいらつしやいよ』と云つて、鐵條網を破壊して、すんすん熊笹を分けながらやつて行く。すると残りの發動者の二人は、ぼんやりして黙つてそれを見送つてゐると、一人はすんすん進んで、瀧の上流の川へ身を投げて、瀧から流れ落ちてしまつた。

これを黙つて見てゐた二人は、何と思つたかクルリと後向きになつて、手をつなぎながら、宿屋へやつて來た。二人連であるので宿屋では安心して泊めると、二人は平氣で笑つたり、話したりして泊つて、翌日は黙つて歸つてしまひ、二人とも平氣な顔をして學校へ通つてゐた。



ところで女の一人は行衛不明になつたので、親達は心配して手を分けて捜すと、三人連れで華巖に行つたことだけが分つたので、残りの二人を取調べると、上記の事であると云ふのである。一番に弱い娘が一人でグングン死の方へ進んで行く氣持も面白ければ、生き残つた二人が平氣な顔をして學校へ通つてゐる心理も面白い。十六七歳の頃には、普通では解釋の出來ぬ面白い心理がある。心理學者はどう説明するであらうか。

X

自殺志願者を未遂の中に救ふと、殆んど大部分は二度と死を計る者が少ない。二度と死を計る者は、死神にとりつかれてゐる者で、救ひ様がないと云つてゐる。

然し只一つ珍しい例外がある。瀧壺へ飛び込んだ人で助かつた者は、藤村操以來一人もないのであるが、只一人〇〇と云ふ男が、三度こゝに飛び込んだ話がある。華巖の瀧はドコから飛び込んでも、結局は瀧壺へ落ちる事になるのであるが、その男は第一回には瀧見茶屋の附近から飛び込むと木の枝にひつ掛つてしまつた。それからでは死ねないと思つて、また匍ひ上つて、巖頭の方へ近づいて行つた。そして巖頭の附近から、また二度の飛び込みをやつたが、また木の枝

に引きかゝつて了た。それでまた崖を匍ひ上つて来て、また自殺を計つたのである。

佐藤さんも不思議がつてゐるが、瀧壺へ入るなら、木に引きかゝつても、それから更に瀧壺に入れば良いものを、のそのそ匍ひあがつて来る心理が更に分らず、且つあの屏風のやうな岩を、どうして攀ち登つたのか、それも實に不思議だが、後になつて本人も如何して攀ち登つたのか知らぬと云つてゐる。攀ち登つてまた飛び込む處に、不可解な心理が働いてゐる。

そして最後に巖頭の附近から瀧口へ飛び込んだのである。すると其男は落口の岩の裂れ目に身がはさまつて失神してしまつたのである。後になつて本人が話した事であるが、岩に打たれた感じと水の冷たさで、自分はすつと瀧壺へ落ちて行く感じがして、何にも知らなかつたと云ふのである。——その翌日人夫が巖頭に行くと、瀧の落ち口の處の岩の裂目に男がはさまつてゐるので大騒ぎになり、それから人夫共が集つて大聲に叫んだり、石を投げたりしたので、其男はひよつくりと目をさましたのである。然し腰を打つてゐて動けぬので、佐藤さんが腰をロップでしばつて、死を決して降りて行つて、其男をロップでしばつて、上に引き上げたとの事である。

この男は一度飛び込んで失敗し、二度飛び込んで失敗し、三度飛び込んで失敗したのだから、

これは私には、生神がくつついてゐるのだからトモ死ねぬ、死んだつもりで働きませうと云つて、元氣に歸つて行つたとの事で、この男の死の動機に就ては、佐藤さんも何だか口を緘して語らぬ處を見ると、何か特別の云ふてはならぬ事情が伏在してゐるのであらうと思はれる。

X

駐在所や佐藤さんの住宅では、とても未遂者を收容しきれぬので『つけ屋』と云ふ宿屋をそれ等の人達の收容所にあて、引取人が来るのを待つてゐるのであつて、毎日二人や三人は珍らしくなく、多い時には七八人から十二三人の未遂者が泊つてゐる事があると云ふ。

佐藤さんの話では、天氣の工合によつて死ぬ日が定つてゐる様で、霧に小雨がまちつてゐる時か、霧が深く閉ぢ込めて、何にもかも包んでしまふ日が多いそうで、そんな時には必ず山には地鳴りのする様な淋しさが来る。こんな日には定つて死人が多いので、佐藤さんは大急ぎで服を着て、巡回に出掛けるのであるが、案の通り二三人は必ずやつてゐるとの事である。而して夕雨の様な日には、山の景觀が男性的に活動してゐるので、死ぬ者が極めて稀であると云ふ。

或日の事、この『つけ屋』から大變な事が出来ましたと知らせに來たから、何かまた心中でもや

つたのかと思つて出て行くと、何のことだ、つけ屋はお祭りの様な大騒ぎで、自殺組が一團になつて、鉢をたゝいて八木節やら踊りやらの眞最中であると云ふ。こりや皆な陽氣な狂人になつたのかと思つて尋ねて見ると、そのつけ屋に一人の僧さんが、自殺未遂の常宿とは知らないで泊り込んだのであるが、番頭からこゝは自殺未遂を多く泊める所だと聞いて

『それなら私が一つ御説教をしてやる、死ぬ奴なんか濟度をするのは譯がないや』と云つて、十人ほどゐた自殺や心中組みを廣間に集めて、説教をし出したとの事である。その説教なるものがまた珍無類な、實に愉快極まるもので、

『お前たちは死に來たんだらう。どうせ死ぬのならソナナ不景氣なツラをするな。酒でも飲んでうんと陽氣になつて、歌でもうたひ踊りでも踊つて、底ぬけ騒ぎをしてから死んだら、良いぢやないか』

と云つた工合で、皆に酒をのませて、坊さんも衣をぬいで、頭にネヂ鉢巻きをして踊り出したのだそうである。すると酒の酔ひのまはるにつれ、自殺志願者連もトモ愉快になつて、つい釣り込まれて箸で鉢のふちを叩いたり、飯びつを叩いたりして八木節を歌ひ出したのであつて、こ

の様な大騒ぎは中禪寺湖畔たち始つて以來初めて、宿屋の前には見物人が山のやうに居、踊つてゐる中に、皆はけろりと死ぬのを忘れて、歸つてしまつたとの嘘のやうな本當の話がある。

### 十、和尚から聞いた話

この愉快な坊さんの話をした序でに、佐藤警官と共に、中禪寺湖で良く自殺者を助ける人に、歌ヶ濱の『立木観音堂』の住職がある。この観音堂は輪王寺の直轄の古い寺で、なかなか格式の高い、朱塗りの美しい寺である。

こゝは、有名な國寶の立木観音が本尊佛であつて、高さが一丈八尺から有るものである。この外に立木観音を彫刻する際に用ひた斧、八葉鏡、銅椀と都合四點の國寶が納められてゐる。

こゝの和尚さんが、また實にエライ方で、自殺者を説破するに妙を得て居り、幾千人の人を救ふて居られるのである。中禪寺湖畔の自殺者の話を聞くには、是非ともこの和尚さんの話を聞かねばならぬ、和尚さんの話は實に澤山あるが、先に述べたのと同小異であるから、話は一つに止めて、單に私が和尚に非常な尊敬を拂つてゐる旨を書くに止めて置く。

### X

和尚さんは夕方になると縁側に出て、暮れてゆく湖面をながめてゐるのが常である。和尚は詩人だ。この湖面は美しい景色のところ、毎日こうして見て居れば飽きてしまふ筈であるが、何時見ても、どれ程眺めてゐても飽きぬ、ことに夕暮がよいですねと、實に高尚な自然美の愛好者だ。筆者も都會の俗塵がきらいで、風景の限りなき愛好者であるが、實に自然の美のすがたには何物も忘れてしまふ。私はこの點に於て日本に生れた事を幸と思ふ。

ところで和尚さんが、例によつて夕方縁に座つて柱によりかゝつて、無心に湖面をながめてゐると、後の方に建音がして

『どうにかして下さい、どうにかして下り』

と云つて一人の男が胸をかゝへながら訴へ込んで來たと云ふのである。ハハア毒を飲んで苦しみの餘りやつて來たのかと思ふと、どうも其様にも見えぬ處がある。だが和尚は慣れてゐるもので

『君は華嚴へ死にに來たのだな』

と問ふて見ると、果してその通りで

『そうです、華嚴へ死に來たのですが、大勢見てゐて、どうにも死ねません。それから茲へやつて來たのです。どうかかして下さい。どうかかして下さい』

と云つて、しきりに胸をかゝえて悶えてゐるのである。で和尚はちやんと術を心得てゐるので、冷かに

『あゝそうか、人が見てゐて死ねないかね。ぢや死ぬ道を教へてあげませう、中禪寺湖畔でも私の外、一三人しか知つてゐない處です。そこから祕密な道を行くと巖頭へ出られます、そりや深いのですよ。實に深いのですよ。目がクラ／＼する様に深いのですよ。其處の巖の上に立ちなさい。なかなか飛び込めますまいから、私が一寸指先で後から突いてあげます。するとズドンと眞逆様に落ちて、下の岩でグワンと頭を打てばそれきりです。實に何事も忘れてしまはれて樂ですよ。さあ行きませう、案内してあげます』

と云つて下駄をつき掛けて、出やうとすると其男は『まあ待つて下さい』と云つて袖をしつかりと掴むのである。和尚さんの永年の経験では、弱い女性などと異つて死にたい死にたいと強く

云ふて來る男には、死んではイケませぬと云ふと、却つて死ぬそうで、それには、イキナリ頭から殺してやらうと云ふに限るとの事である。之に反し女性は、死ぬなど云つては本當に死んでしまふので、物優しく云ふてやらねばならぬそうである。この呼吸がなかなかむづかしいと云ふ。處で其男もやはり其例であつて、和尚の袖をつかむので何時も自殺志願者を連れて行く部屋に連れて行つて、火鉢にあたりながら其男の話を聞かうとしたが、なかなか云はぬ。そして只胸を悶える様にかゝえてゐて、たゞ救ふと思つて、簡単に死ぬると思ふ所を教へてくれと云ふ。

『これをお話してもトテモあなたにも救はれぬ程、私は罪の深いものです。それはそれは恐ろしい罪を犯したのです』

と繰りかへすのみであるが、色々となだめつゝどんな人間でも決して救はれぬ筈がないのだから、まあトニカク云ふて御覽なさいと云つて、やつとの事で話をさせたそうであるが、それはそれは實に驚き入つた身の毛がよ立ち、息がつまりそうな恐ろしい犯罪で、これまでの探偵小説なんかには、全く思ひも寄らぬもので、世の中にコンナ事が有り得べきかと思はれる様な事で、和尚もこれ以上に決して語らなかつた。そしてこれはアノ男と私とだけの胸に秘めて置きませうと

云つて、私にさへも遂にもらしてくれなかつた。でも其男は遂に話したので、和尚はそれを聞き終つて

『なんだソナつまらぬ犯罪か、ハハハ氣が小さいね。私なんぞはそれ位ぢやないわ、然し今ではこうして人を救ふ役目をしてゐる。君も私の眞似をして、本當に世の中に盡すのだね。君の様な罪深い人間は、死んでしまふたからとて、それで罪が消えるものでは決してない。その罪を消すには生き永らへて、死ぬ様な血みどろになつて、世のため人のために罪の償ひをせねばならぬ。そうして其善根によつて、罪をあがなはねばならぬ。その外に救はれる途は一つもない』

と詢々と説き聞かせると、始めて男が胸から手を離し

『わかりました。之から誠の心を持つて人のために働きます』

と下山して行つたとの事である。この男は時々手紙を忘れず寄こすが、眞に涙が出るやうな忍従な生活をして、善根をつんでゐるとの事である。私はこの話を聞いて、ふと菊池寛君の『恩讐の彼方』の主人公のことを思ひ浮べざるを得なかつた。

## X

私が湖畔に滞在中に、聞いた話の中で、最も小説的であり、最も私の心の動かされたのは、今から語らうとする話であり、單に和尚の話として、一番に實のあつたものであるばかりでなく、餘りに小説的な話である。よほど此話を友人の小説家達に分けやうかとも思つたが、まあ話のついでに書いてしまはう。

この話の主人公は非常に純情的な二十四五の青年で、東京でもかなり名の通つてゐる某富豪の息子である。——此後この男のことを假りにAと呼ぶ。

Aは某大學を良い成績で卒業すると直ぐに、兄の關係してゐる會社に務めたのであつた。兄とは仲が良かったが、どうしても主義の上から折合がつかず、遂に飛び出してしまつたのである。それから父が副社長をしてゐる某會社へ勤める事になり、會計課の方へ使はれる事になつたのである。其處でも空氣が面白くなかつたが父の重役の會社であるしするので、一生懸命に働いてゐたのである、すると決算期に近い日、會計課長であり其處の重役である男がAを呼びつけて、『これをウマクやつてくれ』と云つて紙を出したのである。

これを見ると其紙は或取引の計算書であつて、その上で見ると二十萬圓の純益があるものであ

つたが、重役がAに命じた事は、これを帳面の上で、會計検査に分らぬやうにウマク、逆に損失にしてつけて置けと云ふのである。——その會計學的な、巧みなゴマ化し方に就ては、讀者に興味があるまいから述べる必要もあるまいが、とにかく斯くしてゴマ化せとの命令である。

Aはこの命令を聞くと、しばらく重役の顔をじつと見詰めてゐたが、青年の正義觀からむかむかと撲りつけたい様な氣持になる其心持を押へつけて、

『いやです私にはソナ事は出来ません。』

とボンとはねつけたのである。すると重役は色をかへて怒つて、

『若造の癖に生意氣だ、良く考へて見ろ、出来ぬ事はあるまい』——更に言をついで『君はオヤヂの息子だから、こうした祕書會計の部へ入れたのだ。オヤヂとの關係がなければ、こんな處へは入れやしないのだ。そこをよく考へて仕事をしろ。第一この一件は重役會議を経て、君のおとうさんの承諾をも得てある事だから、それに従はぬと云ふ方はない』

『でも私は私の良心に反するから出来ません——もし強いてやるのなら、他の人にやらせて下さい』

『ほう出来ぬのか、若し出来ぬなら首を切つてしまふ』

『こりや面白い。首が切れるものなら切つて下さい。私が勝つか、私の先輩が勝つか、私は輿論に訴へて戦つて見ます』

とAは昂然と云ひきつたのである。すると重役は顔の色をかへて

『うんやるならやり給へ、然しそんな事すると一週間以内には、きつと貴様の命をねらはせて見せるから』

と之もまた傲然と云つたのである。それではと、戦く胸を撫しながら、直ちに會社を飛び出して家へ歸つた。

家へ歸つて父の歸りを待つてゐるが、なかなか歸つて來ないので、兄の姿を見ると此事を先づ兄に訴へたのであるが、兄は

『お前は馬鹿だな、そんな事は世間で當り前ではないか。お前は黙つて命令にさへ従つて居れば良いではないか』

と笑つて受附けぬのである。そこへ父が歸つて來たので、父に向つて其事をなじると父も

『馬鹿つ！』

と云つたきりで、何にも云はない。どれだけ云つても『お前はまだ若い』と云ふのみである。

Aは父と兄のこの冷酷な罪惡的な言葉を聞かされると、全く兄と父とこの世とに對して、地獄の底につき落された様な幻滅を感じ、世の淺ましい姿がありありと眼に映つて來た。

Aは首をうなだれて、自分の部屋へ歸つてじつと考へ込んだ。

煩悶の一夜の間に學校の倫理の時間に『自己實現』と云ふ事を話してくれた教師の熱と言葉が、目に浮んで仕方がなかつたと云ふ。

而し自分のした事が悪いとはどうしても思はれぬ。あの二十萬圓は會社の金ではなく、世間の多くの人々の金である。これを胡麻化して横領してしまふ事は、實に大きな泥棒である。——正義の味方をすれば、父の首に繩をかけねばならぬし、父の命令に従へば世に負けねばならぬ、その矛盾に迷ひ、そうした父の子である事が、つくづくと情けなくなつた。自分の體の一部は、父によつて出來てゐる、そうすると此の血の中には罪惡と云ふ者が流れてゐるのだ。父は世間からは成功者と云はれてゐる。然し成功と云ふ事は、このやうな罪を犯して成し遂げられたものか、

しみじみと自分の體までがけがらはしく感じたと云ふのである。

この事件について、父は斷乎として横領することを云ひ張るし、母は流石に泣きつゝAの味方をして世をあざむかぬ様に父に頼んだとの事である。だが父は冷たくて、利益の外には何物もないと云ふ有様である。

遂にAは決心をした。そして正義のためにはこの事件を新聞で發表し、父の首に繩をかけ、同時に不孝の罪は自殺によつて詫びやうと思つて、遺書を家へ残して、この中禪寺湖畔にやつて來たのであつた。汽車の中や、自動車の中で實に煩悶して來たそうで、さも有るべき事であらう。

Aがついたのは夕方であつて、彼は宿もとらず一直線に中禪寺の湖畔へやつて來たのであるが、彼はふと其處で坊さんを見つけたのである。Aは無信仰な男であつたが、ふと其坊さんの姿をみて、こんな時にこそ坊さんにすがつて見やう、自分の苦しい胸の中を誰も察してくれぬ、あの坊さんだけは、この苦しい氣持を察して、自分の話に耳を傾けてくれやうと思つて、その坊さんに話しかけたのである。——この坊さんこそ、私がこの話を聞いた、立木觀音の根村和尚であつたのである。

話は何時の間にやら、小話みたいな表現になつてしまつたが、まあソレは良いとして、和尚さんはこの青年の純真な氣持を、實に愛しつゝ、目の前に青年がゐる様に、何か或る姿を見る様にして話をしてくれた。そして和尚さんは小説になりますねと云つた。私もこれは實によい小説だと思つた。

ことにAの話として、和尚が話してくれた事は、そのAが死を求めて此處へ來たのであるが、汽車の中でも自動車の中でも、暗殺者に尾行されてゐる様な氣がしてならなく、その暗殺者が無闇と恐ろしくてならなかつたとの事である。——そしてA青年は、自分でもしきりに此氣持を反省して、死に來たのだから、何も尾行なんか恐れなくても良さそうであるが、實際はそれが恐ろしくて仕方がない、自分でもこの矛盾はどうする事も出来ぬと云つてゐたとの事で、私は人間の心理の複雑さに驚くばかりである。——かゝる心理は小説家でも果して書けるかしらん。

さて和尚は以上の青年の告白を、手を組んで黙つて聞いてゐたそうであるが、青年はこれを語り終つて、最後に

『こんな譯で私は死を決して來たのですが、どうしたものでせうか』

と尋ねたとの事で、これに對する和尚の答は

『お話はそれですつかり分りました。誠にお氣持はお察しします。だが死んでは何にもなりませんね。この場合に處する方法は、さあ六ヶ敷く云つたら限りがありませんが、佛語で云はずに平易に云つて見れば「精神的に死んで精神的に生きてくれ」とでも申しませうかな』

と譯のわかつた様な、譯のわからぬ様な禪の謎みみたいな言葉であつたそうである。——すると青年は果して此言葉は分らなかつた。

『それはドンナ意味で御座いますか。もつとはつきりと私の行くべき路を教へて戴きたい』  
とまだ尾行を恐れる様に後ばかり見て、オドオドして云ふたとの事である。すると和尚は語をついだ。

『あなたの心の中には、まだ生きようとしてゐる分子が豊富に入つてゐる。それは自殺を志して一度こゝまで來た位いの人が、尾行などを恐れると云ふ筈がない』

と云つたところ、青年は

『イヤ私は尾行を恐れてゐるのではありません。私はこれを發表する前に殺されるといふ事を



恐れてゐるのです』

と反駁した。そこで和尚は

『死はすべて無です。——あなたの氣持はよく分りますが、然しあなたには未だ生くるべき任務があります。精神的に死んで精神的に生きよと云ふ事を、くだいて云へば、あなたは此の濁つた世界から足を洗つて飛び出して、あなたの心で作らなければ行くべき世界へ、自分を引つぱつて行くべき事です。——おとうさんは、あなた以上に惱んで居られる事は、私の目に見えるやうです。そしてお母様は更にそれ以上です。あなたには、年をとつて行く此二人を慰めてあげるべき大きな責任が残つてゐます』

と、かく云ふと、流石に秀才であつた彼は、直ちに自殺が愚である事を覺つた。そして質問はこれ等を如何にするかとの、實際問題の方に向いて行つたのである。そして

『では會社の方はどうしたら良いのですか』

と問ふた。これに對して和尚は

『そんな一會社のゴタゴタは小さい問題である』

と云つて中禪寺の湖水を指して云つた。

『湖の上に浮いてゐる小ぼけな舟は、結局はどうにでも風で左右されてしまひます。そしてあなたはソナナ小さな問題から頭を捨て、しまつて、世界は大きいのですから其處であなたの心を生かして行つて下さい。それで直ぐに兩親へ、自殺は思ひ止つたと云ふ手紙をお出しなさい』

かう云ふと生一本の青年は、

『私は死ぬと云つて家を出たのです。それをおめおめ死を思ひ止つたと云つたのでは、卑怯のやうに思はれます。やつぱり死んだ方が男らしいのではありませんか』

とまた疑惑に囚はれて行くのである。で和尚の説法は更に續いて行く、

『イヤ違ひます。あなたに何も家へ歸つて行けとすゝめるものではありません。また小さな會社の微々たる事なんか發表するには及ばぬではありませんか。あなたは之から自活して自分の世界を開いて行つたらよいでせう』

と云ひ、更に言葉を續けて

『あなたは心の美しい人です。だが如何に心が美しいからとて、死體までが美しいとは限りませ

まい。水ぶくれになつてブヨ／＼と水に浮き、毛は皆ぬけて、皮膚も顔もメチャメチャになりま  
す。それを隠坊に棒や竹で突きかきまわされて、自分であるか誰だか分らなくなつて葬られてしま  
ふのです。そんな状態にあなたは耐えられますか」とまで色んな細かな注意を與へたとの事であ  
る。それでA青年はピタリと疊に両手をついて『分りました』と云つて泣き伏してしまつたとの  
事である。

和尚はその時の事をよく覚えてゐる。和尚は青年がかく分つてくれたので、始めてついであつ  
た茶をのむと、實に冷たくなつてしまつてゐたとの事で、青年もやつと手をあげて、さもうまそ  
うに其冷えた茶をすゝつたと云つてゐる。

——それから三年たつてから、Aの處から和尚のところへ、其後の模様について便りがあつた  
との事である。

それによればAの家出によつて会社は大混亂に陥つて、とにかく例の二十萬圓だけは收入に  
加へ、決算報告を出したため、その会社の信用は非常に高まり、同じ様な会社がバタバタ倒れて  
ゐる間に、その会社のみは破産をまぬかれ、今では安泰にやつてゐるとの事である。

父は非常に後悔して、あの折よく忠告してくれたと禮の手紙を、手紙の中繼所へよこしたとの  
事で、Aは妻をめとり、非常に精神的にゆとりのある生活に入つてゐるとの事であつた。然しA  
はもう三年たゝねば、父に逢はぬ決心で、家へも居どころを知らせてないとの事である。

私はA青年の前途を祝福せずには居られないのであるが、此話などは一つ活動にでもして見た  
いなと思ふ。ラブシーンを一つ加へれば良いのであるが、幸にA君にはラブシーンが一つある。  
それは此話を打ちあげたのは、和尚に話す前に、その戀人であつた人に物語つてゐるので、和尚  
さんは妻と云ふのは、アノ婦人かも知れぬと笑つてゐた。とにかく妻君のセンサクはどうでも良  
い。ハッピーエンドに終つた事實映畫として、良いものが出来やうではないか。

X

『祖國』八月號で発表した『自殺志願者の群』は以上で終つたが、この隨筆集を出すに際して、  
記憶に残つてゐる物の中で面白いものを、書生に口授してこゝに追加する事にするが、極めて多  
忙中に物するものであるから、甚だ断片的であり、無系統であるのを許してほしいと思ふ。

## 十一、死と模倣

藤村操がケゴンで死ぬまでは、此處で死んだ人は一人か二人しかなかつたのが、操があの名文を書いて死んだ報が全國の新聞に出た後は、前で述べた様に年々八百を超える程になつた。操の死んだ月には七十何人かが投身した。而も大部分の人が操の様に樹へ何か書いて行つた。人間の模倣性は恐ろしい。圓本が出ればあとから／＼矢つぎ早やに、圓本洪水が出るやうに自殺までが模倣に依つて行はれる。昨年早春のことであつた。新聞には一水兵の自殺として簡單に出てゐたに過ぎなかつたが、軍隊生活が苦しかつたか、他に事情があつた爲めかわからないが、一人の水兵が湖畔の巖上に立ち、上衣を樹にかけて合掌して投身した。それから二三日した或る午後、やはり一人の水兵が湖畔へやつて來た。これを見た番頭さんが、少し様子が變だと思つたので跡をつけて行くと、水兵もこれに氣がつき、『何だつて僕の跡をつけて來るのか、僕を自殺でもすると思つてゐるのか、僕は自殺なんかしやしない』と云つて大變怒つた。これは自殺する者に限つて抱く邪推であつて、番頭は自分の推測の當つたことを感じたが、餘り先方の見幕が荒いので、その

場では『いや私もそちらの方へ用件があつて行きますので』と云つて、お茶を濁して一たん別れ、少したつて、又跡をつけて行くと、此度は水兵が戻つて來て番頭に向つて、『先日此處で水兵が死んだと云ふが何處から身を投げたのか、又その方法はどんなであつたか』と云つて、ねほりはほり尋ねるので、番頭もいよく／＼危いと思つたので、何とかしてこれを止めたいと思ひ、『軍人でありながらこんな所で死ぬなんて、不忠の極である、身を陛下に捧げながら、一身の都合とか苦しいとかで、死ぬのは全く馬鹿とも意氣地なしとも云ひやうがない』と云ふ意を強く述べたけれど、水兵はそんな議論には一向取り合はず、『その馬鹿な奴はどの岩から飛んだのか、そしてどんな風にして身を投げたか』と云ふことのみを詳しく知りたがり、番頭もやむなく、可なりくわしく知らせてしまつた。彼は其處へ行つて見たいと云つて、笑ひながら去つたので、番頭はいよく不審になつたが、何しろ人通りもまだ少なく、誰にも合はなかつたので、そのまま樹の陰にかくれて、水兵の後をつけて行くと、番頭の云つた岩の上に登るが早いのか、上衣を脱いで合掌して湖の中へ飛び込んでしまつた。實にあんなにまで眞似をするものがあるでせうかと、番頭さんは笑ひながら話した。芥川氏が睡眠劑で死んでから、睡眠藥の死亡が急に増へた。死の模倣は

恐ろしい。

## 十二、死と芝居

これは派出所の巡査の話である。

『戀愛の極致は死』と云ふ事を公式の様子に心得て、死ぬ氣持を味ひに華嚴へやつて来る人が少くない。そんなのに限つて旅館で長々と遺言をかき、如何にも自殺しさうに、時間はづれに瀧へ行つたり船を浮べたりする。土地の人々は狂言自殺とは感づいても、言葉通り萬一のことがあつてはいけないと云ふので、注意してゐると案の上、人の見てゐるのを確しかめておいて湖水に飛びこんだり、又巖頭の鐵柵をくゞつて行つたりする。これを捕へたり、助けたりするとその人々はさめ／＼と泣く。人々は芝居と知つてもさうと云ふことも出来ない。中に甚しいのになると、若い男女が一緒になりたいが、親が許さないと云ふので、狂言に自殺にやつて来る。そして舉動不審で警察へつれて來られる。巡査に事情を述べる。ともかくと親を呼ぶ。親が驚いて来る。そして、本人同志では云ひ難い話を巡査から親達に云つて貰ふ。巡査は狂言自殺とは知りつゝもさ

うと云ふことは出来ない。若しお前達は狂言自殺だと云つて、そのために本人同志が反抗心を起して、死んでしまつたら巡査の責任である。巡査や土地の人々こそいゝ面の皮であるが、今の法律は之を罰することも出来ない。芝居と知りつゝ、その芝居を許してやる。——人世は芝居なんだから、と日光の巡査は笑つた。狂言自殺が三割がたあるさうだ。

## 十二、自殺をよそほつた者

これは芝居は芝居でも深刻であり、犯罪的であり、又小説的である。しかし本當の話である。十數年前に此處の宿屋に、色の黒い前額部の妙に飛び出した、商人風の男が宿つた。翌朝早く宿を抜け出して、華嚴の瀧に飛びこんでしまつた。それは遺書と瀧の上に残された宿屋のユカタで判明した。彼は刑法上の大罪を犯して來てゐたのであつた。その男が去年、詐欺罪によつて捕縛され、原籍を追求されて包み切れずに、十數年前の狂言自殺を自白したので、土地の人は初めて彼の生きてゐたのを知つて驚いた。彼は自殺した様に見せかけ、奥日光から足尾の方へ逃げ、長年月を生ける屍として、世の中をうろついてゐたのであつた。

## 十三、迷惑な情死自殺者

中禪寺へ来て死んで行く人にもいろ／＼ある。獨りで死んで行く人、二人で固く結ばれて死んで行く人、一家が揃つて死んで行く人、又その方法にもいろ／＼ある。如何にも死にさうだなど思はれてゐるうちに死んでしまふ人、何處までも見物に來た様に見せかけてゐて、フト死んでしまふ人、大騒ぎをして遊んだあげくに死んで行く人、死んで行く人は何等かの意味で、皆思ひつめた人だから、その方法や、態度も一種の個性を帯びてゐる。いかにも世をはかなんで、生きてゐるうちから、死んだやうに見える人、此の世を思ひ切つて、かへつて、樂天的になつて陽氣に死んで行く人、又死ぬ間際まで此の世の名残りを惜しみ、あり金の最後まで菓子など買つて、子供に與へ、そして死んで行く生活難の一家心中、又その跡も美しいのもあれば、醜いものもある。人に死んだ姿や、死んだことすらも見せまいと用意して死んで行く人、詩や歌などを澤山かいて死んで行く人、或は瀧で死ぬつもりで來ても、それが恐ろしくなつて猫いらすなどを飲んで懊惱して死んで行く人、此の土地に居て死んで行く人には慣れてゐても、やはり汚い死に方をして行

く人よりは美しい死に方をして行く人に、人々の同情は注がれる。之と反對にこれから話すやうな、死んでしまへば跡はどうともかまはないと云つた様な、人の迷惑を無視した死に方をして行く人は甚だ困つたものである。

一 去年の晩秋であつた。三十二三歳の會社員と二十七八歳のその妻と稱する人が、中禪寺のK屋旅館に泊つた。スリは相手に目をつける時に、必ず服装に調和の美があるか、それが欠けてゐるかに依つてあらましの見當をつけるやうに、宿屋の番頭はお客の品位や、服装や、年齢に調和があるか、取り亂してゐるかに依つて畧々見當がつく。此の夫婦と稱する男女も、勿論何となく落付かず、悲觀してゐるやうに見へ、ことに階段を上つて行く時に倚りそうて行くので、かへつてそれは眞の夫婦ではなく、何か仔細あると直感したのださうだが、一晚たつてよく觀察しやうと思つてゐたさうであつた。ところがその夜のうちにK旅館は灰燼に歸してしまつた。此の二人は二階の一室にとちこもり、毒を飲み部屋一面に石油をそゞぎ、二人身體を結びつけて、火を放つて、情死してしまつたのである。晩秋ではあつたが、紅葉も名残りを止め、静かな秋を愛するため、旅館は満員に近く人が込入つてゐたが、皆着のみ着のまゝで焼け出され、丸焼けになつた

K旅館の迷惑のみならず、多くの旅客が非常に苦しめられた。このやうに死に至るまで他人を犠牲にしても構はぬやうなやり方は面白くないと番頭は語つた。

#### 十四、死 神

自殺を志願して、此の中禪寺に來た者は、實行者、未遂者も共に、一大決心をして來たに違ひない。幸か不幸か、土地の人にも、警官にもつかまらずに實行した人は別として、一度警官の手に渡たされて、意見なり相談なりされた人間は、二度と自殺を計る人は珍らしいと言ふ。數の多い中には、警官の意見も、迎ひに來た、親なり近親者なり友人なりの忠告も退りぞけて、再びならかの行動をとつて死にゆく人もあると言ふ。

表面は従順を装つてゐ乍ら、歸途、迎への人の油斷を覗つてゐて、逃げたり飛び込んだりする人がある。これ等の人達はよくよく、死神にとりつかれたもので、どうすることも出來ないと、S 巡査は言つてゐた。

かうした實例がある。五月雨がしとくふつてゐて、なんとも言へない自然の美が、湖畔を包

んでゐた或日、宿から番頭が來て、どうも様子のあやしい客が來てゐるから、一寸お調べを願ひたいとの報せに、丁度一日の疲れを晩食で休めてゐたS 巡査は、箸を置いてすぐ、K旅館に同道して行つた。その時S 巡査も新任早々であつたし相手があやしくとも、兎に角、宿の客であるために、女中に、今警察の方が來られて一寸お尋ねしたいことがあるから、と云つて來られましたがお通ししても宜ろしうござめますか、と客に聞いたものである。その客は『一寸用をたして來るから、どうぞお通しておいて』と言置いて便所に立つた。巡査が客の部屋に上つたときは、用をすましてそわ／＼した客も部屋に居た。様子は落着をみせてはゐるが、どこかに心理の鋭い、目の色の悪い卅歳前後の男だつた。型通り住所、姓名を丁寧に聞いて、失禮のお尋ねだが、こゝに自殺をしない來たのではないかとときつ問したとき、その男の顔色が一寸變化した様子だつたし、あわてて否定する當りがどうも、變にみへたので、少しく強く出たS 巡査は、懐中物を始め客の持物を調べてみたが、別して、異状もなかつたので、若しもそんな無考を起こしては、いけないと言ふ、意見だけに止めて歸らうとした。然しS 巡査の六感はどうも、この男を無監督でおくことが出來ずに、なほいろ／＼とその客に質問をした。客はいやが上に落着をみせ様として、二人は互

に胸の中のさぐりあいをした。

S 巡査に一寸した油断があつた。死に神が、最も誘ひかけやすい客にとつて良い機会があつたのである。それはS 巡査が便所にたつた。便所に近かつたし、また客の部屋は階下で、別に書類も兇器も持ち合してゐなかつたので、S 巡査は立つたのである。

S 巡査が便所に立つたのは職業的が必要があつたからである。それは良くある證據品を、便所にすてたのではないかと思推したからである。客は便所の戸の音と同時に、素足のまゝで、戸外に飛び出した。宿から華嚴の瀧までの道距りは相當あつたが、客はその川傳ひに瀧の方へ水の中を走つて行つた。番頭や主人が走つたがつかまらない、急を聞いてS 巡査は、川端まで追つてみたが、間に合ひ相もないので、自動車で瀧見茶屋の方へ、全速力で急がした。この所一寸映畫の追跡のシーンである。

自動車をすてた巡査が、急いで瀧口まで熊笹をすべり／＼來たときは、その自殺志願者は、瀧口から十間程手前に、ぬれぬすみになつて下つて來た。實に危いほんの瞬間の差でつかまつたのである。餘りの手数をかけられたS 巡査は、日頃のおとなしい性質を爆發させてピンタを二つ三

つやつた。

交番に連歸つてからの話であるが、此男はこの時に顔を叩かれた事を少しも覚えてゐなかつたとの話である。自殺直前の人間の氣持はよ程、興奮してゐることがこれでも解る。連れ返へされた其男は巡査の前で實に従順であつた。

生活難に加へて失戀の結果であるが、巡査の教訓を實によく聞き、迎への親の話も了解し、悪かつたと謝罪してかへつて行つたのであるが、まだ日光驛に着かない程の時間に、再び迎ひの者から、途中で逃げたから、どうぞ搜索して呉れとの電話をうけた。

良く／＼死神に根強くつかれた男で、S 巡査もがっかりしたそうである。手を盡したが、その後は不明であるとか、あんな活劇も初めてでしたと語つた。

## 十五、センチメンタル時代

人生には、センチメンタルと言ふ藥の名みたくないな、感傷時代がある者である。ことに思春期に入つて精神的にも、肉體的にも變化を來たしつゝある女性に多いのである。

月に泣き、砂丘に泣き、空に泣き、星に思ひを訴へてゐる若き頃は、旅に出ることさらそのセンチメンタルを發揮するものである。旅と言ふ文字や、旅人と言ふ言葉のもつ、魅力がセンチメンタルを、呼び起こすにふさわしいのである。

夕闇が迫り、霧に包まれて、旅館の提灯電氣がぼんやりと浮き出すとき、静寂そのものゝ中に舟もねむり、石もねむるとき、女學生達が、こゝに旅行に来て自然の美に恍惚とするも、無理のない話である。そして凡てが、悲哀に物事を運んでゆくのである。

棧橋に立つて皆がくつろいで歌ふ歌はみな、哀調たつぷりの歌ばかりである。各自が思ひ／＼に悲しみを呼びおこしては、自己陶醉におちるのである。

そこに問題が存在して来て、とりかへしのつかない間違ひを起して来る。正しいしつかりした思想をもたぬ此等の若い人達は、字句にとらはれた文學の影響を受けて、茲に感情のとりこになつて、少し位ひの悲しみを誇大に作り上げて、情にじゅんづる者が多いとか、土地の人の話である。

## 十六、車中探偵

日光驛を降りて中禪寺まで、足の強い若い者や、審美觀を多分に持つ旅行者などは、歩いて登るが、麓から自動車に乗る者も多い。

山路は相當に廣いが、くねつて居るので自動車では、時々冷や／＼するところを通らねばならない。相手が器械である。運転手の手の一寸したはずみで、何千尺の斷崖から、自動車心中をしないとも限らない。かつては一度、落ちた話もあるし、箱根の眞似を度々やられてはとそれが頭痛の種である。乗る客は、そんな心配をもつてゐるが、それに反して運転手は毎日何回と通る路であるし、うでに覺へがあるのか、客の怖ろしがるのを面白がつて、されごとを言ひ乍ら、斷崖のきはまで車體をもつて行つては、急回轉さして面白がつてゐる。面白い話がある。日運転手と言ふ愛嬌者の話であるが、自殺者の多くはこの自動車で運び上げるのですが、大抵は顔色や様子で解りますが、最も良い方法は、恐がらせをうんと言つて、例の崖のきわで急回轉を試みるのである。普通の遊覧者は『おい／＼』とか『危いなあ』とか、兎も角、冷やりとさせられるのである。



が、自殺志願者はさ程に驚かないと言ふ話である。只だまつて、うつむいたり四方の景色をながめて、車の動くまゝに身をゆだねてゐると言ふ。

運轉手一流の探偵方法である。

X

或る男の遺書にもあつた如く、自殺は人間の持つ特權であるに違ひない。他の動物に自殺があるとかないとか、學界で問題にされたことはあるが、目下のところ人間だけのやうである。然し生の欲求の強いのも人間が一番であるのは面白い現象である。

未來の希望も抱負も、凡て青春の熱情に燃へ立たし盡して終る一方には、氣息奄々未だ事業にこびりついて、明日の短きをも忘れようとして、思ふ存分生を貪つてゐる人間もゐる。

自殺者の大部分が、戀愛に端を發してゐる以上、青年に最も多いのもいなめない。

がいて日本人に自殺が多いのは、國民性が詩的であることや、地理的環境や、自殺讚美の傳統的思想の影響であらう。

X

戀愛と自殺とは正反對に脊中合せのものである。一方は死で、一方は生である。戀愛自殺者の多くはこの生への強い執着を、戀の追求に一頓挫をきたしたために、急廻轉して未來への生に延長するのである。

永遠の生を、瞬間の情にじゅんじゅんする快感を、現世の置土産にして未來に生きやうとするのである。

## リカルテ將軍

### 一、淋しいカフェー

横濱の山下町一四九といへば、ちようどインターナショナル銀行の方から、支那人街へ出やうとするところだが、そこにハリハン・カフェーと呼ぶ、さゝやかな喫茶店がある。地震ですさんだバラツクの町にも、とりわけて貧弱な店で、蒸し暑いトタン屋根の下に、いつも空の椅子が五六脚、たいくつさに欠伸でもしさうに並んでゐる。見かけるときは、いつも客のゐたためしが無い様な、客の稀な淋しい店だ。

入口の標札には、南彦助と出てゐるが、『いらつしやいませ』と挨拶するのを見ると、南洋の血がながれてゐるが、それでも晴々した瞳の快活な娘で、その奥にはまた母かと思える瘦柄な、かなりの年輩の女がすはつてゐる。二人ともニコ／＼といつも愛嬌がよいが、まだ日本には慣れない

いと見えて、言葉がもどかしそうである。時たま立ちよるカフェー廻りらしいのから、冗談を云はれても、悪るい顔ひとつせず、南洋の人めづらしい氣高きがある。

夕方から夜へかけて、主人らしい色の黒い頑丈な體の持主が、マドラス・パイプをくはへながら、白いコック服をきて客へコーヒーなど運んだりしてゐるが、これまた明らかに日本人ではない。暇さへあればいつも黙つて電燈の下で、外國の本や雑誌に読みふけてゐる。英語などで話しかければ、至つて物柔かで腰もひくい、その眼にはどことなく、云ひやうのない犯しがたい光がある。和らかさと鋭さと威厳がある。

この淋しいカフェーにも、月に一二度は非常に賑かな時がある。それはフィリッピンから船がついた時で、その時だけは流石にいつも淋しい店も、ぎつしりと一ぱいの人になり、香りの高いマニラ煙草をふかしながら、人々は大聲に話したり、机をたたいて論じたり、娘さん達と笑ひ合つたりしてゐる。

この日のカフェーは忽ち飯屋に變ずるので、いつもコーヒーしか賣らない店が、どの客へも飯を出してをり、椅子がないので立ちながら食つてゐる人達さへある。おかみさんと娘さんは、食

物を出すのに天手古舞をしてをり、客のなかからも手傳つてゐる者がある。

こゝはカフェーであり、飯屋でもあるやうだが、その賑ひのなかに立つてみると、人々の中に漂つてゐる空氣が、普通のカフェーと異つてゐるのを感じない譯にゆかぬ。即ち其處ではカフェーの主人や娘に對する客といつた風でなしに、むしろ客が主人や娘に非常に敬意を拂つてゐるのが見受けられる。——かうした賑さは船が出ると共に去つてしまつて、あとの店はまた、がらんとした空椅子の淋しさに歸り、羽蟲が電燈に集つてゐるだけになるのだ。

フィリッピンから船が着いた時だけ賑つた食堂になる店、そして平生は淋しい喫茶店。それは主人がフィリッピン人であるせいだろうか。それとも何か別なわけがあるのだろうか。とにかく不思議なカフェーであるに相違ない。たまさかな日本人の客は、通りすがりに何心なく立ち寄つて、淋しい店だと思つたきりで、無心に去つて行くのであるが、我れ我れのやうな、この人達の素情を知つてゐるものは、この淋しいカフェーの椅子に腰かけて、主人や主婦や娘と話をとり交はしてゐると、世が世であらばなあと、思はずしもほろりとさせられるのだ。つましい貧しい生活でありながら、貧しさに比例して、この一家の人達が神々しく見えるのだ。

然らばこの主人はそもそも何者であらうか。これこそ南彦助と變名してゐる、フィリッピン獨立運動の首領、エリミオ・リカルテ將軍で、カフェーは其の假り寢の佗び住居である。

それでフィリッピンから船の來るたびに、かくは此の店の賑はう次第なのだ。人々は争つて將軍の亡命の心をなぐさめるためにやつて來て、將軍の健かな顔をとりまひて、過去の追憶や、現在の祖國の非運や、悲觀すべき未來のことなどを語りあふのだ。涙多き青年は其處でフィリッピンの獨立の歌を唄ひ、慷慨悲憤の士は、拳で机を叩きながら叫ぶのだ。

フィリッピンの獨立と云へば、すぐに人々はアギナルド將軍のことを思ひ出すであらう。彼はあたかもフィリッピンの運命を、一人で荷なつて立つてゐた偉丈夫のやうに傳へられ、押川春浪などの小説にまで、天晴れの英雄ぶりを歌はれてゐるが、事實は日本へ傳へられてゐるのは正反對だ。なるほど彼の詩人にふさはしい容貌をした、若きアギナルドは、その美しい姿と魅力と智慧と火のやうな熱辯によつて、フィリッピンの獨立軍のリーダーとなり、スペイン軍を打ち破つて獨立を宣言するや、先は衆望を負ふて大統領に押されたのであつた。しかし再びアメリカとの戦端が開かれた時の、彼の態度はどうであつたか。

潮のやうなアメリカ軍に對して、茫然自失したのは彼でなかつたか。第一にアメリカの陣門に降つたのは彼でなかつたか。要するに彼は一個の口舌の雄に過ぎなかつたのだ。彼は形容詞と芝居の英雄に外ならなかつたのだ。眞個の獨立家としての、忍耐力と大艱難に處して敢然たる勇氣を缺いてゐた。花の如く華かで、花のやうに萎れるのも早かつた。順風に乗じて天馬の空を行くが如く、逆遇になれば直ぐに腰の折れてしまふ怯懦漢に外ならなかつたのだ。

大統領であり總司令官であつたアギナルドが、降を請うたにも係らず、獨り殘兵を率ひて死守轉戦して終りまで降らなかつたのは、實にわがリカルテ將軍である。孤壘日に危きを護りつつ、祖國の難に殉ぜんとしたのであつた、獨立軍の勇氣と忍耐と光榮とは、實にリカテル猛將軍あつたればこそである。

### フィリッピン獨立の烽火

フィリッピンは始め、スペインに占領されてゐたのであるが、このスペインの殖民政策なるものは、其の土地に強大なる兵制を敷いて民衆を威壓すると共に、宗教政策を併用し、殖民地を涸

渴せしめると云ふ様な亂暴なものであつたために、無用な大伽藍は所々に建設され、僧侶は貴族のやうな豪奢に耽つてゐた。そしてその僧侶の數は、軍隊と略々同數に達する有様で、これ等の者が豪奢な生活をするために、フィリッピンは戒嚴的な酷令と、不斷の苛斂誅求の下に置かれたのであつた。奪へるだけ奪へ。吸ひ取れるだけ吸ひ取れ。と云ふ惡魔か強盜に等しい者共に寄生されてゐた譯である。民衆は働いても働いても、重税からまぬかれることが出來ず、働けば働くほど、よけいに奪はれるといふ有様で、貧苦は全土を支配し、怨みは全道に滿ち渡つた。幸福は奪はれ、愛は奪はれ、光明も希望も消え果て、たゞ前途には絶望と暗黒があるばかり、僅かに悲しみを一杯の椰子酒に心やる外はなかつた。

この時突然、スペイン首府マドリッドに留學してゐたホーサー・リザール博士が、獨立運動のために捕へられんとして、秘かに國へ歸つて來た。彼はスペインの都の繁榮と淫蕩を見、彼等の豪奢に驚いた目で、祖國の人々の生活を見たのであつた。同胞はなんと云ふ憐れな生活をしてゐることか、自由もなく、平和もなく、たゞ呻吟だけを持つてゐる。ああスペインの淫蕩よ繁榮よ豪奢よ、そはわが同胞の人身御供から得たものであつたかと、彼の血潮は燃えた。

リザールは辯護士を開業してパンを得る傍ら、暇さへあれば同胞の間を駆けまはつて、獨言を鼓吹したのであつた。彼は非常な雄辯家であると共に、フィリツピンが今なほ誇つてゐる、大な國民詩人であつた。雷のやうな雄辯に、焰のやうな詩と文章とで、彼は眠れる同胞の魂を呼びさますために働いたのであつた。——かくして間もなく、この熱烈な新歸朝者を中心に、愛國の血に燃ゆる青年の秘密結社が出来、ここを中心として全フィリツピン獨立熱は燎原の火のやうに燃えひろまつたのである。

*La Independencia* なる秘密新聞は發行され、人々は來るべき日のために、獨立の旗三星旗さへも作つた。——彼等は、やがて曉の潮風にこの旗の翻るのを待ちに待つたのである。

しかし斯の如き獨立準備が、どうして顯はれずに居ろう。政府は遂に之を探知し、リザール博士は捕へられ、重立つた同志五名と共に、絞首臺上の露と消へたのである。死刑の前夜、彼は死を豫感して、盡きぬ愛國の情を一篇の詩に託したのである。句と句は肉片にて飾られ、言葉と言葉の間に血が滲んでゐる。この詩は彼の死刑後公にせられ、いまでも獨立の歌と共に、あまねく人々に唄はれてゐる。いま其の散文譯を左に掲げてみよう。

1

さらば祖國、陽に輝きし

東の海の眞珠の國、エデンよ

我は汝が爲めに悦びて黄泉へ行かなん  
たとへ生命は若く希望に燃ゆればとて  
汝が爲めにはなどか命の惜しからむ

2

戦の庭の、闘ひ酣はなる時

人は命を捨てて疑ふことなし

柳も百合も、月桂樹も絞首臺も

戰場も格闘も悲愴なる殉教も

祖國のためには選ぶことなし

3

我れが此の世を去り行く時

リカルテ將軍

漢方醫學餘談

しのゝめは赤く空を染め、夜は明けんとす  
この紅は我が血なり  
祖國よ、この血を用ひよ  
赤き一筋の夜明けの光を

4

我がいとけなき日の数々の夢も  
元氣澁澁たりし青年の日の夢も  
たゞ汝、東海の眞珠の國フィリッピンが  
涙に暗き眼を拭ひ、うなだれし額を上げ  
悲哀と屈辱を打ち拂ふことのみなりき

5

我が生涯の夢!! 燃ゆる熱情!!  
萬歳!! と死に行く魂は叫ぶ  
太陽にめぐまれし火の國のため

我が生命を捧ぐるは光榮なり

永遠の夜を通し、我は汝の胸に宿らん

6

時經て草茂き我が墓場に  
一輪の小さき花開かば  
願くば手折りて汝の唇につけよ  
地下に眠る我が額に  
汝の温かき心と強き意志を感じん

7

やがて幽寂なる月、我が墓地を照らし  
又曉の縋めやすき光が我が墓標を染めん  
或は又悲しき風があたり物騒がしく吹くこともあらん  
その時若し一羽の小鳥が我が近くに來らば  
思ひのまゝにその清らかなる調べを唄はしめよ

リカルテ將軍

嗚呼、輝ける太陽よ現はれて雲霧を一掃せしめよ

我が臨終の繰言を天の彼方に吹き散らせ

黄昏の空、澄み渡りて静かなる時

若し同胞が我が早き死を悼まば

願くば我が魂を天が受けんことを祈れ

9

又若くして逝きし人々のため

不正なる壓制に泣く人々のため

愛兒を失ひて悲しむ母親のため

孤兒、寡婦、鐵窓裡に呻吟する志士のため

その贖罪を祈られよ

10

眞黒き夜が襲ひ來り

墓所にはたゞ精靈がさまよう時

死の神秘と静寂の中に

かそかなる琴の音響き來らん

そは我なり、そは祖國を想ふ我が聲なり

11

かくて年經、我が墓をおとの訪ふ人も絶え

墓石もくちて跡なき時

鋤よ我が柩の箱を破り

我が死灰を國土に撒け

死灰が空しく埋没せむうちに

12

我が死灰、深き谷間におちい陥らば

願くば我が國土の谷間を飾らん

清き調べ、妙なる樂

リカルテ將軍

香と光と彩と歌と

凡ては我が信仰の聲とならむ

13

おゝ尊き祖國、神々しき悲哀

愛するフィリッピンよ、我が別れの言葉を聴け

我れ今兩親、家族を捨て

壓制と悪政の羈絆を脱し

自由なる神の國へ行かんとす

14

さらば我が結縁の父母

最も愛せし竹馬の友よ

我は今、うき世を去つて神の許へ行かんとす

さらば遠きにある友よ、愛する人々よ、さらば

死は休憩なり

リザールの死刑！ 飛報は晴天の霹靂のやうにフィリッピンの津々浦々に傳つた。この一刹那、今まで押へに押へつけられてゐた島民の鬱勃の氣は一時に爆發した。

一八九六年八月二十六日、先づ其時の新人アギナルドは同志を集めて、カヴィテ州に兵をあぐりや、全國はたちまち響に應じて一齊に立ち上つた。銃あるものは銃をとり、劍あるものは劍をとり、斧や棍棒や鋤や鎌をもつて、女も子供も一齊に憤起した。一揆は弘まり組織化され、各々民族の英雄をその中心人物に選んだ。そもそもフィリッピンは三つの種族からなつてゐるのであつて、ダゴロ族からはアギナルドが選ばれ、イロゴット族からはアレトニオ・ルーナーが推され、ミンドロ族からはリカルテが選ばれた。そして此の三種族の聯合軍は、總首領にはアギナルドを選び、後これを大統領にしたのである。

當時の總督はドン・ローマンブランコ・エレナスであつたが、非常な腰ぬけで暴徒を如何ともする事が出来ず、懐柔策をとるだけであつたので免職となり、ドン・カミーロ・バラヴィエハ將軍が代つて總督に附いたが、多病で職を全うすることが出来ず、リヴェラ將軍が之に代つてピナ・バートの要塞に立てこもり、一揆の鎮壓にかかつた。



然し獨立軍の勢は日に盛んで、とても鎮壓の見込がないので、スペイン軍は使をアギナルドに遣はし、年月をきつて獨立を許すといふ命令の下に、徐々に不平分子を除く目的で媾和を提議した。かくて一八九七年、即ち明治三十年の十二月にピアック・ナ・バトー媾和條約が締結された。

その條約によれば、アギナルドが與黨と共にフィリッピンより香港に行く時、四百萬弗の償金を與へ、若しフィリッピン軍が銃を八百個スペインに渡す時は更に二百萬弗を與へ、銃が一千個以上にのぼる時は更らに二百萬弗を與ふること、都合一千萬弗の償金を與ふるといふのである。

アギナルドも不完全な武器をもつて約一ヶ年半も戦つて獨立が出来ず、果して獨立が成功するやら、せぬのやら分らぬので、それでは償金を取つて一時フィリッピンを退き、その金で武器を買ひ收めるが得策だといふので、この和議に應じた譯である。

かくしてアギナルドは、部下の將校四十名と共に香港へ移り、香港在住の志士と相謀つて、フィリッピン委員會を開き、アギナルドが會長になり、ルーナーとリカルテが軍務を司り、ボンセが書記官長といふ格になつたのである。ボンセが宮崎滔天と共に起した布引丸事件の事は他日稿を改めて書くつもりだ。アギナルドが香港に移ると間もなく、スペイン本國からはオーガスチン總

督が赴任して來て、著々として軍備をととのへ、再び獨立軍の乗することが出来ないやうにしてしまつた。このやうにして香港の假政府と、オーガスチンが睨みあひの姿となつたが、間もなくスペインはキューバ島の問題で、アメリカと戦端を開くことになつたので、其の機に乗じて獨立軍は再びフィリッピンの土を踏むことが出來た次第である。

### 三、香港の假政府

香港の假政府は、島の東部の山下にある三層樓であつて、後には榕樹がこんもりと繁つて涼しい木蔭を作つてゐた。

この榕樹の三層樓に志士達は會して、大事を議したのであるが、總務はアギナルドが執り、事務は先に述べたやうにルーナーとリカルテが當り、香港のマリアテレス街に、貿易商を開いてゐたバサといふ富豪が大藏大臣にあげられ、サンチゴといふ男が外務大臣に擬せられてゐた。このサンチゴといふ男は、香港の軍器街の角の家で、自轉車屋をやつてゐた快男子で、派手な競争服を着て、大聲に人を押しつける向つ張りの強い男であつた。革命時代には、いろんな妙なところ

から人材が飛び出すものであるが、自轉車屋の外務大臣などは、たしかに異例的興味をそそるものである。彼は今では現に、ブラカン州の州知事をして、靜かに時の至るを待つてゐる。

香港に獨立假政府が出来たと云ふ報が、一度本國に達すると、義捐金はたちまち集り、男は道具を賣り、時計を賣り、女は筭や指輪を賣つて送金して來た。その額が百萬兩の巨額にのびり、それで先づ船を買ひ込んだのであつた。

獨立運動家のうちには、アメリカの助けを借つて獨立を計らうとするアギナルドの一派と、日本の助けによらうとするラモスやリカルテ等の一派があつたが、愈々香港に假政府が出来ると、支那を破つた日本の援助を請はうといふ説が有力になつて、日本公使といふ格で、法學博士のホーセ・ラモス氏がやつて來たのであるが、當時の外務省は今もかわらぬ腰ぬけで、ラモス一行に非常な冷遇を與へるばかりか、當時の外相であつた陸奥宗光の如きは、彼等に向つて『君等は日本のやうな貧乏國に従ふよりも、日本よりも金があつて、もつと文明なアメリカの屬國になる方が、フィリッピンとして、どれほど幸福か分らないぢやないか。』といふ事を、恥づかしくもなく云ひきつたのである。この當時のことを僕等は考へ出しただけで、ぞつと冷汗が背中にながれ

るのを感じる次第である。

それでラモスは更にフィリッピンの州知事の連判状をもつて來て、若し日本の援助の下に獨立することができれば、日本の保護國になるといふことを誓約したのであつたが、陸奥はアメリカを恐れ、そのまゝ握りつぶしてしまつた。實に腑甲斐ない次第であつて、東洋の同胞民族に對して恥かしい限りである。

ラモスが日本へ渡るとき、フィリッピン第一の彫刻家といはれてゐた、アバジブルの作つた、明治天皇と皇后との大理石の肖像を献上のために携へて來たのだつたが、右に云つたやうな外務省の冷淡な煮えきらぬ態度に、すつかり使節達は落膽して、そのまゝ献上せず持ち歸つてしまつた。

いまでもこの肖像は、香港の大蔵大臣のバサ氏の邸内に建てられた、ホーサー・リザル博士の記念圖書館の中に飾つてある。すばらしい出來ばえであつて、これを見る度に、僕等は當年のことを回想して顔を赤らめるのである。

日本政府との交渉がこんな有様で、使節の一行はラモスを後に残して、香港に引きあげたが、

ラモスは獨り踏み止つて外務省や有志の間を説いてまはつてゐた。其の中に香港では親米派がいよいよ勢力を得て、遂にアギナルドの説が通つて、日本の助けを借らずに、アメリカ一個の力を借つて事を達しやうといふ事になり、それやこれやでラモス氏の處へは假政府からの送金が全く絶えてしまひ、彼は非常な困苦に墜ちたのである。

然るに彼が日本へ來ると早々にも、フィリッピンの獨立に火のやうな同情をもつてゐた石川やす子といふ婦人と相識るやうになり、二人は繁々と交つてゐたが、二人の間は同情から戀愛へと變つてゆき、横濱の山の手の家を持つことになつたが、假政府からの送金が斷へると共に、やす子は晝は魚を賣つて歩き、夜は按摩をしてその情人を食はせたのであつた。その時分の貧しいラモスの様子と、けなげなやす子氏の働きは、フィリッピン獨立運動史の中に永遠に傳へたい美しいローマンスである。

その後、妻の儲けた金でラモスは、いろいろ工面をして、七面鳥を飼つたりし、またスペイン語の教授をしたりして、夫婦共稼ぎで一年ばかり貧困と戦つてゐたが、スペインとアメリカとの戦端が開かれて、祖國が急を告げるや、彼は俄かに愛妻を残して歸つてしまつた。フィリッピン

獨立の時、海軍省が軍隊を派遣したのは、實に此のホーサー・ラモス氏の運動の結果に外ならなかつたのである。

彼が歸國してみると、悲しいことには祖國はみな親米主義に傾いてゐて、彼はむしろ大勢に反くものとして、茲にも冷遇の悲運にあひ、脾肉の歎にたへかねてゐたが、アメリカが愈々その野心を明にして、フィリッピンの占領を實行せんとしたので、彼は再び日本への使者として、横濱の埠頭に立つたのであつた。

愛する妻はいづこぞと、埠頭の人波を分けて見たけれども、其の優しい姿が見出されない。彼はかきむしられる思ひをして、家へかけつけて見ると、ああ何といふ呪はしいことであらう、愛妻はか弱い體でラモスを養ふために、あまり過勞したために、遂に重い病を得て既に、死んでしまつた後であつたのだ。——ああラモスの心情はどんなであつたらうか。彼は祖國の滅亡に血を吐きつつ、破れた胸を抱いて異國の情人の許に歸れば、彼をかき抱いてくれると思つた情人、かつて苦しい境遇に自身を棄てずに盡してくれた愛人は、もう此の世にはゐなかつたのだ。彼の前に置かれたのは一つの骨壺、彼は運命のみちめさに、その冷たい冷たい骨壺をしかと抱きしめて、

情人に接吻することく、その骨壺に接吻しつつ、男泣きに泣いたのであつた。——ああ温かき腕に抱かうとした情人は、一壺の骨になつてしまつてゐたのだ。どんなにかラモスの心は亂れたことであらうか。之はあまりにも小説的な悲劇である。僕はその時のラモスの事を思ふと、ほろりと涙がこぼれるのだ。

彼は破れた胸に骨壺を抱いて、もう再びフィリッピンへ歸らず、またどうしてもアメリカの國籍に入るのは嫌だと、しばらく國籍のない人間になつてゐたが、參謀本部の福島將軍の世話で、日本に歸化し、死んだ情人の家へ改めて入婿となり、ホーセーの名を保政と書いて、石川保政を名乗つてゐる。今では日本人として再びフィリッピンに渡り、祖國のために働らいてゐる。マニラの郊外に大きな花園を作つて生活をしてゐるが、妻は日本人で良い家庭を作つてゐる。今でもアメリカから注意人物として、非常に嚴重に看視されてゐるが、フィリッピンへ上陸した人は、是非とも一度あつて來てほしいものだ。日本語も充分出來、アギナルドなどと異つて人物もしつかりしてゐる。

#### 四、祖國はアメリカに併呑

香港に假政府を作つて、獨立の機をまつてゐると、かねてから東洋に足だまりを得やうといふ野心をもつてゐたアメリカが、キューバ島の問題で戰端を開いたので、香港政府はアギナルド將軍の提議に基いて、シンガポールのアメリカ總領事イー・スベンサー・ブラットーに計つて、アメリカとフィリッピンは攻守同盟を結ぶことになり、アメリカはフィリッピンのスペイン艦隊を破り、獨立軍は陸軍としてオーガスチンを破らうといふことに決し、アメリカは「フィリッピンのどの黨派に對しても交戦せんとするものではない。島民をスペインの壓政より救ひ、之に自由を與へんがためのみ」と云ふ宣言を發し、戰に勝つた後は、必ず完全なる獨立を與へようといつて、巧みに之を欺いたのである。フィリッピンはアメリカを救世主の如く思つたのも無理はない。獨立軍の首領達がフィリッピンに上陸した後、即ち同年の六月になつて、香港の假政府から武器を満載した汽船が二隻、フィリッピンに向つたのであつたが、どうしたことか此の船は二隻とも途中で、行衛不明になつてしまつた。別に大嵐に出逢つた譯でもなく、暗礁に乗上げた形跡も

なく、またスペインの軍艦に打ち沈められた模様もなく、獨立軍は不安な絶望の中に突き落されたのであつたが、後になつてアメリカの軍艦が途中で、この二隻を打ち沈めたのではないかと云ふ、信すべき噂が起つた。蓋しこれはわざと獨立軍の勢力を弱めるために外ならない策戦であつたのだ。

フィリッピンの獨立をアメリカが助けろといふ情報が来ると同時に、ホーセー・ラモス等の意見を重んじ、外務省と意見を異にしてゐた參謀本部は、俄かに陸軍からは明石元次郎少佐と、時澤右一大尉を送り、海軍は川原要一少將を司令官として、軍令部からは莊司義基大尉、吉田少佐等が搭乗し、松島、秋津洲、明石の三艦を送つた。當時の秋津洲の艦長をしてゐたのは齋藤實氏で、東伏見宮殿下も御搭乗になつてゐた。

獨立の戰の幕は、先づ海戰によつて切つて落され、アメリカの軍艦は、キャビテ灣に於てスペインの砲艦七隻を見事に打ち沈めてしまつた。

海軍は全滅したにも係らず、流石に本國から選ばれて來たオーガスチンだけあつて、彼は頑強に抵抗してどうしても降ることをしない。獨立軍はマニラから五哩の地點のマラテまで押し寄せ

たが、要塞が堅固で、どうしても落ちない。これさへ落ちれば、サンタ・アーナ・バンドガカーン等の小都市戰を経て、直ちにマニラ城に攻め入ることが出来るのであるが、既に二ヶ月も之を包圍して陥入れることが出来ず、此の陣中でルーナー將軍は不明な原因で急死してしまつた。ルーナーは醫者であつて、特に細菌學の泰斗で世界的發見があり、ボンセの如きはわが北里博士に比して誇つてゐたものである。ルーナーの死因は不明であるが、アメリカ人のために毒殺されたと云ふ事に説が一致してゐる。

ルーナーの死後、リカルテ氏が司令長官になり、マラテの要塞を攻めたけれども、頼みにしてゐた香港からの武器は來ず、やはり抜くことが出来ない。そこで親日派のリカルテ將軍は、明石少佐に相談すると、後日、日露戰爭にロシアのガボンを煽動して、ロシア革命を起こさした此の奇才は、ある奇策をリカルテに献じて、早速オーガスチンを降らしたのである。

この策略とはマニラの外交團の利用であつた。元來マニラは水の乏しい處で、二十哩彼方のラグナの湖から水道を引いてゐたのであるが、この水道を遮斷すれば、マニラは旬日ならずして陥落するに至るべきは、掌を指すより明かである。そこで明石少佐は、獨立軍をしてマニラの外交

團に向つて次のやうな宣告を發せしめたのである。それは戦争の決勝を早める爲めに、マニラ水道を破壊する。これは人道上に於て悪るいかも知れないが、目下の場合では止むを得ぬ處だ。それで若し之の事が都合が悪るいならば、外交團からオーガスチンに降伏をすすめてほしい。若し一週間以内にオーガスチンが降伏せぬ時は萬事休すと云ふ意味であつた。

この二通知を得た列國の外交團は、緊急會議を開いて、オーガスチンを壓迫して降伏をすすめたので、彼は涙をのんで城を開け渡すことに決し、ドイツの軍艦イレネー號に保護されてスベインに去つたのである。蓋し彼をドイツ艦が保護したのは、始めフィリッピンの獨立軍にはドイツが加擔したかつたのであるが、フィリッピン側でドイツの野心を看破して、彼を問題にしなかつたからである。

これより先き、もはや獨立の成功も近いといふので、キャビテを占領するや、茲に於て獨立の宣言をなし、アギナルドを大統領に推戴することにした。すると間もなく同月の十二日には、オーガスチンとの休戰條約が成立し、オーガスチンの退去は間近かであらうと思はれたにも係らず、同日の夕方に至つて、アメリカの陸戰隊の司令官が、單獨にマニラを占領するといふ電報をリカ

ルテに送つたので、リカルテは火のやうに怒り、直ちに全軍に命令して、アメリカ軍の入城に先じて、突貫を以つてマニラに入城してしまつたのである。

その時の市民の歡乎の光景は實に鼎の沸くやうで、總督府廳には、新しい獨立軍の旗は翻り、全市は爆竹と旗と提灯で、男も女も若い者も老人も、夜を徹して花をかざし、旗をふり、酒の滿は引かれ、逢ふ人々は「萬歳、おめでたう」と呼び交したものであつた。惡魔は去り、妖雲は拂はれた。人々は美服と美酒と歡喜に酔ふて、街から街へ、家から家へ踊りあるいたのであつた。

しかし悦びは東の間であつた。リカルテの軍に先んじて、マニラを占領しやうと云ふた時から、アメリカの態度は既に野心に満ちてゐる事が明かに認められ始めた。キャビテからは陸戰隊がどしどしと上陸し、總督府廳の國旗をアメリカ國旗に代へんとし、あはや血の雨を降らさうとしたが、アメリカ側の讓歩で一先づおさまつた。だが反目は之で終つたのではなかつた。十日間ばかりしたつと、アメリカからは新しい大陸軍が上陸して、直ちにマニラに戒嚴令を布き、イロイロ港には巨大な貯炭場を設けて、香港假政府との前契約を無視して、着々として永久占領の準備を整へ、遂には武力を以つて總督府廳から獨立軍の旗をおろさせ、その代りにアメリカの星條旗をこ

れ見よとばかり誇らげに掲げたのであつた。

まんまとフィリッピンはアメリカの、ペテンに掛つてしまつたのだ。前門に虎を追うて、後門に狼を迎へたのであつた。フィリッピンは全く、正義人道の假面にだまされてしまつた。かくてフィリッピン人の自由の血は、再び燃えたち、スペイン人に對して執つた劍をこんどはアメリカに向けることになつた。

しかし形勢は日に悪くなつた。アメリカは益々軍隊を増加し、新鋭の武器を持ち込み、更に支那の義和團事件に参加したウヅ少將を派遣して總司令官とし、獨立軍の鎮定をなさしめた。此の時の功によつて、ウヅは後にフィリッピン總督になつたのである。

既にして戦ひは、フィリッピンとアメリカのものになつたので、日清戦役の創痕のいまだ癒えないわが艦隊は、深い同情をフィリッピンに残して引上げねばならず、参戦の志士また皆内地へ引きかへした。

初めから親米派であつたアギナルドは、アメリカのこの態度に憤慨したが、この文化的新人は、あまりに勝負の數の明るく、運命の手に身をゆだねんとしたが、同志に強要せられて立つは立つ

たが、確かな戦意はなく、間もなくアメリカの買収の手によつて、年金五萬弗の約束で、遂に降伏してしまつた。昔の虎は今日の猫になつたのである。

アギナルドが降つてしまつたが、わがリカルテ將軍のみは斷じて降伏せず、千萬人と雖もわれ往かんといふ大勇猛心を以つて、敢然として勝算のない戦を、武門の意氣地として進めたのである。彼の血管にはフィリッピンの諸民族中、最も慄悍だと云はれてゐる、ミンドロ族の血が渦巻いて流れてゐるのだ。孤城落日、刻々に運命は定つて行くが、彼はなほ運命の神をすら敵としよるとした。

貧弱な武器を以つて、彼はよく潮のやうなアメリカの軍勢に對して戦つた。益々減じて行く兵を以つて、益々勢を得て来る敵に向つた。彼は日に日に南へ南へと追はれた行く。遂に彼はルソン島の南端を追はれて、海を越へて南のミンダナオ島に渡り、同志は日に日に倒れて行き、遂に銃丸が盡きて、少數の同志と共に、捕縛せられることとなつた。

この戦の中に、一人の勇敢なる若い女がまぢつてゐた。その夫なる人と共に、二人の子供を背に負つて軍に加はり、彈丸や食糧を運んで行つたが、遂にその婦人の夫は、敵彈にあたつて倒れ、

主將リカルテに其妻子を託したのであつた。その勇婦は更らにミンダナオへ軍に従つて行つたが、ミンダナオに渡らうとした時、其の一子も亦た敵弾にあたつて倒れたので、彼女は其の屍を路傍の畑にうめて逃れたのである。獨立軍はこの女丈夫によつて、どれだけ軍氣が鼓吹されたことであらうか。

この女丈夫こそ、今のリカルテ夫人アゲタで、カフェーにゐる娘さんは、その時アゲタ夫人が背負つて逃げた娘であつたのだ。夫人はかくして寡婦となり、また愛妻を失つたりカルテは、後に再び香港に亡命するに及び、この夫人とまためぐり逢つて、盡きせぬ運命を永遠に契るに至りしもので、リカルテ氏が晩節を全うしてゐる半の功は、實にこの女傑に歸すべきものである。さぞアゲタ夫人の亡夫は地下で、世に残した愛妻が、忘れ片身を抱いて親友の許に嫁し、なほも祖國のために働いてゐるのを悦んでゐるだらう。

### 五、獨木船の脱走

リカルテ將軍も遂に衆寡敵せず、捕虜の身の上となつた。アメリカのウヅ將軍は、アギナル

ドの幸福なる生活を指して、彼のやうに歸順することをすすめたが、頑として死を望んでやまぬので、止むなく軍艦オレゴン號にのせて、同志と共にあの有名な無線電信のあるグアム島に流謫したのであつた。

彼はここに長い間幽閉され、嚴重に看視されて、單調な怠屈な數年を経てしまつた。幾度か椰子の花の咲いては、實を結ぶのを見たが、夢にも忘れることの出来ぬのは、祖國のことである。島に残して來た同志のことである。親兄弟のことである。磯邊に打ち寄す波を見ては、故郷のことを想ひ、ふうはりと空に漂ふ雲をみては故郷のことを思ふのであつた。

その中に看視もゆるやかになり、島の中ならば、どこへでも自由に歩きまわることが許されるやうになつたので、遂に同志と共にこの太平洋上の一孤島から、大膽にも逃亡することに決したのである。なつかしき故郷のことを思ひ、祖國の人達を思ふては、歸心矢の如きものがあつた。彼は萬一を僥倖して、運命を天にまかすことにしたのである。

グアム島の南の海岸には、深い大きな森がある。そこへ彼等は、狩りに行くやうな様子をして出掛けて、斧をもつて海岸の大木を二本切り倒して、三ヶ月もかかつて長さ七八間ばかりの獨木



舟を作つたのである。斧を一つ木の根元へ打ち込んで、國を祈り、二斧打ち込んで父母を念じて、遂に獨木舟を作りあげたのであつた。

そこで彼等はビスケットや罐詰や水を積んで、神に祈つた。——ああ神よ。願はくば我等をして再び祖國のために働かしめよと。そこで彼等は死なばもろともと、若し運命にめぐまれたならば逢ふであらうと、リカルテと其の部下の七人はこの獨木舟に分乗して、千里の荒海に運命を託したのであつた。

まつ闇な晩の海岸から、二つの怪しい火のない舟が漕ぎ出して、沖の方へ消えてしまつたのである。實にこれ此の島に幽閉されてから七年目であつた。

波にゆられ、風にもあそばれつつ、姉妹の獨木舟は何時とはなしに分れてしまつた。夜が更けてゆくと、南洋の空一面に星がまたたき、山のやうなゆるやかな波が、舟を上げたり下げたりしてゐる。嵐も出て来て、この木の葉のやうな獨木舟はひつくりかへつてしまふか、それとも漂ひあるひて、食糧が盡きてしまふのではあるまいか。ただ幸なことには貿易風が西へ西へと吹いてゐることだけである。

晝は青々とした空と海を四圍に見るばかり、舟は進んでゐるのか、退いてゐるのか漂ふてゐるのか分らない。時計に付いてゐる小さな磁石によつて、舳をただ西南に向けてゐるだけである。饑は時々飢えた口を開けては、獨木舟をくつがへさうとして迫つて來るのであつた。

晝も夜もこの廣い太平洋に漂つて、あてのない希望を夢みてゐると、やがて三日月が淡く西の空にかかつたので、一同は一齊にその三日月を仰いで、武運の長久を祈つたとのことである。

——グアム島から獨木舟に乗つて逃げ出すと云ふことは、冒険と云へば實に大膽至極の冒険であり、丁度傳説の勇士のことを目のあたり見るやうな氣がするのである。彼等の前には生もなく死もなく、ただ祖國に捧げる真心だけである。彼等が月をみて、感じた心持こそ、これまさに一篇の詩ではないか。勇士の悲壯な場面である。詩であり劇であり物語である。英雄とは生活を以つて詩の句となすものではあるまいか。月を仰ぎ星を仰ぎ、天地の悠久と人類の弱小を思ひ、然も人間なるが故に祖國を愛するの情よ。餘りに泣かされる事ではないか。

漂流すること半月、遂に満月がかけ始めて行くころ、運命の神にまだ見離されなかつたのか、二艘の獨木舟は無事に英領ボルネオの東端なるサンダンカンに上陸したのであつた。——彼等は

奇蹟的に島を脱し、奇蹟的に目的の地へ着いたのであつた。同志の舟が着いてゐるのを見て、『お生きてゐたか』と彼等はしつかりと抱きついて、しばらくの間は言葉もなく離れなかつたのだ。彼等は飢と睡眠不足で綿のやうに疲れてゐる身を以つて、リカルテ將軍を圍んで胴上げをし、フィリッピン萬歳を叫んだのであつた。

どんなに悦しかつたことであらうか。七年間の幽閉から脱して自由の身となつた。彼等はしみじみと地を踏んで見、しみじみと空気を吸ひ、潤々とした気持ちで太陽を仰いだ。彼等の前には華やかな少年の日のこと、香港假政府のこと、アメリカとの苦戦のこと、死んだ同志のこと、追憶が追憶を追うて夢に入り、前途の希望は少年のやうに甦つたのだ。

ここに數日滞在して休息した後、便船を待つてシンガポールに渡り、そこで再び獨立の宣言書を發表したのであつた。彼等が獨木舟に乗つて、暗夜の海に漕ぎ出した時は、とても再びかうした宣言書を發表し得ようなどとは思はなかつたのである。宣言書を見て驚いたのはアメリカ官憲であつた。不意にリカルテ一行が姿をかくしたので、そろつて山へでも狩りに出掛けたのかと思つてゐると、二三日過ぎても歸つて來ぬので、急に騒ぎ出して全島を隅なく搜索すると 南海岸

の繁つた森の中に、木を切り倒した形跡、焚火の跡があり、罐詰の空いたのがころがつてゐるので、ひよつとしたら彼等は筏を組んで此處を逃げ出したのかも知れない。然し此の島は太平洋のまん中の離れ小島だ。とても彼等は満足に他の島へたどりつけまい。筏が沈んで蟻の餌食になつたか、喰人種の棲んでゐる珊瑚礁へでも漂流されてしまつたらう位にあきらめてゐたのであつた。それが意外にも無事に何處かへ着いたと見へて、シンガポールからまたもや宣言を出したのである。鬼のやうな勇敢な奴共であるといつてすつかり舌をまいてしまつた。そして早速イギリスの官憲に向つて、逮捕を依頼して來たので、領事は事面倒と見てとつて、彼に退去命令を下したのである。そこで彼は再びなつかしい想ひ出の香港へ歸つて來た時、偶然にも嘗てミンダナオ島で生死を共にして最後まで働いた女丈夫にあひ、その家へ寄遇することになつたが、この寡婦と鰥夫の間には、いつしか暖かい花が咲き出したのであつた。

その楽しみもしばらくにして、またイギリスの官憲に破られてしまつた。官憲は彼等を捕へて、香港の二哩ばかり沖にある、支那海賊の根據地である榕樹島<sup>ラフアイランド</sup>へ幽閉し、印度兵を二三十人ばかりつけて監視せしめることにしたのであつた。ところが此の印度兵は、リカルテを監視してゐる

中に、すつかり彼の人格と識見に敬服してしまつて、監視どころか、彼の同志になつてしまつた。其の印度兵等は自分の國だつてイギリスに占領されてゐるのだ、フィリツピンを獨立させてから、こんどは印度の獨立だといつて、同じ主義を奉ずるやうになつた。

それから間もなく、支那海賊共も、リカルテの話をきいて、彼等の方から歸順して来て、リカルテは其の島の王様になつてしまつたのだ。印度兵と海賊とが一しよになつて、其の島の荒地を開墾して立派な畑にし、畑の道にはルーナー道路<sup>ローナード</sup>とかリザル道路<sup>リザル</sup>とか云ふ、フィリツピンの死んだ志士の名をつけ、山からは木を伐り出して、立派な邸宅を建て、フィリツピンの獨立旗を掲げて、すつかり獨立の本部になつてしまつた。

かくして幽閉の地は、却つて官憲の眼の光らない自由の樂天地となり、フィリツピンの同志はもとより、印度や支那や日本の志士は、みな此處へ集つて来て、アジア人種勃興の策源地の如くになつてしまつた。島が此様に開けたにも係らずリカルテは、香港に残した愛人のことを云ひもせず、また呼ばつたらどうかと云つても承諾せぬので、印度兵は遂に粹をきかせて香港へ渡り、アゲタ夫人を取調べる件があると云つて、娘と共に捕縛して島の女王として迎へたのである。

かくして此の島から再び獨立新聞が発行され、靜かに世間の動靜を伺つてゐる中に、歐洲大戰が勃發したのである。

## 六、日本へ脱出

ドイツの勢は益々あなどり難く、イギリスはアメリカの援助を必要とするに至つて、イギリスの官憲は此の薄命のリカルテをまで捕へてアメリカへ渡し、もつて外交上の交換問題としようとしたのである。

香港の總督はリカルテに向つて、俄かに榕樹島<sup>ライオンズ</sup>を退去するやうに命じ、どこへでも望むところへ連れて行つてやると云つたので、リカルテは即座に香港を希望したが、香港に置く位なら何も此島から退去を命じはせぬといふので、第二にポルトガル領の厦門を望んだところが、これもフィリツピンに近いから許るさぬと云ふので、第三に上海を持ち出したところが、やつと許るされた。

リカルテは重要な秘密書類や、必需品をまとめて、トランクに入れて秘書官と共に、香港の水

上警察のランチに乗つて榕樹島を立ち出で、香港の船をさして行つたのである。

幾つも幾つもイギリスの國旗の立つてゐる船をぬうて、警察のランチは、アメリカの國旗を掲げてゐる軍艦の左舷へびたりと横づけになつた。軍艦からはする／＼と、起重機の綱がおりて来て、トランクを艦上に引き上げてしまひ、警察の署長は梯子を指して、『あれから艦へのぼつて行け』といふのだ。

これを見たりカルテは、火のやうに怒つてしまつた。此のベテンに對して、臍腑が煮えかへるやうに怒つた。

『なぜ俺をアメリカの軍艦へ連れ込んだ。俺をだましてアメリカへ渡さうと云ふのであつたのか。俺はイギリスの國旗によつて保護して安全な場所へ逃すといふので、この船にのつたのではないか。イギリスともあらうものが怪しからぬ。斷じて殺ろされても乗らぬ。どうにでもしろ。』とリカルテが吐鳴ると、警察の署長もさるもので、水夫に命じて暴力で彼を、上艦せしめようといふ様子が見えたので、リカルテは今ほこれまでと覺悟をきめて、いきなりピストルを出して、ランチに掲げてあるイギリスの國旗にさし向けた。そして聲高に叫んだ。

『よし俺を暴力で捕へるなら捕へて見ろ。俺はイギリスの國旗に保護される約束で來たのに、此の旗がベテンをやるなら、俺はこの國旗を打ち破つて茲で死ぬ。さあ體にさわつて見ろ。』秘書も續いてピストルを取り出して叫んだ。

『署長よ、打つぞ。ランチを離せ。そして榕樹島へ引きかへせ。死にたくないのなら早く引きかへせ。』

『イギリスの國旗にピストルを向けるのは、イギリスの皇帝にピストルを向けることと同じなのだ。貴様の國のキングにピストルを向けてほしいのか。』

その劍幕には、水上警察署長もどうすることも出來ず、すこすこと部下に命令を下して、ランチをアメリカの軍艦から離し、やつと上海行の船にのせられた。これはイギリスに船籍のある、支那の招商局の吳淞號といふ船であつた。

アメリカの軍艦へ、ほうり上げられたトランクについては、リカルテは其後になつて、上海の國際裁判所に對して、香港總督サー・ウィリアム・メーを窃盜で訴へてゐるが、今だに其のままに握りつぶされてゐる。

かくてやつとアメリカの軍艦に囚はるる厄を免かれて、上海の埠頭に立つて、ほつとする間もなく、ここにはアメリカの悪い魔手が待ちかまえてゐて、彼が町へ入りかかると、いきなり建物の横から、七八名の支那の無頼漢らしいのが飛び出して、うむを云はせず、手どり足どりして、縛つた上、自動車にのせて、どこかへ連れ去つてしまつた。リカルテは縛られながら、齒ぎしりをしたけれども、どうすることも出来なかつた。

彼はこのままに、この地下室で暗殺されてしまはねばならぬのか、それともまた再びアメリカに護送されるのであらうかと、流石に悲運の涙に暮れたのであつた。水とパンが差し入れられる時、リカルテはふと一縷の望みを抱いて、ノートの紙を破つて、地下室に囚はれてゐる事を認めて、これをそつとフランスの領事館に届けさせたのである。其の時リカルテが支那のコックに與へた金は、銀貨の一圓であつたので、今でも僕達は冗談の時には『一圓の命君』と呼ぶのである。これ大正八年のことであつた。

この密書を得たフランスの公使は、非常に驚いて、自らアメリカの領事館に飛んで行つて、嚴重な談判をすると共に、一方人を走らせて、リカルテの監禁されてゐる場所を搜索させた。場所

は幸にもフランス租界であつたので、事はすらすらと運んで無事に再び彼は日光を仰ぐことが出来たのであつた。

恐ろしい上海に於て、しばらくフランス領事に保護されてゐたが、ここは危険で仕方がないので、彼は更に日本へ落ちのびて来たのである。

X X X

大正十二年九月一日の地震の時は、横濱のグラント・ホテルへ、フィリッピンの獨立黨の幹部である、下院議長のカエソンが獨立運動のために渡米するため、横濱へ立寄つたのに逢ひに行つたのであるが、此處で親子三人とも不思議に助かつたのであつた。グラント・ホテルでは三百人位の死傷者が出たにも係らず、彼等は怪我一つしなかつたのは全く天祐であつた。天のまだフィリッピンを見捨てない證據であらう。

地震で死ななかつたか、それとも朝鮮人と間違つて殺ろされなかつたかと心配してゐたら、ひよつくり東京へ歸つて来た。彼等の顔を見て、涙が出るほど悦しかつたのである。

その後本國の有志の後援で、横濱に前記のカフェーを開き、晝は世田ヶ谷の殖民學校へ通つて

スペイン語の教授に糊口を浚いでゐる。

アゲタ夫人は男まさりで、リカルテの無口に比して、常に氣焰萬丈だ。酒ものめば議論もし、獨立の志士達にとつて、良い『お母さん』だ。夫妻とも今年で五十七歳だ。娘はロザリオと云つて今年たしか二十三四歳のはづだ。横濱へ行つた人達は、是非一度この英雄カフェーを訪れて、孤獨な人達を慰めて来てほしいものである。

(大正 年 月「東洋」)

## 印度の志士ボース氏

### 一、獨立運動の家柄

ノーベル賞金をもらつた、印度の詩人タゴール氏の一族は印度の獨立運動の先驅たる國民的自覺の精神作興に、重大な中堅的位置を持つてゐる。彼の父デーンドラ・タゴールは梵教會の第二祖として、同教會をして今日の盛大を致さしめた宗教家であり、其の従兄弟のうち兄のガガネーンドラ・ナート・タゴールは素人畫家として知られ、弟アバネーンドラ・ナート・タゴールは本職の畫家で、カルカッタ美術學校の副校長として、同校の全權を握り、共に印度美術復興の最も有力なる策勵者である。

いま茲に僕が語らんとする、ラーシュ・ベハリー・ボース氏も亦、このタゴール族の一員であつて、武斷的に印度の獨立を計つた印度の最重なる一柱石である。天運未だ時を貸さずして、東

方の一島嶼に亡命の悲みにあるが、彼あるが故に印度獨立運動の暴力的方面が囑望されるのである。

彼が愛國的熱情に殉ぜんとする前に、彼は幼時から一族の獨立精神を搖籃として人となつたのであつた。而して彼の生涯も亦、獨立運動家にふさはしき、波亂重疊たるものがある。日本に亡命してゐる志士の中で、前に述べたフィリップスの獨立黨首領のリカルテ將軍と共に、亡命客中の双壁である。

## 二、印度の自覺史のスケッチ

印度の復活的覺醒は約八十年前に溯り得るのであつて、千八百三十年から上代印度の社會的、文藝的、宗教的理想の復興の熱望が、有識者間に潑刺と燃えて來たのである。かくて此の精神運動は、いづれの時代に於ても見る通り、先づ宗教運動が先鞭をつけたのである。ラーム・モハン・ロイは梵教會を、ダヤー・ナンダ・サラスワティはアーリヤ教會を作り、次で學術運動が引き續き之に次いで起り、印度史や古代文學の研究が盛になり、過去の光榮を以て人心を鼓舞し、古代

劇や國民音樂の復興を見、カルカッタ、ボンベ、グジャラート其他の都市で古代印度の演劇をやる劇場が出來、また印度固有の美術や、建築の復興運動が起きた。此の方面に對する最大の貢獻者は先に述べたタゴール族である。

この精神的自覺運動は、間もなく政治的方面にも現はれて來た。そして一八五七年には「獨立の第一戰」と呼ばれてゐる大叛亂が起り、北印度は騷亂の渦中に投じたのである。然しこの運動は五ヶ月の後に鎮定されて、其後はイギリスの巧妙なるスパイ政策や、慘虐なる壓迫によつて、獨立運動は永遠に望みなきかの觀を呈し、絶望と悲哀が全國土に充ち充ちたのであつた。

白人種の侵略に對しては、有色人種は、最早や何のほどこすべき方策もなかつたかに見えた。此の時（一九〇四年）日本は敢然として立つて、世界に恐れられてゐたロシアを見事に撃破したのであつた。四十年前までは支那の屬國と思はれてゐた、名もない一島國——それは日本と其の島の住民は云われてゐた——が噴火の如く列強國の間に現はれて、ロシア、恐るべきロシアを撃破したのである。

小國日本の勇敢とその光榮ある勝利は、俄然として白人の壓迫の下にある有色人種、特にアジ

アの諸國に希望と勇氣とを鼓舞したのであつた。その中にも被壓迫者の第一者たる印度の自覺奮起は目覺ましかつた。果然、一九〇四年から印度の形勢は頓に險惡を加へた。英國貨物の排斥運動となり、國産品の獎勵となり、イギリスの羈絆を脱せんための自治運動となり、爆彈と短銃と匕首が隨所に閃めいたのである。

印度のベンゴール州は始めは、最も平温な處であつたが、教育機關の増加による啓蒙運動の結果として、兎の如きベンゴールが實に獨立運動の中心、印度文化の復興運動の中心となつたのである。年少氣鋭の青年等は政府の干渉や警察の壓迫をも恐れず、屢々集會を催して祖國の獨立の演説をした。この不穩の形勢を見て、當時の印度總督カーズン卿は東部ベンゴール州に回教徒の多數なを利用して、上流印度人の勢力を殺がんとために、ベンゴール州を東西の兩部に分割せんと劃策した。この事をベンゴール州民が知ると大に激昂して、一九〇五年の八月にカルカッタ市の公會堂に大會を開き、ナンデイ氏を會長に推して『分割反對の實行方法として英國貨物の總ボイコットを行ふべし』と決議し、分割の取消さるるまで、ボイコットを斷乎として繼續すべきことを宣言した、州民は之を忠實に遵守した、これがために同州の經濟界は一大恐慌を來した。

然しカーズン卿はそれをも意に介せず、十月十六日に至つて敢然として分割を斷行したので、其の日には同州は竈の火を消し、素足で家を出て川や聖槽に沐浴して、大喪に會した如くし、更に學國一致の象徴として、聖紐を以て互に手首を縛つて反抗を示したのである。それからボイコットは益々激しくなり、スワラーシー（自國品を）の叫びは全印度に波及し、イギリスの新聞は『かくの如きボイコットは、イギリスと印度の關係を破壊すること、武装せる革命よりも甚だしい』と論ずるに至つた。

この運動に最も大膽に活潑に英貨排斥を宣傳したのは、血に燃え立つ青年學生であつたので、印度政府は先づ此の運動を鎮壓する第一段の手段として、嚴重に學生が國民運動に加はる事を禁止、同運動に加はる者は直ちに退校を命じて、一切の教育を受くべからずとの命令を發したが、これは却て國民大學運動の發現を促成したのであつた。

政府の學生に對する禁止令が出ると同時に、ベンゴールの有志は國民教育會議を開き、全く政府から獨立した大學を建設し、純然たる國民的組織の下に、哲學、科學、文學乃至は工藝に關する教育を施こそうと計畫し、從來印度のあらゆる學校で、最も重要な學科であつた英語をば、第



二語學たらしめ、之に代ふにベンゴール人にはベンゴール語及び梵語を、回語にはウルドウ語、ベルシヤ語及びアラビヤ語を以て、第一語學たらしめる案を立て、盛に州民に遊説する所があつた。かのタゴールがノーベル賞金を得た、有名な詩篇は實にかかる國民運動の一端として、ベンゴール語で書かれたものであつた。

この情勢を政府は黙つて見てゐる筈がない。教育は自覺であり、自覺は反抗となる。政府はこの運動を公然に或は隱然に壓迫したのは申すまでもない。茲に於てか人民は言論に訴へて獨立の精神を人民に鼓吹するために、新聞雜誌を以て宣傳に努めた結果、數ヶ月後には國民運動は旺盛としてベンゴール州にみなぎり、バンデー・マータラム（母國萬歲）といふ聲が、學校でも街頭でも、私人の家に於ても叫ばれる様になつた。種々なる武術を教ゆる道場が處々に開かれ、ベンゴールの青年は争つて之を學んだのである。

日に日に獨立の思想が盛になつて行き、翌年の一九〇六年の四月にカルカッタで開かれた、ベンゴール地方會議では、各地の代表者が八百名も出席し、東西ベンゴール兩州の有力者全部を網羅したかの如き盛觀で、盛んに排英獨立の氣勢を煽つたので、印度政府は遂に警察力に訴へて其

の會議を解散し、各地の代表者に向つて、直ちに歸郷すべき旨を嚴命したのであつた。

斯の様に公會に對する壓迫が盛になると同時に、運動は公然から秘密になり、澤山の秘密結社が出来て、熱血なる青年が皆な之に加はる事になつたのである。一九〇六年から七年にかけて、筆禍や口禍のために投獄された志士は夥しいものであつたが、之がために排英氣分は殺がれることがなく、更に更に風潮が悪化して行くのみであつた。

國民の反抗の氣分はカルカッタからガンヂス河を溯つて、パミル高原の南の、インドでも北方の山國であるパンジャブにまで波及して行つた。そしてカルカッタの會議の翌年、一九〇七年の年始めから此のパンジャブに暴動が起り、軍隊内にも不穩の兆が見え出したが、五月に至ると同地方の首府たるラホール市の名士、ララ・ラージパット・ライ氏が突如逮捕せられて、審問も受けず、罪名も問はないで、直ぐにビルマの牢獄に投ぜられてしまつた。——これは政府が氏をばパンジャブ暴動の首魁と目したからであつて、カルカッタの政府の機關新聞は、同氏は十萬の兇徒を率ひてをり、アフガニスタン王を説いて印度侵入を企てたと報じた。

ライ氏の捕縛は上下の印度人の血を沸騰させた。氏は豊富な學識と健全な思想と、純一な愛國

的精神と、熱誠なる慈善事業と教育事業のために、印度の上下から最も信頼されてゐた先輩であつたので、政府が同氏に加へた迫害に對して、國民の血が沸き立つたのも無理はないのである。これまでも印度の志士で、追放や禁錮や監禁されたものが決して少くはないのであるが、どれでも其の裁判によつて罪が決められると、判決に不服でも暴力に訴へて之に復讐するやうな事はなかつたのであるが、ライ氏の無理なる逮捕を見ては、流石に平和な印度人も黙つてゐるわけにはゆかなくなつた。血で血を洗へ！ ライ氏を救へといふ聲が叫ばれた。そして血氣に逸り立つ急進黨の志士は、遂に爆彈とピストルによつて官憲の横暴に對抗しやうと決心したのであつた。このライ氏の捕縛を一轉期として、從來文章や言論の運動が、直接行動に變じたのである。印度に暗殺が頻々に行はれるに至つたのは、これから後の事である。

かくて其の翌年の春、ムザッファルプールのインド獨立運動の初めての爆彈が投ぜられた。これは國民運動に奔走せる青年を管刑にした、イギリスの一官吏を暗殺するのが目的であつたが、誤つて無關係のイギリス人を斃したのであつた。然るに其の場で捕へられた此の暗殺に加入した者の一人が、意志弱くも、陰謀の顛末を自白したので、同志が悉く捕へられてアリポールの牢獄

に投ぜられた。すると彼等は其の牢内へピストルを密かに取り入れて、此の自白者を獄舎の中で血祭にあげたのだつた。この陰謀はカルカッタ市のマニクトラ公園で議せられたもので、今でもマニクトラ爆彈事件と呼ばれてゐる有名な事件だ。

それから間もなくベンゴール州の長官、サー・アンドリュ・フレザーが三度も暗殺されんとして危くまぬがれ、ミントー總督すらアーメダバッドで爆彈を投ぜられ、夫妻が辛うじて九死に一生を得た。同じ暗殺は更にイギリスの本國にまで及び、インドの事務大臣の秘書官ワイリーが白晝ロンドンの街頭で、インドの青年のために暗殺された。その青年は『吾は母國の爲めに賤しき一命を捧げるの光榮を誇る』と叫んで従容として絞首臺上に立つた事は、更に熱し易き祖國の青年の心臓に響いたのであつた。

暗殺また暗殺、暗殺は單にイギリス人に對してのみ行はれず、イギリスに忠誠なるインド人に對しても行はれ出した。その險惡な風潮の中に育ちつゝ、僕がいま語らうとするボース君の革命兒としての生涯が始まり出すのである。僕は此のボース君の生ひ立ちをば、トラクナト・ダス氏の手記を骨子として書き始める事にしやう。

## 三、ボース君の生ひ立ち

インドに暗殺運動の火蓋が切つて落された翌年、インド人は更に暗殺に對する異常な興奮を與へられた。それはわが國の伊藤博文がハルピンの驛頭に於て、安重良のために暗殺されたあの事件であつた。この事件は印度人をして更に更に、暗殺を讚美せしめるに至つたのであつた。

ムザッパールプールの最初の爆弾に刺戟されて印度の人々は永い夢から醒めたのであつた。次ぎ次ぎの暗殺、そして今度は朝鮮の志士の日本の大政治家の暗殺、それ等の物語がインドのジエブルの町に傳つた頃、未だボース君は獨立とは何事かを十分に直感せぬほどの若さであつた。

このジエブルの町はラジプタ大土人州の首州で、カチワハの酋長はマドホー・シーンプといつて、イギリスからサーの稱號を受けてゐるほど厚遇されてゐたが、一般の土人はイギリスに對しては、反抗の血を沸き立たせてゐたのであつた。

このジエブルの町のはづれには、建築用の石材を切り出す山があつた。——そこで誰が云ひ出すともなく、夜が更けてから土地の利け者がこつそりと集つて、何事かを相談するといふ噂が立

つてゐた。すると更に其處から四十里もへだつてゐるアジメヤにも、同じ様な秘密の集會が開かれるといふ噂が傳はり、いつしか密使が立つて、ジエブルとアジメヤの志士の胸は共同作戰に波うつてゐたのである。

月がはるかの地平線上に靜かに動いてゐた。岩石の丘陵の町の軒づたいに、蒼白いその月光を避けて、光を避ける獸のやうにジエブルの若い勇士等が、石切場をさして足音を忍ばせて行くのである。夜警の兵士の重い躑音が闇の彼方から近づいて來ると、人々は吸ひ付くやうに壁に寄り添うて身を忍ばせ、躑音が遠のくこつそりと城壁の方へ歩いて行くのであつた。

月の光は冷たく眠つたアジメヤの町を照らしてゐた。この町は山峽の底にあるので、月はことに淋しく哀れに感ぜられるのであつた。城壁の近くにはイギリスの駐在官が住んでゐる大邸宅があり、その大きな人造湖水には月が隈なく光を落して、鏡のやうに光つてゐたのであつた。忍んでゆく若者達はその人造湖に照る月を、しみじみと涙ぐんで見れば、やがて赤い城壁の石疊をするすると下りて、燕のやうに郊外の石切場へ急いで行くのであつた。

石切場にはジエブルからの密使も來てゐた。人々は石切場の暗い隅に集まつて、獨立のこと、

イギリスの横暴の事を叫んだのである。月は石切場に照つてゐた——サーの稱號を受くる醉生夢死する酋長を除いては、このラジプタナ州の土民は、事ごとに蹂躪されてゐる屈辱を怒らぬ者はなかつた。自由と解放と、祖國インドの恢復は彼等の熱望であつた。

石切場には寶石細工の職人も來れば、印度縵紗の染手や織手もやつて來てゐた。あらゆる階級の、血の氣のある人間が集つて來たのである。彼等は間近く迫る『その日』の事を考へては月を仰ぎ、月の兄弟なる太陽が、やがては黎明の空氣を破つて山岳地方から出て來ることを考へた。日輪はやがて印度人に照るであらう、そう彼等は考へた。

赫々として輝く太陽を仰ぐとき、印度人は一樣に祈つたのである。百人の愛子を慈くしみ育てた日輪神が、印度人に甦る生命を與へてくれる様に思はれたのである。

『ヴァイスロイが來る！』

『ミントー卿が來る！』

『その日は近いぞ』

日輪神を見上げて人達は、かうささやいて手を堅く握りしめたのであつた。集會は夜毎にもよ

ほされ、ジエブルの同志からの牒報が頻々として有志に配られた。これ等の事が石切場で議せられてゐた時、その中心として人々から尊敬されてゐたのは、若きボース君の叔父であつた。

インドに駐割してゐる總督の勢力はすばらしいもので、イギリスに於ける皇帝と同一の権力をもつて統治する任務を帯びてゐたのであるから、ミントー卿の巡視に當つて、シムラでは皇帝と同一の玉座を設けてゐるのであつた。彼の巡視の行列は綺羅を盡してゐるので、土人州の國王は遙かに領土の外まで、いんぎんに送迎するのが習慣であつた。

『ミントー卿が來るぞ』

『太守が來るぞ！』

ジエブルの青年志士は心ひそかに、その日を待つてゐたのであつた。

パロダ州では象の格闘を上覧に供する計畫が催され、十町四方を二三丈の煉瓦壁で圍ひ王宮專屬象の練習に餘念がないとの噂が傳はつて來た。マイソル州では一週間にわたる大仕掛の虎狩に、大守の感興をひかうとしてをり、幾千人の土人獵師の準備や、狩場の見立や、樹上檣の組立や、乗用象の仕立方に苦心してゐるとの噂も傳つて來た。これ等の象の格闘や、虎狩こそ暗殺にはも

つて來いの機會であつた。單に志士は勢子や獵師にまぎれ込んで居りさへすれば良いではないか。

『その日は近い』

『その日だ！』

志士等は勇氣に充ちた顔をして日輪神を仰いで、ほほえんだのであつた。

その日は次第に近づいて來た。——だが、嗚呼その日は遂に機會を失はねばならなかつた。豫期してゐた『その日』のかはりに、豫期せぬ『日』が近づいて來た。それは死神の導きによつてもたらせられた呪はしい日であつたのだ。

シムラの政廳には、あらゆる國籍のスパイが備はれてゐた。インドの總ての種族の中の裏切者がみな、スパイとして備はれてゐたのである。陰險な狡猾な野良犬のやうなスパイ共は、巡禮者になつたり、志士の顔をしたたりして、野良犬が路上の汚物を嗅ぐやうに、東から西へ嗅いでまはつてゐたのだ。同じインド人でありながら、同じインド人の熱ある人間の心を嗅ぐために歩いてゐたのであつた。

人類に光榮の歴史のある限り、呪はるべきスパイ共によつて、裏切者共によつて、待ちに待つ

てゐた『その日』も遂にぶちこはされてしまつたのであつた。パロダ州の象戲も、マイソル州の虎狩も、二つの町の志士が利用するには、天はまだ時でなかつたと見えるのだ。

待ちに待つてゐたミントー卿の來る日に先だつて、雲のやうな英國兵や土人兵や巡査が、二つの町へ入り込んで來た。そして有無も云はさず、人々を珠數つなぎにして、白晝の大道をば獸でも追ふやうにして、驅り立てて行つたのである。

その中で四十年配の偉大な風貌の壯漢が、犇々と縛られて四五人の兵士と巡査に圍まれて行くのだ、壯漢は胸を反らし首をあげて、意氣昂然と街の群集を見て行つた、群集は街の英雄の彼をば、無量の感動を瞳に籠めて見返したのであつた、彼こそボース君の叔父であつたのだ。

群集にまぢつてボース君は叔父を見送つた、叔父も目で最後のお別れをして行つた。ボース君は飛び出して兵士共に喰つてかからうとしたが、街の人々に引きとめられてしまつた。そして人々は早くボース君に街を逃げて行けといふのであつた。目の當りに叔父は捕はれて行く、そしてそれは年少なボース君には、どうすることも出来なかつた。

この時だ、ボース君の心に、深い決心が宿つたのは、少年の夢は俄かに覺めて、インドは今如

何なる有様か、イギリスは我等の上に如何にして君臨してゐるか。叔父のための復讐である。祖國インドの恢復である。彼は始めて彼の使命をさと、インドを背負つて立つ勇氣が心臓から血管を逆に流れて起つたのである。

憎悪と嘆聲と沈黙が二つの町を包んでしまつた。『その日』の代りに『この日』が來たのであつた。街の群集は泣いた。その沈黙の街をば、意氣におこつた顔の兵士に追はれて、可憐な愛國の志士が、幾組も幾組も通つて行つたのだ。

刑場は砂漠から近い荒れ野であつた。日はかつと暑く照らしてゐた。刑場には一人の僧侶もゐなかつた。志士達は順次に少しも怯れた様子もせず、指定の場所に立つたのであつた。

彼等は十人づつ並んで立つた。一人の士官が指揮刀をさつと振ると、立射のかまへをしてゐる兵士の銃口からパツと白煙が立つて、彼等はばたばたと熱砂の上に倒れて行つたのである。殉國者はかくして皆な死んで行つた。

此の様な陰謀や暗殺が頻々と起るものだから、一九一一年の十二月にはヨーロッパがモロッコ問題で紛糾してゐたにも拘らず、イギリスの皇帝は遙かに玉輦をインドに運んで、最も莊嚴な即

位式をあげ、一面に於てインド人を威壓すると共に、在インドのイギリス人の志氣を鼓舞したのであつた。そして此の機會を利用して、分割によつて不穩であつたベンゴール州に讓歩的な解決を與へ、首府をば突然カルカッタから、回教徒の中心たるデルヒーに遷して、恩威ならび行つて、イギリスの排斥運動を緩和せんとしたのであつた。然るに皇帝がデルヒーに滞在してゐた時、皇帝の大天幕が電燈の故障から火を失した珍事が起つたので、インド人は之を以て不吉な前兆だと云つて祝杯をあげ、ある易者はイギリスの滅亡の期が迫つたのだ、と占つて獄に投ぜられた。

イギリス皇帝の即位式のあつた時には、ポース君は叔父と共に逮捕の手を逃れてアラウリの山間をさまよひ歩いてゐる時であつて、即位に對して何事かをなそうとする堅い決心も、嚴重なイギリス官憲の魔手にはどうする事も出来なかつた。即位がすんでからインドに起つた重大な出來事は、ことごとくポース君の關係したり、指導したりする所で、さすらひのポース君の生活、志士としてのポース君の生活はこれから始るのである。

## 四、逮捕を逃れて放浪

ジェブルの街に突然、捕縛者が入り込んで、其の陰謀の首領であつた叔父が捕はれて行つた夜、ポース君は生き残つた他の一人の叔父と共に、拉致の手をのがれて落ちて行かねばならなかつた。ポース君は早く両親に別れて、二人の叔父に監督されて育つたのであつたが、一人の叔父は早くも刑場の露と消えてしまひ、スパイと兵士は他の叔父とポース君を捜すことがしきりであつた。

ポース君は叔父に伴はれて家を出たのであつた。それはジェブルの町が淡紅の雲から洩れて来る黎明近い時であつた。二人は家に傳はる金銀寶石だけを一纏めにして、人目を忍んで祖父の代から住みなれた、なつかしいジェブルの町を後にしたのであつた。街路の兩側にもつてゐるガスの灯は、此のあはれな放浪の旅人のかど出を、淋しく悲しむやうに見送つたのであつた。

二人は猛獸や毒蛇をさけながら、タールの砂漠がアラウリの岩山にならうとする、人なき淋しい所を北へ北へと落ちて行つたのである。そして後にイギリスの皇帝の即位式が行はれたデルヒ市へたどりついたのであつた。

ポース君は疲れきつた足を引きづつてゐた、そして荒廢したカシミヤ門の近くで、地上に腰をおろして憩つたのであつた。叔父は黙つてその門を感慨ふかい面持でながめてゐたが、やがてポース君をかへり見て、此の門の歴史を語るのであつた。ポース君は初めて聞く此の物語りに、驚きと痛恨にまたしても血が逆流するのを覺えたのであつた。それは『獨立の第一戰』のことであつた。

一八五七年の五月十日に、ベンガル州の土人兵が在インドのイギリス人に對して反旗を揚げた。それを聞くとデルヒの附近に駐在する土人兵も、等しく赤旗を樹てて之れに呼應したのだ。その兵數は凡そ四萬人で、騎兵も砲兵も歩兵もあつた。そして多年の恨み重なるイギリス人を殺戮して、五ヶ月の間このデルヒの城に立てこもつて戦つてゐたのであつたが、イギリスの援兵は日に日に多くなつて來た。

イギリス兵の指揮官のアンソンは六頭軍神カールケテの怒に觸れてコレラで斃れてしまつた。次でその任にあつたベルナードも同じ運命に斃れてしまつた。しかしイギリス軍は新しい軍隊と新しい大砲で群がり來たのであつた。そしてニコルソン將軍が總指揮官になつて、此のカシミヤ門で最後の

決戦を開いたのであつたが、時が至らなかつたため、是非なくもデルヒーは再びイギリスの兵隊の手に歸してしまつたのであつた。

此の決戦の日は暑い日であつて、太陽神はこの侵入者を防ぐために、恐ろしい熱を放つたそうで、侵入者が城壁に近づいた時は百七十度の暑さであつたといふ事である。

叔父から此の話を聞いた若いボース君は、涙にうるんだ瞳をあげて、眩しく日輪を仰いで見るのであつた。そしてまた今更の如く、つくづくとカシミヤ門を見つめるのであつた。そこにはイギリスの国旗が翻がへつてゐて、イギリスから派遣された衛兵が、輕侮と凌辱の流し目を以て、この旅人を見おろしてゐるのであつた。

ああジャムナ河の奔流に臨むデルヒーの町よ。そしてそれを取り巻く百二十呎の赤い砂岩の城壁も、インドの民を護ることが出来なかつたのか。熱風の下に翻めいてゐるイギリスの国旗は、インド人が何時までも自由を得てはならぬかの如く、誇らしげに立つてゐるではないか。孔雀の玉座の燦爛たる裝飾も、今はそれと僅かに昔日の佛を偲ぶさへ難いのであつた。正義の秤量器は古壁に懸つても、政治を見る時には、之に對した國王は既になく、今の統治者は之を顧みやうと

もせぬのである。若いボース君の決心は更に堅くなるのであつた。

### 五、修行者に身をやつして

やつと脱れて來たデルヒーの町も二人の肉親の旅人を安らかに睡らせることは出来なかつた。ここもイギリス政廳の迫害と追求は激しく、見るもの、聞くもの、ことごとく憤怒の種とならぬものはなかつた。ここに留ること百日ばかりだつたが、二人は再び引きかへして逃げのびねばならなかつた。彼等は再び懐かしいジェブルの故郷に歸つて來たが、この故郷もまた彼等をかくしてはくれぬのであつた。若いボース君をすら、見のがすまいとするスパイが、十人に一人はかくれてゐるのであつて、愛國者の血族は其の故郷にも入れられないのである。

二人はまたジェブルを出て漂泊した。こんどは南へ落ちのびて行くのである。しばらくして彼等はアジメヤの町に著いたが、此處は昨年ジェブルの志士と聯絡して、石切場でミントー卿の暗殺を議した同志の故郷であるのだ。ジェブルの志士と共にインドの昔日を再現しやうとする人々の、生地であり、また墳墓の地であるのだ。二人は其處の人に導かれて、志士の最後の地を訪れ



ると、地の色さへも黒ずんで、吹く風もなまぐさい感じがせられるのであつた。二人はその地に立つて、殺された叔父のことや、同志を思ふて涙をたれたのであつた。

魔のやうな政廳の厳しい搜索の眼は行く手に隠られてゐた。二人は此のアジメヤを落ちてマルワーへ行き、マルワーからアブーへ、アブーからアームダバットへと、浮き草のやうに流れ流れて落ちて行くのであつた。そして此のアームダバットでポース君は遂に、天にも地にも只一人の叔父と死別せねばならなかつたのである。

アームダバットの晝の暑さは、土着の人々さへ辟易するほどの暑さであるが、夜になると急に大陸性の寒さに變るのである。太陽が没すると直ぐに夜冷がやつて来る。その夜氣にうたれると動もすると怖るべき熱病にかかるのである。ジェブルの町の二人は、こんな悪い氣候だとは思はなかつたので、つい不用心であつたのがもとで、叔父は重い熱病に倒れてしまつた。人目を厭ふ落人である、醫藥にも十分に親しむ事が出来なかつた。ポース君は瀕死の叔父を看護して森蔭に横はらしてゐると、數へきれぬ鸚鵡がポース君の言葉を眞似たり、氣輕な尾長猿が近くを往來して滑稽な身振りをするのであつた。ポース君は其處で假小屋を建て、叔父を看護してゐたが、遂

に朽木の倒れる様に、叔父はなくなつてしまつた。人間と生れて此の悲哀があるのである。杖とも柱とも頼んだ一人の、たつた一人の叔父は、今や此の世にはなき者である。樹間に唄ふ鸚鵡や尾長猿の方が、どんなにか人間よりも幸福であるかも知れぬと、ポース君には思はれたのであつた。

叔父は死んで行つた。然し彼はそれがために屈する様な意氣地なしではなかつた。二人の叔父の靈は彼を護つた。ポース君は今や一人で千萬人と雖ども我れ行かん決心をして、敢然として身を愛國の運動に捧げ様と決心したのであつた。

彼は叔父の墓標の前に座して冥想してゐる間に、金剛不壞の大念力を得たのであつた。それは丁度菩提樹下に於て悟りを得た釋迦の悟りであつた。彼は萬腔の決意をいだいて北上したのであつた。これからインドに起る大事件といふ大事件は、ことごとくポース君の指導したり、自ら實行した事である。彼はインドの獨立運動の一大柱石となつたのである。而して至る處にその首領として仰がるるに至つたのである。

彼が北上して再びデルヒの町に入つた時は、イギリス皇帝の即位も終り、ミントー卿の代り

として、ハーデンジ卿が新首都に入らうとするしばらく前であつた。ボース君は其の日を待つてゐた。彼は數萬の群集の中に身をまぎらしてゐたが、やがて數千の軍隊を率いてハーデンジ卿が堂々と街をねり歩く處を目がけて、爆弾をなげつけたのである。爆弾は直ちに從者の數人を倒したが、卿は幸か不幸か、肩に負傷しただけであつた。さあ大騒ぎだ。行列は直ちに中止せられて官憲も兵士も血眼になつて犯人の搜索に向つた。直ちに犯人を捕へたものには六萬五千圓の懸賞を與へる旨が報ぜられた。然しボース君は巧みに踪跡を晦まして、どこかに走つてしまつたのである。これ實に一九一二年の十二月のことである。

彼は修業者に身をやつして、一舉に遠くアラビヤ海岸に面するバロダの町へ走つてしまつたのである。インド三億の民の中の過半は無宿の屋外居住者で放浪者である。彼等は之等のインド教、回々教乃至はキリスト教徒の間を放浪して、遂にバロダに漂泊して來たのであつた。彼は敬虔な修行者として路上に蹲つて日を送り日を迎へてゐたが、彼は必然に風貌の自づと人と變らざるを得なかつたので、人々の巷語の中心となり興味をそそつてゐた。然し彼の半生は誰人にも知られなかつたのである。

この若い修行者はよくバロダ驛の附近に姿を現はし、その驛員の間にも疑問の行者として話されてゐたが、その驛員の中にインド人の驛員がゐた。彼は無信仰者であると共に、黒い皮膚の下に紅い愛國の血が流れてゐる愛國者であつた。この驛員は此の地のバロダ大學の俊秀として聞えた者の一人であつたが、彼は此の修行者の何者なるかを早くも察したのであつた。

そもそも此のバロダ大學とは、バロダの國王マハラジャのサナジ・ラオー・ガイクワルといふ英才が、今から二十年ほど前に、たしか彼が第七回か第八回かの歐米視察から歸つた時に、世界に於て有名であつた、純金の砲車に純金の砲身の大砲二門、それに純金銀の四臺の彈藥車を臣下の反對を退けて、鑄つぶしそれを以て一部は一千哩の鐵道を敷き、他の部分で、此のバロダ大學や博物館や病院を作つたのである。鑄つぶされた二門の大砲四臺の彈藥車の金の重量は、一つがみな二百八十封度あつたと傳へられてゐる。王の志はとても臣下の及ぶべくもないものであるに相違ないのである。

ボース君はバロダ驛の待合室で夜を明かす事が屢々あるが、インドの心臓たる此のバロダこそ大事をなすべき處としてボース君は隠れてゐたのであつた。ある朝彼は此の驛の待合室を出て、

美しい黎明の雲を見ながら、人通りのない並木の蔭を静かに歩いて居た。彼はいろんな事を考へながら歩いてゐると、數町へだたつた所にバロダ大學が巍然として聳えてゐるのであつた。寂とした夜明けの學堂の門前にたたづんだ彼は、やがて舗石の上に、修行者の法にならつて座し、黙々として此の大學を見てゐたのである。これこそインド人によつて、インドに建てられた最高の學府であると、しげしげと五層の樓閣に見入つてゐたのである。

その時ふと彼の背を叩くものがあるので、ボース君は落人の身のギョツとして後を振りかへつて見ると、見知り越しのバロダ驛の驛員であつた。やがて驛員はボース君の前へ来て、修行者に對して禮拜する如き態度をなしつつ、胸中に燃えてゐる愛國の情を訴へ、ボース君に向つて必ずや過去を秘めてゐる愛國者であらうと尋ねたのであつた。

ボース君は此の驛員の洞察の前には、彼の素性をかくす事は出来なかつた。此の修行者は過去を彼に語つてから、二人は動植物園の鐵柵に添ふて歩いて行つたのである。驛員は感慨無量な口吻で、此の立派な道路、完全な水道、宏大な下水道、これは英明なる國王マハラジャを載いてゐるインドの土人州の唯一の誇りである。然し肝心なものが缺けてゐる。それは物質的なものでなくて、精神的

な或る物が缺けてゐる。インドには支配者が無いといふ事だといつた。インドの民族は呪れてゐるのだと泣いた。ボース君も此の青年の言葉を聞くと、また心の中が熱しない譯には行かぬのであつた。二人はしつかりと手を固く握りあつてゐたのである。

氣がつくと太陽はその姿を全く現はしてをり、街上に眠つてゐた土人も起き出し、水牛の群はのろ／＼と歩いてゐた。子供達は早や赤裸體のまままで走りまはつてゐるのである。行き來の土人の中には、此のボース君の姿を見て、慌ただしく禮拜する者もゐたのである。

この驛員に逢つてから、彼は間もなく、バロダ大學の學生として籍を連ねることになつた。彼は講堂に出る外は、決して戶外へ姿を現はす事もなく、研究室と圖書館に入り浸つてゐたのである。彼は茲で初めて正規な學問といふものに觸れ出したのであつた。彼は知識に飢えてゐた。彼は海綿が水を吸ふやうに、むさばり讀んだのであつた。彼は好んで歴史を讀んだ。東西古今の興亡の歴史を讀んだ。そしてインドの昔を考へては、今日のインドに涙をたれ、往古をして復活せしむる熱望が火のやうに燃えたのである。

晝も夜もけぢめなく彼は讀んだ、その中に彼は偉大なショックを受けたのであつた——それは

同じアジアの東に横つてゐる小さい帝國である日本の歴史を繙いた時である。それは古い國であるが、しばらく前までは國家の形式さへ整はぬ國であつたのに、數十年前に始めて國を開いて、めきめきと發達して、十年前に四百年前から嘗て有色人種に破れた事のない白人種のロシアを見事に撃ち破つた、大なる奇蹟であつた。

彼は此の奇蹟を解くために、その學術、政治、産業、藝術を研究した。そしてその宗教を研究した時、それは自分の國の佛陀の教が傳はつて、それが國家の基礎をなしてゐる事を知つたのだ。彼の心は顛へたのであつた。何だかビーンと胸に高く響くものがあつた。彼は突然机を叩いて立ちあがつた。そして叫んだ――

『日本だ！ 日本だ――インドの新精神は日本に甦つてゐる、日本との提携だ。』

それから間もなく、此のバロダ大學の學監が一封の書き置きを受けとつたのであつた。それはボース君が――ヴァジャと名乗つてゐた修行者であつた彼、修行者から熱心な學生となつた彼――が日本へ行くとの書き置きであつたのである。

## 六、獨立陰謀のリーダーとして

彼は日本へ行くためにボンベイから船に乗つたのであるが、船を待つ間をばマラバル丘から市街を見おろしてゐたのである。

三百呎を抜いてゐる高い時計臺が、街からぐつと抜き出て、其の頂上にはイギリスの國旗が潮風にはためいてゐるではないか。それからフランス式の大講堂があり、ゴシック建築の政廳がある。更に世界の三大停車場の一つと云はれてゐるビクトリア・ステーションや、高等法院や議事堂が、眼を驚かす宏壯さで、眼の下にゴタゴタ並んでゐるのである。彼は其れ等を見おろしてゐると、何とも云へぬ感慨にうたれるのである。更に目を遠く郊外へやると、そこには大きな紡績工場の屋根が畑のやうに行儀よく並んでゐるではないか。

ボース君の胸は冷たく悲しかつた。これ等の美しい建物は美しい詩のやうな町は、インドの誇りではないのだ、それはインドの屈辱の紀念碑ではないか、實に萬感ともも湧いて來て胸は冷たいのである。このボンベイの街は、今を去る二百五十年前に時のイギリス國王チャール二世が、

ブラガンザのサヤリザリンと結婚した時に、ポルトガルの國王が引き出でものとして送つたものであつた。その當時は見る影もない一漁村に外ならなかつたのが、今ではカルカッタを凌ぐ大都會になつてゐるのである。これは實にイギリスの植民政策の成功のシンボルに外ならぬのである。

數時間の後、彼はボンベイ灣に浮んだ汽船の甲板に立つてゐた。波止場から離れて行く甲板の上から、先刻まで立つてゐたマラパルの丘をながめると、其の丘にはベルシャ人の作つた五つの葬儀塔が高く聳えてゐる。そして其の塔には時時、黒い無数の班點が塔の頂上から飛び立つたり、集つたりしてゐるのが見える。それは死屍を喰つて生きてゐる印度鴛鴦の姿である。今日も誰か葬られたのであらうか、時は人を生かしたり殺したりする、かくて時は過ぎて行くのであるが、インドの獨立はいつであらうか。

おゝ——故郷のジエブルを漂泊ひ出てから、顧みれば幾年を宿なき羊の如く、遙かなるカルカッタまで迷ひ來たのである。彼は今や印度を去らうとするのである。彼は別れにのぞんで今一度、祖國の精神文化の中崇的發祥地の雪山の大光景に接したかつた。ジエブルの高原から地平かすかに見えざる如き雪山ではなしに、しみじみと雪山の懷に抱かれて見たかつた、そんな思ひにとら

はれて、彼はカルカッタの旅館に數日を過して後、シルダ驛から汽車に搭じて、カルカッタの北の山上都市のダージリンへ向つたのである。百二十哩をガンヂス河の右岸まで、ベンガルの沃野を日夜を間はす走り通し、ダムクディアの渡船驛から對岸のサラガツトまで十三哩、それからシリジリーまで七十五哩、そしてダージリンまで五十哩だ。

山上都市のダージリン、其處に滞在してゐた週日の印象は、ボース君にとつては永久に忘れ難きもの一つであつた。東の空が仄かに紅みに染むる頃、黄金を湛えた様な太陽の出現する頃、落日の中空まで血潮を流したやうに雲を焼く頃、煌々たる明月が山の上に照り、隅なく山の皺を照らす時、或る時は小禽の聲に、或時は溪河の響に、——彼は飽きもせずヒマラヤの連山を眺め耽つたのである。

海拔二萬九千二呎のエベレスト峯、二萬八千五百五十六呎のキンチンジャン峯、其の西の二萬四千十五呎のカブル峯、二萬五千三百四呎のジャンヌー峯、其の東の二萬二千七十七呎のパンジム峯、遙か東に二萬二千二百七十呎のシモルチン峯が、目の前に天を摩して聳えてゐて、それが白銀の萬古の雪を頂いて輝いてゐるのである。壯嚴と云つてよいか崇高といつて良いか、飽かぬ

ながめである。疊々と相重なる大ヒマラヤ、無限の感に打たれ、今更に人類の弱小を考へつつ氷雪を涉り来る冷風に送られて彼はカルカッタに歸つて來たのである。

さて週日を此の宗教の都に送つて歸つて來て見ると、地上の風雲は變つてゐるのであつた。彼が雪山から歸ると直ぐにラホールで學生が爆彈を投じて、學生が四名死刑に處せられた旨の報道があつた。ボース君は此の愛國者の報道を聞くと共に、また日本へ去るのが國士として取るべき道でない様に感ぜられたのであつた。彼は此の懷疑心を抱きつつ、カルカッタの旅館に横臥してゐた時、はしなくも歐洲大戰の幕はきつて落されたのである。即ち一九一四年の四月にボスニヤでオーストリアの皇太子夫妻が、セルビアの青年のために暗殺されたのを幕開きに、世界が大亂の渦中に投じたのである。

ボース君は決心を眉の間に示して立ちあがつた。今こそ全インドが一齊に立つべき時である。此の歐洲戦争を措いては機會は永久に來ない。そして彼は愴惶として爆彈事件のあつたラホールへ急行したのである。

これより先き、アメリカの桑港にある『印度革命本部』からは、盛に秘密のパンフレットを印刷して、嚴重なる官憲の目を潜つて巧みにインドに送付して、青年の間に革命思想を鼓吹してゐたのであつた。その『印度革命本部』は革命黨主領ハル・ダヤル氏の創設にかかるものであつて、遙かにアメリカからインドの獨立を指導せんとしてゐたものである。而して大戰の勃發と同時に、同黨に屬するインドの志士は、宿願成就の機が至れりとして、陸續としてカナダや支那から本國に密航して、祖國の同志と凝議したのである。

ボース君はラホールに來て、前バンジャブ大學の教授ブハイ・バルマ・ナンド氏や、シート教徒中の切け者たるカルター・スイング氏や井シユヌ・ガネーシユ・ピングレー氏やサツチンドラ・ナート・サニヤル氏と共に計つて、軍隊や學生の誘致に力めたのである。

秘かにスパイの目をくゞつて『革命の檄文』が配られた。それには五六百の志士が獨立の革命を起すために、既にアメリカから歸つて來てをり、尙ほ續々として歸つて來つつある。革命運動が成就したならば、學生は立派な官吏として採用されやう。革命後にはハル・ダヤル氏が新興インドの國王になる筈で、革命黨の首領が飛行機に搭乘して外國から歸來すると共に、一齊に革命の暴動を起すと書いてあつたのである。

最も彼等がその秘密運動の中で、力を入れたのはインド兵の誘致であつて、革命の檄文は複寫され、また複寫されて軍隊内に配布され、また或る志士は募兵に應じて軍隊内に入り込んだのである。或は血縁ある庸兵に接近して叛亂を勧め、かくてラホールの騎兵第二、第三聯隊は、一九一四年の十一月の二十七日を期して、一隊はミアン・ミールの武器庫を襲ふて武器を奪取し、一隊はジャール・サヒブに急進して革命黨の率ひてゐる農民軍の一團と合し、茲に最初の旗上げをする筈であつたが、またしても憎むべきスパイ、永久に呪はるべきスパイのたみに、早くもイギリスの士官が警戒するところとなつたので、一旦中止の止むなきに至つた。

ここに於てか翌一九一五年の二月十九日の夜半にラツパの合圖と共に、同聯隊は突如起つて隣接の砲兵聯隊を襲ふて、悉く聯隊内のイギリスの士官を屠らうとし、早くから氣脈を通じてゐたパンジャブ歩兵第二十六聯隊も、同日の同刻に革命黨の一團と内外呼應してフェルゼポールの武器庫を襲ふべき手筈を定めてゐたが、まさに革命の烽火のあがらんとする間に、同じくスパイの密告によつて計畫が發覺して、失敗に終つてしまつた。それで其後騎兵二十三聯隊では、更に再起の計畫をなし、先づスパイの疑ある者を物色して之を血祭にあげ、且つ密かに爆彈を製造し

て、イギリスの士官を塵殺せんとしたのであるが、不幸にも爆彈が爆發したので、またもや陰謀が發覺し、多くの逮捕者を出し特別法廷が開かるるに至つた、此の時逮捕されたものが總數四千人に達し、其の中七百人が有罪を宣告せられた。これは今までインドに起つた最も大きな陰謀事件として記憶されてゐる、有名なラホール事件である。此の事は世界の耳目を聳動したもので、アメリカの新聞の如きは、絞殺四百人、終身懲役八百人、監禁追放一萬人と報道した程である。

此の陰謀が暴露すると共に幹部は、ボース君とサニヤル君とを除いて、他はことごとく捕縛されたのであるが、兩君の捕縛を免かれたのは眞の天祐的であつた。此の時サニヤル君はベナーレスに行つて、其處の秘密結社の連中がラホールの暴動と策應するやうに準備してゐて、うまい工合に留守であつたのであるが、ボース君は何だか家のまはりの様子が宵に變に氣に掛つて、日が暮れると同時に、こつそり石の塀を乗り越へて、親しくしてゐた隣の家へ泊めてもらつたのであつたが、其の留守の間にボース君等の秘密本部は、イギリスの庸兵に包圍されて、全員が捕縛されて行つたのであつた。實に間髪を入れざる危ない事であつた。このラホール事件は直ぐに第二ラホール事件を起し、二百五十人の逮捕を見、八十餘人の有罪者を出した。次で小陰謀があら

でもこちらでも勃發し、ラホールを中心としたパンジヤブ地方は、蜂の巣をつついた様に亂れたのである。六月十二日には運河畔で巡視兵が暗殺されたが、これはラホール事件の逮捕に對する報復であつた。

からうじて身を以て逃れたボース君は、巧みに變装して長驅東に走つて思ひ出のなつかしいデルヒーの町を通つて遠くガンヂス河の中流にあるペナール町に逃走し去つたのである。ペナールには青年の有力な秘密結社があつて、皆々岩のやうな大決心をもつて、ラホールの失敗を挽回しやうとしてゐたのである。彼等はあらゆる手段を用ひて武器や彈藥を集める事や、爆彈を製造する事や、軍隊に革命文書を配付する事に努めて、一生懸命に烽火の準備に急がしかつたのである。其處へひよつこりとボース君が現はれて來たのである。わけてもサニヤル氏は彼に『生きてゐたか』と抱き付いて男泣きに泣いたのであつた。彼等の間に鬼才のボース君が加つてくれたのは、百萬の味方の様に思はれたのであつた。サニヤル君は全團を率ひてボース君の指導にまかせてゐたのであるが、計らずも爆彈が破裂して、陰謀はまたもや暴露し、時を移さず踏み込んで來た警官のためにサニヤル君の外有力な幹部が全部逮捕され、二百人の有罪者を見るに至つた。此

の時の爆彈の破裂によつて、ボース君は手に負傷をして指が二本ぶらぶらになつてしまつたのである。今でも彼の左手の指が曲つたままになつてゐるのである。

この時も運よくボース君は、身を以て逃れたのであつて、イギリスの官憲は再び齒がみをなして此の『お尋ね者』を逃がした事を口惜しがり、イギリスの新聞は爆彈で彼が死ななかつたのは残念至極だと書いたのである。ボース君の首に對する懸賞金は更に増されて五千圓になつたが、彼は其のままインドには遂に姿を見せなかつたのである。

## 七、日本へ逃亡

ラホール事件、ペナール事件の首領として最も重大視されてゐたボース君——現インドの武斷的獨立派の最首領が行衛不明になつたのである。草を分けてもさがそうと云ふ、イギリス官憲の搜索は嚴重である。今では彼はどうしてもインドには居る事が出来なくなつた。そこで彼は一度日本へ渡らうとしてカルカッタへ姿を現はし、いよいよ日本を指して亡命の人となつたのである。カルカッタを出發した時は、曉の朝まだ早い時であつた。彼はガンヂスとフーグリーの兩河



から滔々として吐き出す濁流の中を、淺瀬を避けて行く汽船の甲板に立つて、陸の見えなくなるまで見送るのであつた。空には明星が爛々と輝いてゐた。

『さようならインドよ、希くば健かに』

彼の目の前にはジエブルの幼き時代のこと、デルヒーの街のこと、ラホールのこと、ベナールスのこと、パロダ大學のこと、ヒマラヤ連峯のこと、それ等の思ひ出や聯想が、走馬燈のやうに浮ぶのであつた。——さようならインドよ、竹馬の友よ、同志よ、亡命して行く彼の男の目には流石に熱い涙があふれてゐた。

### 八、シンガポールの悲哀

船はシンガポールを指して行く。然し彼にとつてはシンガポールは悦しからざる記憶の土地である。彼が憧憬の日本に對して、初めての幻滅を感じた土地である。若しや彼は落ち人の身でなく、更に逃るべき良き土地があつたら、日本以外の地を選んだであつたであらうほど、シンガポールは日本に對する憧憬の裏切られた土地である。

その裏切られた事件といふのは、シンガポールの印度兵反亂に對する、日本の鎮壓であつた。

——一九一五年の一月、即ちボース君等がラホールの陰謀を着々として歩を進めてゐた時、シンガポール駐屯のインド軍隊がボース君等の誘致に應じて早くも騒起して獨立の旗をあげたのであつた。

夜半に突然鳴り響くラツバの聲と共に、アレキサングー兵舎に居た輕歩兵七百名は、俄かに起つて革命の烽火をあげ、彈藥庫と糧食庫を占領し、林籐を突破して深更にプキテマロードのヤング總督邸に迫つたのである。かくてシンガポールは物の見事に彼等の手に歸さうとしたのであつた。ここに於てか海峽植民地政府は大に驚いて、無線電話を利用して各國艦隊並びに各國の領事に救援を依頼したのであつた。

これより先き、暴動が起きると同時に、シンガポールに停泊してゐた、日本の二艘の軍艦は、救援を要求されるのを豫知して、いち早く港外へ飛び出して、中立の態度を採つてゐやうとしたのであつた。然るにイギリスの電報を受けたフランス軍は、翌日早速ジョンストンピア棧橋に上陸し、折からの猛雨を衝いてインド軍に向つたが、鋭鋒に敵せず散々な目にあつて敗北してしま

つたのである。

フランス軍を打ち破つたインド兵は、意氣更に天を衝くものがあつた。やがてロシアの艦隊も來援し、英、佛、露の海陸聯合軍が組織されて、一齊にアレキサンダーの兵營に向つて總攻撃を行つたが、インドの革命軍は却つて勢の天に冲するものがあつた。——彼等は既にトルコの軍艦に對して聯盟を約してゐたので、ただその來援を待ちに待つてゐるばかりであつたのだ。

此のシンガポール騒動の中心は、コロンボの志士グダ・アルパンといふ、齡は早や七十三歳の老人で、老後の思ひ出に巨萬の富を犠牲にして敢然と此事に當つたので、これを助けたのはシンガポールの女皇街ケンコーロに宏壯な邸宅をかまへてをり、資産が一億と稱せられてゐる某君で、某君の父は當時之も劣らぬ七十歳といふ高齡で、グダ・アルパンの親友であつたのだ。

グダ・アルパンは極端な親日論者であつて、彼は輕歩兵の幹部に、少くとも日本軍艦の碇泊せざる時に事を擧ぐべく、而して事のならざる時は必ず日章旗の下に降れ、必ず日本軍は叛兵を保護して、次の準備に對する機會を與へてくれるであらうと告げてゐたのである。

然るに、ああ！叛亂は日本軍艦碇泊時に起きて、日本軍艦の好意ある港外出發に係らずイギリ

スの御氣嫌を恐るる我領事館は、早速に外務省に之を電奏し、外務省は折り返し軍艦に對してイギリスの援助を命じたのであつた。咄、何といふことだ。

——インドの叛兵は、不安と希望の中にトルコ軍艦の來援を待つてゐたのであつた。彼等は朝の光の照り初める頃、水上線上遙かに二隻の軍艦が馳せて來るのを見た。トルコ軍艦來る、トルコの援兵來る、とインドの軍隊はどよめき悦んだのであつた。然しその悦びはつかの間に過ぎなかつた。ああ二隻の軍艦とは外務省の命令によつて、引きかへさねばならなかつた日本の軍艦であつた。日章旗のひるがへるを見ては、彼等は落膽せざるを得なかつたのである。

日本の領事が組織せる百八十名の在留邦人の義勇軍と、××大尉指揮の下に二艦より上陸せる陸戦隊とは、アレキサンダー兵營に向つたのである。萬事は終つたのである。日本軍の出現にインド兵は全く落膽の淵に落されてしまつた。『自國をして其の文明を開發し、其光榮ある古へに復らしむることは日本に倚るの外途なし』と信じきつてゐた日本が、却て彼等の兵營に向つて來たのであつた。

インド兵は之を見て相ひ抱いて泣いたのであつた。而して記憶せねばならぬ事には、ああ悲し

くも記憶せねばならぬ事には、インドの叛兵は、日本軍に只の一發の彈丸も送らずして、グダ・アルバシアを先頭にして、革命軍は隊伍正しく整列して、軍門に降を乞ふたのである。

ああ老いたる有色人種同盟論者は、沈痛限りなき面持でXX大尉と相對した。白髯が風に揺いてゐた。大尉の面には何とも云へぬ悲しさがあつたのだ。——僕といふ此の筆者は此の記事を茲に書きつつ、涙をたれてゐるのだ。若し讀者にして僕の此の原稿を見るならば、涙で點々として文字がよごれてゐるのを見てくれるだらう。僕は男泣きに泣いてゐるのだ。そして此の事を讀者に訴へやうとしてゐるのだ。

グダ・アルバシア老の豫期にも反して、インド兵はわが軍隊によつてイギリスの官憲に引きわたされたのだ。——ああ僕等はどうしてインドの國民に對して顔向けがなり得やうか、ああ日本よ！日本よ！裏切者の日本よと涙がこぼれるのだ、恥かしくて仕方がないのだ。

イギリスの官憲に引き渡された彼等はシンガポール監獄の、合敷木の並木を前にして毎日午後五時を期として、裁判が続けられ、グダ・アルバシアン以下、三百餘名が銃殺され、殘餘は遠島と懲役に處せられたのである。

ボース君には、此の苦い思ひ出が、新に胸に甦つて來るのであつた。此の苦き思ひ出のシンガポールに彼が初めて著いた時、彼はまた二度目の日本に對する幻滅を見たのであつた。——彼はパロダ大學から待つてゐた日本人の群を初めて見た、——然しそれはボース君が待ちに待つてゐた日本人ではなかつた。それは頬の紅な髪、黒い長崎の女の群であつた。彼は日本の娘にむかへられて、その白い寢臺に泣き伏したのであつた。

上海までの航海は自由であつたが、さて旅券のないボース君は、どうして日本へ入らうかとその機をねらつてゐたのであつたが、ボース君の逮捕の通知は、上海にまで來てゐて彼は其處でまた危くも捕はれんとしたのであるが、どうにかこうにかして逃れて、なるが儘になれと、日本行の汽船にのり込んだのであつた。

其の時、同じ汽船に乗つてゐた日本の青年が、ボース君を見てインド人と見てとつて、しきりに面白くインドの美術の事に就て語り始めたのであつた。彼は日本の新聞が報ずる處によると、詩人のタゴール翁が日本へ來るといふが本當かなどと尋ねたりしたのであつた。此青年の話を聞いてゐる中にボース君の胸には、ある奇計が湧き出たのであつた。そして船が神戸へ著いた時、

検査官がどよどよ船に入つて来た時、ボース君は落ちつき拂つて、タゴール翁に似た發音で『タゴール』と自らを名乗つたのである。すると官吏等は俄かに尊敬の意を表して、『おおタゴールさんですか』と握手を求めたのであつた。かくてまんまとタゴールになりすまして、旅券も何も見せないで大手を振つて神戸へ入つてしまつたのであつた。それは一九一六年、即ち大正五年の五月のことであつた。

### 九、退去命令

彼は大手をふつて東京驛へおりた。希望にみちた日本の帝都の玄關に立つた。そして錦繪で見つてゐた二重橋の風景にふれて、何とも云へぬ緊張を感じるのであつた。

ビー・エヌ・タクル——そう彼は變名して押し通してゐた。然し彼の熱情と意氣と理想は、忽ちにして日本の志士の間に知れ渡つた。彼は頭山滿翁や、内田良平や葛生能久や大川周明などいふ熱烈なるアジア主義の志士と交はる様になり、また有力なる政治家の知るところとなつた。彼は公然と日本の政治家を訪ね、志士と交つて日本の政府を動かさうと勉めた——まだ歐洲戦

争はたけなはである。彼は不動經を口ずさんで日本の民衆を動かし、新聞記者を動かし、輿論を動かし、政府を動かして、この大戦中に日英同盟を破壊させて、日本の助力によつてインドを獨立せしめやうと、金剛不壞の大念力を傾倒したのであつた。わけても黒龍會の葛生能久氏とは、肝膽相ひ照らして兄弟の義を結ぶに至つた。

大川周明氏のところには、その時インドの志士ハラバンバ・エル・グブタ氏が隠れてをり、久保田と名乗つてゐたが、この人と共にボース君のタクルはたちまちにして、インド獨立の日本支部たるかの觀を呈した。上野の廣小路にバナナを賣つてゐるボビイ君も、インド獨立運動に暴力を使用しやうとした抹殺團的な暴力家であつた。彼も集つた。また後になつて正體の何者か分らなくなり、日比谷公園でインドの某君になぐられて、聲をはりあげて泣いたシヤストリー君も來た。

ボース君の運動は餘りに華々しかつた。餘りに公然であつた。忽ち亡命の志士の名をかたつてゐるスパイの〇〇〇〇が、之をイギリスの大使館へ報告したのであつた。——おおラホール事件のボース！、イギリスの大使館は愕然として驚いたのである。彼を日本に在いては、どんな恐

ろしい陰謀を企てるかも知れぬ。一刻も早く日本を退去させて逮捕してしまはねばならぬ、そう大使は考へてスパイの報告と共に自動車を外務省に飛ばして、當時の外相石井菊次郎を壓迫して、タクルとグブタは獨探であり且つインドの危険人物であるから、即刻に日本を退去させてもらいたいと要求したのである。——インドのスパイはボース君の前に、欺いて熱烈なるインドの志士たる事を示し、遂にボース君の左の手がベナレス陰謀の時爆弾のために傷いた手から、タクルのボース君たる事を尋ね、泣いて彼に訴へて彼の本名を知つたのであつた。スパイ、スパイ、永遠に人類の幸福のために呪はるべきはスパイである。

イギリスの大使が石井外相を訪ねた其の日、石井外相は當時警視總監の西久保弘道君をまねいて、ボース君を退去せしめる事を命じたのであつた。それは大正五年の十一月二十七日の事である。

その夜ボース君は麻布の筈町の陰れ家に、グブタ君と共に初めて逢ふ冬の寒さにふるへてゐたのである。彼等は冬といふものを全く知らぬ國に生れたので、とりわけ初めての冬近い夜の底冷えはたへられぬものであつた。ストーブに石炭を赤々とくべてゐる時、玄關のベルをけたたまし

く鳴らして、警官が入つて来て、書面を手渡したのであつた。それによると翌朝の九時に兩人共に、高輪警察へ出頭せよといふのであつた。

霜柱を踏んで二人は朝の風にふるへながら高輪警察へ出頭すると、西久保警視總監の命令によつて、向ふ一週間、即ち十二月二日限り横濱から退去せよと云ふ通達である。萬事休す——二人とも寢耳に水のように驚かされたのである。日本よ！日本よ！頼みとして逃れ來た日本も、この二人の身體を入れてくれるには狭いのであらうか、亡命の志士と生れて、日本も安住の地でないのかと、二人の血は筑波風に凍るのではないかと驚かされた。彼は直ぐに黒龍會を訪ねて、この事情を葛生に話したので、葛生君は大に驚いて、早速これを内田良平君に話し、直ぐに頭山滿翁の出馬を乞ふことになり、國士はグブタとボース君の退去命令の解除運動に八方に飛んだのである。

この事を聞き傳へた、ボース君の親しくしてゐる新聞記者も、續々として頭山邸に押しかけて新聞紙上にて歩調を合せて、二君のために力説つとめるところがあつた。其の時ボース君は、新聞記者に對して、

『私は今度日本政府から、許らず退去命令を受けたのが遺憾にたへない。由來私は日本の如き東

洋の先覺國に多大の期待を持つて、参つたのであつたが、事がここに至つてみれば仕方のない事である。貴國の政府が私に退去命令を與へ、私を迫害しやうとしても、私は日本の民衆が私に對して與へてくれた親切には、心の底から感謝をしてゐる。思ふに私を退去させたのはイギリスの大使の運動にあるは論ずるまでもない事で、英國の國是は日本と他の東洋諸國との關係を阻害するにありますから、私の様なものが御國に居ては都合が悪いからです。私を退去させるのは政府の勝手でありませんが、然し政府が私達に對してとつた今度の行爲は、インド三億の民が日本に對する心持に重大なる影響を及ぼす事を忘れないで下さい。また今後私の様な人間が再び亡命して來るかも知れませぬが、此事に對してイギリスの宣傳にのらない様に日本人に御注意を申して置きます』

そう彼は語つて、懽然たるものがあつたのである。運動員は、表面交渉に犬養毅君を推して、石井外相を訪はしたのである。犬養氏は

『政府は彼等インド人をば獨探となしてゐるけれども、自分等は決してそうでないと思つてゐる。彼等は獨立の志士であるが、決して獨探ではない、獨探といふのはイギリスの口實に過ぎな

い。恐らく石井君自身も、政府も彼を獨探とは認めまいが、——事實はイギリスから頼まれたに相違あるまい。一體政治犯のために亡命して來てゐる者は、どこの政府でも保護するのが當然で、これを國外に放逐するといふのは、日本の主權の存在をイギリスによつて左右せられる事になつて、日本の大恥辱である。故に政府としては此際斷じて退去命令を取消すか、或は弱者をして強いて死地に陥れる様な劣策をとらず、多少亡命の餘地を與へられたい』

と頼んでみたが、眼中にイギリスあつて日本なき石井は、頑として應ぜず、  
『政府として一旦命令を出した以上は、是が非でも之を取消す譯にはゆかぬ。たとへ彼等が獨探でなくとも、同盟國たるイギリスにとつて悪い者である以上、それを日本に置くは日本とイギリスの感情を阻害する事になり、結局日本にゐてくれるは日本の害になる人だから、必ず十二月の二日には立つてもらはねばならぬ』

と國家權力といふ虎の威を借つて、狐の如く狡猾な辯を弄して、頑として應じないのである。それで更に床次竹次郎君や、岡崎邦輔君も運動して石井を説いて見たけれどもやつぱり駄目であつた。犬養君は更に花井衆議院副議長を動かし、石井と再見し、佐々木安五郎をして三浦觀樹將

軍を説かしめ、更に歸路寺尾享博士とも相談をして、八方に運動の手を擴げたが石井は頑迷にもどうしても動かうとは云はぬのである。

かくて此の問題は政治問題と化し、政友會と國民黨は合同して、議會の劈頭に質問を發する事にまでなつた。然し退去命令は議會の開會まで待つてをらぬ。時間は容赦なく過ぎて行くのである。志士は火の様に怒つて運動してゐるが、外務當局は動かうとはせぬのである。石井は自分の權力の偉大なのに、誇らしげに人々を冷かに窓から見おろしてゐるのみであつた。

退去の日はあと二日に迫つた。然るに二日に横濱を出帆する船は香港行きか、上海行きよりはなく、當然に死刑への旅である。死の海への船出である。周囲の人々は心配に夜も眠らなかつた。此の事に同情してゐた當時の農商務大臣をしてゐた河野廣中翁は、同僚である石井菊次郎君に、若しインド人の身代りになれるなら僕を殺してインド人を二人共助けてくれと云つた、然し石井は冷然として葉巻をくゆらせてゐるばかりであつた。

志士は香港や上海へ彼等をやる事は出来ぬ、せめて亡命の餘裕のあるアメリカへでも逃したいからとて、十日間の退去延期を乞ふたのであつたが、外相は依然として聞き入れず、明かにイン

ド人をばイギリスの官憲に引き渡して殺す事に愉快を感じてゐるらしく見えたのであつた。

志士等は更に警視總監の西久保弘道君を訪ふて、インド人が獨探でないから、逃してくれまいかと頼んだが、西久保も同じく

『二日午前十時に横濱を出る船がある。それに乗るべき必要上、二日の午前七時までに東京を出發せよ、然らざれば手錠をはめて、強制執行をするばかりだ』

と空うそぶいてゐる許りである。委員は帝國ホテルに引きかへして來た。杉山茂丸君や内田良平君や佃信夫君や、美和作太郎君が、頭を合せて相談してゐるけれど、どうにも策のほどこしやうがなかつた。——『下劑をのませて病氣にしやう、まさか病人をいくら警視廳も引き立てる事は出来ぬだらう』そんな事をまで語りあつた。そこへボース君とグプタ君とが自働車で帝國ホテルへやつて來た。それで早速この事を語ると

『下劑まで飲んで假病を使ふことはよしませう。諸君等が盡して下さつた御同情と御厚意は厚く忘れませぬ。此の上は甘んじて捕はれて死んで行くまでです』

と覺悟の敢然たるものがある。この覺悟を見るにつけても、志士等は涙の種であつた。助けて

やりたいがどうにもかうにもならぬのである。政府のイギリスに對する腰拔をば、勢力があつても何ともする事が出来ぬのである。運命は刻々に迫つて行く。

黙つてゐる頭山翁までが、すつかりさしをなげてしまつた。そして『石井の首と交換するより外はない』と微笑したのみであつた。そして柔道家の血氣鬱勃たるXX君が、堅く頭山翁の言葉に感激して、蓋しインド人が捕縛されて船に乗せられると同時に、一身を犠牲にして、石井外相をXXする事に決したのである。志士等は石井外相をXXする事によつて、インド三億の民に日本國民の志を知らしめ、以て日本として世界に謝罪せんとしたのであつた。危き哉石井外相よ時機は刻々に迫つて行く――

## 十、義人の出現

志士の救護運動と新聞紙の石井攻撃は、日に烈しくなつて行く。

この喧ましい新聞の記事を読んで、どうかして助けられないものかな、どうかして助けたいものだ、と、秘かに心配してゐた人があつた。

それは新宿の電車の終點にある、大きな中村屋といふパン屋の主人だ。彼の妻君は有名な相馬黒江女史といつて、藝術家のパトロンになつたり、ロシアの亡命客のエロシエンコを保護したりしてゐた女であるが、その夫たる相馬君も、似た者夫婦で同じ變り者であつた。中村屋のうしろには、今でも小さな洋館があつて、そこには嘗て天才彫刻家の、萩原守衛君が住んで、黒江女史の保護の下に、彫刻を作つてゐた處で、後に其處へは現今の帝展洋畫の審査員の、中村彝君が住んでゐた處である。下が物置きになつてゐて、二階が六疊の部屋で、便所や流しが別についてゐるのであつた。

相馬君は、新聞の記事を読みながら『あゝ氣の毒なものだ、どうかして助けられないものかな、どうかして助けたいかと考へて、ふと何氣なく頭をあげて店先をみると、ボース君の救助に東西に奔走してゐる筈の中村弼氏が、ひよつくりと店先へパンを買ひに入つて來たのが見つかつたのである。

中村弼氏は、法學博士の中村進午氏の令兄で、植民協會の會長をしてゐる國士であつて、新宿の終點の近くの大久保に住んでゐる所から、變り者の中村パン屋の主人とは親しくしてゐるので、



時々金なんかをくづしに来る人であるのである。

相馬君は此の中村弼氏の顔を見ると、頭にある閃めきが来た。——俺なら助けて隠せるだらう、そうだ此の場合に俺より外に、あのインド人を助け得る者はないのだ。

そう考へると、彼は下駄もはかず、店へ飛び出して中村弼氏をちよつと店の片隅へ引つばつて行つて

『此度はインド人の追放の事を、心から同情申してゐますが、何とも方法がありませんか』

『いやそれで困つてゐるのだ。八方に運動して手を盡すけれども、どうにも策のほどこしやうがない、惜しい人間を二人まで殺すのです、日本の政府の腰よわには實に憤慨にたへない』

そう中村弼氏は答へた。すると相馬君は更に一段と聲を落して、

『實は色々有力なお方が運動なさつておいでなのであるから、私共が嘴を容れる限りではありませんが、何だか私ならばお隠し出来るやうな氣がするのです。何だかそんな氣がするのです。大隱は市巷に隠るとか申しますが、私の家の奥には、彫刻家の萩原や中村彝君のゐた處がありますから、其處へ隠したら隠せるかと思ふのです。失敗するかも知れませぬが、何だかそんな氣持が

するのです。若し何でしたら、及ばずながらおかくまい申しませうか』

意外な言葉に中村弼氏は、穴のあく様にじつと此のパン屋の主人の顔をみた。そしてしばらく目をつぶつた後、

『御手段がありますか——出来る事なら御願ひ申す、早速頭山翁に相談をするから』

とそれからパン屋の主人の耳うちを聞いて、何事かをうなづいて中村氏は早速、帝國ホテルに走せつけたのであつた。

帝國ホテルでは中村弼氏の話聞いただけで、誰もパン屋の主人ではね。それにドンナ人物か、よく素性もわからぬではないかと、眞面目に聞いてくれぬのであつた。そして相ひ變らずの小田原評定に、時刻が益々移つて行つた。その時、尾崎紅葉の小説の荒尾護介のモデルと云はれてゐる佃信夫氏が入つて來たので、中村氏は『どうだらう新宿の終點のパン屋の主人が……』と彼の事を話すと、佃氏は皆に『中村屋の主人なら、僕は柏木でよく知つてゐる。彼は非常な變りもだから、必ずやりとげてくれるだらう、今の場合にそうするより外に方法がない』

そう裏書をして讚成してくれたので、衆議は早速きまつて、——それは實にボース君等が追

放されやうといふ、前日の事であつたのだ。

話がかはつて、相馬君は其の日の午後、上野の或る茶席で彼の關係してゐる會社の、株主會議があるので、それへ出席するために妻君にも行く先をつけず、黙つて一寸出てくるからと云つて出て、會議をやつてゐる所に出掛けて、すつかりボース君を助ける大事な使命を忘れてゐたのであつた。そして彼は株主會議がすんでから、——丁度それは午後の六時頃、——皆で飯を食つて、茶をのんで茶碗を下に置くと、

『忘れてゐた!』

顔色をさつと變へて、彼は立ちあがつた。そして早速家へ電話をかけたのだ。

『何か家に變りはないかね』

出て來たのが黒江女史だ

『何かつてサツキから中村さんが來られて、八方へ電話をかけて捜してゐたのですよ』

『そうか早速かへるから』

と電話をきつて、友達には大事な急用で歸らねばならぬからと、直ぐに人力車を急がせて、家

へ飛んで歸つたのであつた。中村弼氏は、相馬氏の姿をみるなり、

『直ぐに今から來てくれ、用意は出來てゐるから』

とそれから二人は連れ立つて、赤阪の靈南坂の頭山翁の屋敷へ行つたのであつた。

家の前にはボース君とグブタ君とが乗つて來た自動車があり、その直ぐ後には、退去命令をさしつけた其日から、警視廳の高等刑事が尾行してゐる自動車が停つてゐた。

二人が門を入らうとすると、自動車の中の刑事共が、エヘン、エヘンと示威運動的にせきばらひをするのである。——

相馬君は今に見てをれ、鼻をあかしてくれからと、ニコニコしながら玄關を入つたのであつた。

相馬君が家へ入るや『大正の天野屋義兵衛』などと云つて、誰も彼もが手を堅く握つてくれるのであつた。——彼は其處でこの憐れな運命の前に、泰然と動じないインドの二青年を見て、喉が暑く團子でもつかえてゐる様に感ぜぬ譯にはゆかなかつたのである。

二人の印度人は、どうぞよろしくと頭を下げる。黙つたゐた頭山翁も何分よろしく頼みますと

挨拶をした。それから中村弼氏と相馬氏とは、また玄關から出て靈南坂の下へ出て、横丁へ曲つたのであつた。——誰も尾行して来るものがないかと、氣づかひなから前後左右を見渡すが、誰も來ない、そして其處には、灯を消した自動車が一臺、闇の中に止つてゐるだけであつた。

この自動車は、當時東京で一番快速力だと噂されてゐた、杉山茂丸氏の自動車で、その快速力を利用して、警視廳の自動車をまいてしまはうと云ふのであつた。

相馬氏と中村氏が頭山翁の玄關を出ると直ぐに、ボース君とグブタ氏とは、佃信夫氏と柔道家の宮崎一貫氏とに助けられながら、跣足のままで頭山翁の庭から、隣の家を乗り越えて、其の隣りの家の座敷を四人が、黙つて泥足のまま走りぬけて、闇の中に待つてゐる自動車の方へ飛んで行つたのであつた。事の意外に隣りの家の者は、ただ驚いてゐるばかりであつた。

『誰も尾けて來ないか』

『だい丈夫だ』

『新宿の終點の方へ』

車の後の灯を消して、カーテンを深くおろした怪しい自動車が、それから全速力で走せて行つ

てしまつた。

新宿の中村屋では、毎夜九時には店をしめる事になつてゐるので、その店のしめぎわには、必ず急に客が大急ぎで買に入り、非常に雑踏するのが常で、カーテンを半ばおろした店へは、どやどやと客が澤山入り込んでゐた。折よくそこへ、自動車は著いて、四人とも店へ入つて、すつと二階へ通つてしまつたのであつた。

主人が客を三人も、然もまつ黒な體の大きな異國人を二人も連れて二階へ通つた事は、店の十四人の店員が一人も氣がつかかなかつた。嘘のやうな話だが、全く誰にも氣がつかかなかつたのであつた。

やがて三人を二階へ入れると、インド人は黙つて堅くなつたきりである。これを見ると中村屋の主人たる相馬氏は、直ぐに下へおりて、體の大きな店員を四人呼んで外套を著せ、

『お前達は一言も云はないで、黙つてあの自動車に乗つて、どこかへ行つて乗り捨てて直ぐに歸つて來い』

と命じたのであつた。

四人の店員は不思議な事と思つたが命ぜられるが儘に、自働車に乗つて、四谷見附まで行つて、車をおりて電車で歸つて來たのであつた。——この車の客が、入れかはりになつてゐる事は、自働車の運轉手も知らなかつたので、杉山氏の家に歸つて、客はどうしたかねと尋ねられた時、『新宿のどこかへ寄つて買物をして、それからまた乗つて、四谷見附へ引きかへして、其處で降りてドコかへ行かれました』と答へたきりであつたのである。

### 十一、インド人の失綜

頭山翁の屋敷の門は明け放された儘で、玄關にはボース君とグブタ君の靴が二足、行儀よくきちんと並んでゐた。家の中には灯があかるくともされて、人の話し聲が朝まで断えなかつた。いよいよボース君が逮捕されねばならぬ朝である。門の前にはボース君等の乗つて來た自働車、と警視廳の尾行自働車とが、あくびをしながら朝まで二人を待つてゐるのである。牛乳配達や新聞配達が通り出したが、玄關のインド人の靴はきちんと、主人を待つてゐるので

ある。今にも出るかと門を出たり入つたりしてゐた待ちあぐんだ尾行は、徹夜の眠い目をこすりながら、恐る恐る玄關へ來て、

『インド人等はまだ出ませんでしやうか』

と尋ねたのである。すると頭山翁は懐手をしたまま、のつそりと玄關へ自ら出て來て、

『インド人は昨晚歸つた筈ぢやが』

『ヒエーツ歸りました』

頭山翁は黙つてつつ立つてゐる。刑事等はまつ青になつて腰をぬかさんばかりにした。

『でも此の通り靴もあります、どうぞ隠さずに出して下さい』

『いや居ないよ、昨晚の八時頃に歸つて行つたよ、何なら家を捜して下さいでも差支がないのぢや』

そう云はれると、お互ひに顔を見あはせて、更に入つて捜す勇氣も出ず、

『いえ先生がそうおつしやれば、御宅には居ませんでせう』

『昨晚來て別れの挨拶をしてそれから歸つたのぢや』

取りつく島がなくて、刑事等は泣きそうな顔をした。

『先生私等は首になります、どうか助けると思つて出して下さい』

『そりやお前等は良い功德をしたものぢや。お前等が首になつても、インド三億の民を助ける事になり、日本とインドの國交を全うする事が出来るのぢや』

この御挨拶に驚いて、まつ青になつた刑事は、警視廳へ電話をかけた。直ぐに高輪署と霞町の刑事が来て、頭山翁の門に網をはつてしまつた。そして周圍をさがして見ると、頭山邸の庭の堀には、大きな泥足の跡が歴然とついでゐるのみであつて、今更に啞然としてしまつたのである。この時に尾行した刑事は、皆免職にはならなかつたが、其の中の一人だけは、何か感ずる處があつて、今では信州の片倉組の店員となつて、さつぱりと巡査の足を洗つて、繭の買出し方をやつてゐるといふ。

かくして午前十時の上海行き博愛丸と、正午のポリネシアン號とは、豫定に相違して二人のインド人をのせないで、出帆してしまつたのであつた。

夕刊——の重大事件だ。あの有名なインド人が、自動車尾行をまいて行衛不明だ。新聞は一方

に大喝采を以て、頭山翁を讃賞すると共に、面白くこつびどく、警視廳の間抜けぶりを嘲笑したのである。

警視廳も外務省も大狼狽だ。總監も石井外相も草を分けて捜すやうに嚴命するけれども、杳として分らない。

實に警視廳が建ち始つて以來の大失態である。自動車で尾行をしながら、然も日本人ならいざ知らず、毛色の變つたインド人を取り逃がしては威信に係はるといふので、いこちになつて捜索し出したのである。外國人だから、きつと肉を食ふだらうから、肉屋へ手をまはして、肉を買ふ分量の増した家聞いて、片つばしから家宅捜索をし、パンや米の注文が増へた家と見れば、これと同じく刑事が行つて取り調べたので、この警視廳のインド人の捜索のために嫌疑を受けて家宅捜索を受けた家が七十七軒にのぼつたのであつた。

松井高等警視の如きは、まつ赤になつて部下を督勵するけれど、依然として行衛不明の儘である。——かくして大正五年の十二月の一日の晩から、大正六年の五月まで行衛が皆目わからなかつた。齒齧みをするけれども分らないのであつた。

話は前にもどつて、中村パン屋の主人の相馬君は、インド人を奥の部屋へ入れると同時に、店員を全部集めて、事情を話し、

『こんな譯で日本のみならず、インド人のため、アジア人のために、決して人に話してはならぬ。妻君にでも話してはならぬ。これを隠しをへないとあつては、神に對してすまぬ事である。必ず天に誓つて秘密を守つてくれ。それから萬が一、刑事が知つて逮捕にやつて來たら、必ずお前達は三人づつ力を合はせて、刑事を縛つてしまへ。若し正服の巡査が來て、劍をぬいたら、お前達は庖丁で刺し殺しても良い、其の間に俺は必ず、二人を逃がしてしまふから』  
と嚴命を發したのである。この事は實によく護られたので、中村パン屋の職人諸君全部にとつて、大なる名譽と云はねばならぬのである。

## 十二、石井外相の感謝

草を分け、地を掘るやうに捜すけれども、二人のインド人の在家は分らぬ。イギリスの大使の抗議は日に嚴重になる。警視廳は板挟みになつて血眼である。

ドイツの警察制度と其の組織を争ふ日本の警察が、六ヶ月の日子を費しても尙ほ、二人を發見出來ぬといふ事は、イギリスの大使にとつては、確かにベテンとしか思へなかつたであらう。遂にイギリスの大使は石井外相に對して、皮肉な言葉を吐くに至つたのである。石井外相は、イギリスの奴隸の如く、番犬の如く、イギリスの御命令が一大事とばかりに、陛下の御言葉の如く、恐縮して岡つ引き根性を發揮してゐるのであるが、イギリスの大使の身になつてみれば、石井が日本の大臣で、日本の臣民であるに相違なく、都合よくしてやつてゐると見るは當然である。疑ひは當然である。

石井外相は何分にも日本人である次第だから、イギリスの大使に平身低頭して、小學生が先生に叱られる時の様に言ひわけをしても、イギリスの大使の疑ひの晴れぬのは無理もない。皮肉やイヤミが積つて行く中に、石井外相の胸には、コンナに日本人たる事を忘れてイギリスに忠誠を計つてやつてゐるのに、餘り人を馬鹿にするといふ反感が湧いて來たのである。——そしてやつと自分は日本人で有つたと覺り初めた時である。——その時外務省の若手が、インドの事情を翻譯して來るのを見ると、みなボース君やグプタ君を日本の政府が保護して、かくしてくれた事に

對する感謝の文章であつた。

石井外相はインドに於ける反響が、これほど大きからうとは思はなかつたのであつた。實に彼等は石井外相がうまくやつてくれた様な調子なのである。石井外相は、今更に自ら恥かしくなつたのである。

五月のある日、寺尾亨博士の處へ、石井外相から來てくれといふ手紙が來たので、寺尾博士はまたボース君の追求かと苦い顔をして外務省へ行つたのである。すると案に相違して石井外相は、『インド人を追放しやうとした、俺が悪かつた。今になつてインドからの感謝に驚いてゐる。早速今日、警視廳へ搜索の中止を命じ、暗に保護する事を命じて置いたから、安心してくれ、此事に就ては君や一同に感謝したい。ついでには頭山君に是非逢つて、御禮を云ひたいから、逢はせてくれ』

と云ふのであつた。それで寺尾博士は、

『分つた。君もやつと目が覺めたかね。然し頭山に逢ふと云つた處で、頭山は君の處へ行くまいし、君も頭山を訪ねる事は大臣の手前出來まいから、どこかで逢はせやう』

とそう云つて歸つて、日を期して、四谷の三河屋で、二人を逢はせる事にしたのであつた。

その晩になつて、石井外相は頭山翁に對して、いろいろと感謝の意を表したところ、頭山翁は、

『うんそうか、そうか』

とたつた、これだけを語つたのみで、他には何事も云はなかつた。それで石井外相は、寺尾博士に向つて、

『どんな處に隠したのか』

と尋ねたので、寺尾博士は、新宿の中村屋といふパン屋の奥の二階の、六疊の間に監禁同様に押し込めてあるので、體がぐつと瘦せてしまつたと云ふ事だと云ふ旨を細かに話すと、石井外相はそれを聞いて、

『そりや人道問題だ』

と云ふたとの事だ。——どうも恐ろしい人道問題もあつたもので、イギリスの大使の命令で海外へ放逐するのが人道問題でなくて、救助して六疊間に押し込めて置くのが、人道問題だそうで、寺尾博士は吹き出しそうになつたとの事である。石井外相は間接に相馬氏に命をば助けられたの

だから、これから相馬氏を『命の親』と思ふが良い。

### 十三、日本へ歸化

かくしてポース氏は助けられ、グブタ氏は目下メキシコに渡つて、畫策をしてゐる。

二人が相馬氏の家には保護されてゐる間の日課の一つは、黒江女史が、二人に日本語を教へる事であつたが、二人とも驚くべき程の上達で、ことにポース氏の進境は早く、半歳の中に、日本語を自由にあやつるのみか、日本の文章を読む事が出来る様になり、今では日本語の演説は、其の雄辯なること、永井柳太郎氏の比ではない、更に大きな内容と更に大きな熱とがあり、これがインド人かと驚くほどである。

ポース氏は當時タクルを名乗つてゐたので、相馬氏は之に田口といふ姓を與へ、グブタ氏は久保田と呼んでゐた。犬養翁は更に田口の姓に豊といふ名をつけて、田口豊と最近まで呼んでゐた。

ポース氏の身が自由になると共に、相馬夫妻はポース氏の人格に惚れてしまつて、其の愛嬢の

トシ子さんを、無理強ひに、ポース氏の妻にさせた。今では六つと四つの二人の子があり、昨年遂にポース君は日本に歸化してくれた。——僕は敢て歸化して、くれたといふのだ。

僕はポース君が日本に歸化して『くれた』ことを悦しく思ふ。日本を見棄てないで日本とインドは永く永く、握手をして行かねばならぬ。

更に僕はポース君とトシ子さんの混血兒の二人に對して、二人が他日大きくなつた時、日本人にも稀なる英雄であるこの父の人格を、本文によつて知つてほしい。そしてポース君の血とトシ子さんの血が合して、一つとなつたやうに、その子供さん等は、必ずインドのために盡してほしいのだ。——インドと日本の結合のために盡してほしいのだ。

神はインドと日本を一體とするために、愛によつて一體とせしめるために、ポース君とトシ子さんを結んだのではあるまいか。ポース君の子等よ、おん身の父なる人の在世中に、おん身の父の祖國が獨立せざる時は、おん身等は父に代つてインド三億の民衆のために立つ義務がありますぞ。

今ポース君は明治神宮の程近い、青山の穩田に靜かな平和な生活を營んでをり、世田ヶ谷の國



士館の先生をしてゐる。願はくば彼等一家の上に、光榮と勝利と幸福の輝く日の近からん事を。

(大正十四年一月「東洋」)

### ボルガを遡りて

——ロシアに革命が成功して、亡命客が母國へ歸り得た時は、どんなに悦しかつたらうか、この詩、は都へ歸るロシアの志士の氣持になつて唄つたものです。

なつかしきボルガ河の水の音よ

僕は生きて再びお前の上を

遡り得やうとは思はなかつた

あゝ懐かしき波の音よ

この音はむかし僕が亡命した時に

聞いたのとやはり同じ音だ

だが今きくのと昔聞いたのとは  
あゝ何といふ氣持のひどい變りやうだらう  
昔 僕は船底の積荷の間にかくれて  
波の音とスクルーの響を聞きながら  
都に残した戀人や同志を憶うて  
胸の底から涙がこぼれたものだ

そのお前の上を

僕は再びのぼつてゆく——  
革命が成功した都へと遡つてゆく  
靜かに甲板に佇んでゐると  
艦の空に満月がかかつて  
スクルーに亂された波が銀色に光り

岸の黒い森が後へ後へと走つて去る——

——おゝあの森蔭の石牢の塔！  
あれがブレーブを暗殺したサゾノフが  
銃殺された獄屋なのだ  
サゾノフよ——僕は胸が一ぱいだ  
君のやうな尊い犠牲者のおかげで  
僕達は再びボルガを遡り得るのだ

ああ——モスクバの停車場で  
煙草賣に化けてゐて  
ブレーブに爆弾を投げた時の  
あの壯絶な光景を思ひ出す——

君は自ら投げた爆弾に深傷を負ふて  
敷石の上に倒れてしまつた

それから僕は君を棄てて逃げた  
そしてこのボルガを降つて

コーカサスの同志の許にかくれた  
あれからもう十幾年を経たらうか  
若かつた僕の髪には

もう白毛がまじつてゐる  
でもあの時の事を思ふと胸が轟く

ボルガの水は渦巻いて月光の方へ  
深くよどみつつ流れて去る

革命が成功して都へ歸るのなに  
何といふ胸の沈んで悲しいことだらう  
——死刑や追放の同志の幽霊が  
森の彼方から懐しげにやつて来る——

ペテルスブルグの冬宮のあたりを  
よく手を携へて散歩した  
ナターシャは今どうしてゐるだらうか  
ほんとに熱情的な革命婦人だつたが  
いま頃は誰か同志の妻になつて  
子供の五六人も持つてゐるだらうな  
早くその子供達を抱いてやりたい

故郷に残した父や母はひよつとしたら  
もうこの世には居ないかも知れぬ  
暮れてゆく静かな窓邊に子守唄をうたひ  
柔かい乳房を含ませてくれた母や  
雪の中を桶を引いて  
教會へ僕を連れて行つてくれた父は  
もう再び僕を抱いてくれぬのではないか

——人々はもう寝てしまつてゐる  
眼覺めてゐるものは船燈と僕だけだ  
だが僕はどうして此の夜を眠れやうか  
僕は月光に碎くる川波の音を聞きながら  
死んだやうな静寂の中に佇んで

ありつたけの追想にふけりたいのだ

人は生れていづくに行くか僕は知らぬ  
しかし何時も變らぬはボルガの音だ  
闇の底をとこしへに流るる水の音だ  
おゝ渦巻き流るゝボルガの水よ  
お前は昔から僕のやうな人間を  
幾度のせて流れたことだらうか

更けてゆくおほ空の月よ  
お前は人類が地上に現はれてから  
數へきれぬ興亡盛衰の悲壯劇を  
いつも静かに見おろしてゐるのだ

人の世はかくして昔から未来まで  
同じ芝居をくりかへしてゆくのか――

なつかしきボルガ河の波の音よ

僕はなんだか自分が自分で

歴史のなかにゐる人間のやうな気がする

なつかしきボルガ河の波の音よ

更に深く澄みとほつて響いてくれ

僕はいま舊い戀人や友人の許に歸つてゆくのだ

## 孟宗の藪

静けさが冴えわたる夜です

寝てゐると庭の藪から幽かに幽かに

笹ずれの音が聞えてきます

その笹ずれを聞いてゐると

忘れてゐた古い感情が

しめやかに胸に湧いて來たのです

僕は静かに寢床から起きあがつて

電燈を消して蠟燭の灯をともし

古風な氣持で詩を作り始めました  
蠟燭の淡い灯にぼうつと照らされ  
古い机が暗い陰影を床になげ  
額がぼんやり壁に浮き出してゐます

それ等はまことに古めかしい氣持です  
しかし僕の心は更にもつと深い深い  
淋しさを求めてやみません

僕は戸だなから祖父の手燭を捜し出し  
机の蠟燭をそれに移してさゝげながら  
雨戸を開けて庭石におりたのです

庭の奥には孟宗の藪があります  
藪の中に灯を入れると竹の幹が  
ぼんやり暗がりに浮いて見えます  
僕は灯をとつたまゝ藪に別け入りました  
手燭の灯にぼやされた竹の幹が僕を圍み  
その竹の奥を更に深い闇が包んでゐます  
上を仰ぐと手燭の口から射す光に  
竹の篠たと繁みあふた細い葉が  
くつきりと照らし出されてゐます  
そして竹の幹に手を掛けてゆすぶると  
手燭に照らされた葉がさらさらと

何とも云へぬ音を立てるではありませんか

僕は更に藪の奥に分け入ります

そこは山の麓につよいてゐて

泉がいつも湧いてゐるところです

藪に囲まれた窪に落葉が黒々と朽ち

その落葉の中から美しい清水が

夜もなほもれあがつて湧いてゐます

そしてその泉が竹の根の間に

細い流れを作つて庭へおりてゆき

築山のやり水になつてゐるのです

おやここに藪柑子が赤い實をつけてゐるぞ  
夜ふけにかうして手燭で照らしてみると  
ほんとにしみじみと淋しい實だなあ

——かうしてこの昔ながらの感じに  
じつとひたりながら藪のなかを  
さまよつてゐるのは何とも云へない氣持です

手燭の灯が盡きるまで僕は

かうして藪をあてどなくさまよひ

竹の幹を叩いたり葉をゆすぶつて見よう

## ダンヌンツイオ君

イタリーの與太ダンヌンツイオよ

貴様は飛行機にぶち乗つて

俺の國へ遊びに来るさうだが

毎日俺は手を舉げて待つてゐるぞ

空の彼方にプロペラの音がする晴れた日は

ともすると俺は外へ出て彼方を望み

「おういダンヌンツイオ」と叫んで見るのだ

俺の根性そつくりのダンヌンツイオよ

貴様がやつて来たならば

借金を質に置いて御馳走をするよ  
灘の生一本に名物の藝者ガールでさ  
晝は晝を恣にし夜は夜を恣にしよう

胸を叩いて話したいものだ

バイロン君が死んでから

世界の詩人の値うちは下つたな

詩人つて奴は神經衰弱の代名詞になつた

多分、貴様の國の多くの詩人もさうだらう

悲しい事には俺の國もさうだよ

それを貴様は見ん事回復してくれた

有難う　ダンヌンツイオ

イタリーの我黨の偉大な與太！



パイロン君がギリシヤの獨立戦に  
單身飛び出したやうな話は

もう物語になつてしまつたと思つてゐたら

こんどは貴様が飛び出してくれた

飛行機にのつて三軍を叱咤し

ヒューメの占領ときてゐる、愉快だ

何とこの俺が踊つて悦んだことか

ダンヌンツイオ萬歳つて叫んでな

獨りで酒杯をあげたもんだぞ

そして貴様が書いた小説を

改めてもう一度読みかへしたぞ

イギリスやアメリカに遠慮してゐる

貴様の國の腰ぬけ政府の命令を

糞か屁のやうに心得て

敢然としてヒューメを占領した勇氣よ

共鳴するぞ其のローロンチックな心に

貴様だ俺だ、俺だ貴様だ

貴様を思ふと胸が轟く

日本のひよつとこ詩人共は

貴様がヒューメを占領したのを見て

舊式な愛國心で御座るとひやかしたり

詩人のなすべき事でないとおすまじだが

なあ君、あいつ等の負け惜みなんだよ

氣にかけるない、なあダンヌンツイオ  
俺がついてゐらあ

貴様がヒューメを占領しなかつたら  
それこそ貴様はそこらの芥<sup>こま</sup>文士と

區別の付かないやくざな代物さ

貴様がお伽噺の英雄の主人公になつたればこそ

本當に男の中の男、詩人の中の詩人なんだ

貴様の氣持が本當に良く分るよ

振れ 振れ ガブリエレ・ダンヌンツイオ

始めて貴様が

ヒューメを占領したと聞いた時

俺は持前の彌次氣分で

イタリー國旗を取り出して

振れ 振れ ダンヌンツイオ!

やい好漢ダンヌンツイオよ

與太で彌次で英雄のダンヌンツイオ!

貴様は面白い芝居を見せてくれた

やがて今度は俺の番ちやて

俺等が同志と共に立ちあがる時は

貴様は彌次つて酒杯をあげてくれよ

貴様はイタリーの國粹主義でやつたが

俺は日本の國粹主義でやるんだよ

貴様の國にも翻譯思想家が澤山ある模様だが  
 俺の國にも御連中が毎日吠えてゐるよ  
 何にも出来ぬ癖に聲だけ黄色く立ててね  
 俺もやるよ見てゐてくれたまへ

世界の詩人に氣を吐いてくれた詩人よ

やいガブリエレ・ダンヌンツイオよ

櫻の花咲くこの日本に

イタリーの風光に似てゐるといふ日本に

太平洋上に匂つてゐる樂園に

富士山の聳えてゐる日本に

——やつて來い早く、飛行機で

夜は夜で踊り、晝は晝で飲まう

日本娘は友禪の裾を翻がへし

灘からは生一本の上酒を積んでくる

イタリー語に似た日本語のアクセントで

娘等は君に酒をついでくれるよ

ダンヌンツイオ君早く來い 待つてるぞ

振れ振れ振れガブリエレ・ダンヌンツイオ?

## 漢方醫學餘談 終

昭和四年十二月二十日印刷  
昭和四年十二月廿五日發行

漢方醫學餘談

定價金貳圓

著者

中山忠直

發行者

中西政市



印刷者

山崎竹次郎

東京市小石川區東古川町十九

印刷所

萩原印刷所

東京市牛込區山吹町一九八

發行所

東京市小石川區  
大塚上町十五

中西書房

振替東京七二七〇五番